

第二部 一一〇年～一二〇年までの概観

第一章 教育活動

第一節 教育諸活動

一 一九一〇年間の諸行事

農業高校は本来の学習活動の他にも、学校行事、農業クラブ活動、部活動、生徒会活動など様々な活動から成り立っている。こうした諸活動は、学校教育でも人間形成上重要な位置を占めている。本校の教員には、「行事で生徒を育てる」という暗黙の了解があり、県下では学校五日制の施行で行事の見直しが行われたが、本校は精選を行わなかった。

この一〇年間の学校行事、田植祭、農文祭は農業高校の特色ある学校行事としてその伝統を受け継いで毎年開催し続けている。また、昭和六二年度から始まった一学年の演習林体験実習も、学年会行事と合わせながら宿泊で実施されてきている。さらに平成七年からはじまったインドネシア国際交流事業も着実に発展してきている。より計画的な深い交流を目指して、平成二二年度にはタンジュンサリ農業高校と隔年相互派遣の覚書を取り交わし、翌二三年には友好協定をさらに五年間延長した。本校の国際交流を通訳や交流助言など陰から支えていただいている田谷徹氏には、タンジュンサリ農業高校の卒業生二、三名を自ら経営する田谷農園で農業研修生として受け入れていただいております。タンジュンサリ農業高校との絆がより太くなっている。

戦後まもなく誕生し平成二四年度で六四年の歴史を刻む日本学校農業クラブ活動は、意見発表や農業鑑定などの競技を核に、活発に展開されてきている。頂点である全国大会に出場するには、校内予選を経なければならぬ農業鑑定競技、年次大会で出場権を競う平板測量競技、北信越大会で勝利して出場できる意見発表とプロジェクト発表など、学校および農く事務局が競争原理を持ち込んだことが、農業クラブ活動の活性化に繋がっている。

この一〇年の部活動では、何と言っても郷土芸能部の全国高等学校総合文化祭最優秀受賞や海外公演遠征などのめざましい活躍があげられる。平成二二年度には福井市文化奨励賞を受けるなど社会的にもその活動が認められた。また、農業系部では、平成一八年度に環境土木部が魚道の研究で日本水大賞を受賞するという輝かしい実績を残している。

生徒会活動は、生徒の発想を大切にしながら、生徒の手による生徒会運営が根付いてきている。体育祭や農文祭の生徒企画・運営のほか、生徒会ボランティア活動、東日本大震災での募金活動など時宜にあった生徒目線での活動が織り込まれている。

こうした行事の他にも、キャリア教育、防災教育、性教育、道徳教育、人権教育、環境教育など時代を反映した教育課題での諸活動も多

い。例えば平成二四年度は、啓蒙地区の総合防災訓練に本校生徒約三〇名が参加し、災害が起きた場合の高校生社会貢献の在り方について学んだ。

ここ一〇年、若者の働く環境が厳しくなっており、フリーター、ニート問題などもあって、社会との接続教育に課題を残している。若者の社会人基礎力、特にコミュニケーション能力などの不足が問題になっている。また、社会の急激な変化に対応するために若者の「生きる力」が学習指導要領に掲げられて久しい。こうした諸課題に対処するためには、学校という集団生活の中で、学習はもちろん諸行事での工夫した取り組みが求められており、本校はまさに学校行事など多様な取り組みのなかで、生徒を育てている。

平成二四年度の諸行事実績

- 四・一〇 対面式
 - 一一、一二 新入生オリエンテーション
 - 一九、二〇 農業クラブリーダー研修会
 - 二七 開校記念強歩大会（今立コース）
- 五・一五 生徒総会
- 一九 P T A主催講演会（東日本大震災に学ぶ）
- 二〇 非難訓練（講話、消火器消火訓練）
- 六・一〇三 春季高校総体
 - 一一 芸術鑑賞（演劇「あかひげ」）
 - 一二 田植祭（合唱コンクール、農業鑑定、ウォークラリー他）
 - 一九、二二 二工インターシップ（建設、測量、造園関係 一五社）
- 二四 啓蒙地区防災訓練参加（生徒三〇名）
- 二七 二生農業ボランティア（上志比・ニンニクの収穫）

- 七・六、九 球技大会（サッカー、バスケット、バドミントン）
 - 一〇、一二 二物、二流インターシップ（物・J A、農家 一五軒、流・流通関係 一六社）
- 一一 先輩からのメッセージ大会（卒業生八名）
- 二二三 三年生インターシップ（希望者一六名）
- 三一 年次大会（平板測量、意見発表、農業鑑定、プロジェクト発表）
- 八・二一 農ク北信越大会（意見発表、プロジェクト発表）
- 二四 中学生体験入学（学校説明、体験実習九コース）
- 九・五 体育祭（四色、競技、応援、集団演技、壁画、みこし、衣装）
 - 一一、一三 二生インターシップ（福祉・保育・菓子関係 一〇社）
 - 二五、二八 二年生修学旅行（北海道ファームステイ・空知地方）
 - 二五、二六 一年生演習林宿泊体験実習（林業実習、保月山登山他）
 - 二六 三年生遠足
- 一〇・九 二工農業ボランティア（松岡・ギンナン収穫）
 - 一〇、一七 タンジュンサリ農業高校 研究生二名受入
 - 二〇 オープンスクール（授業参観、部活動体験）
 - 二四、二五 農ク全国大会（農業鑑定・クラブ員代表者会議）
- 一一・二、三 農文祭
 - 一一・二、三 秋季高校総体
- 一二・七、八 球技大会（バレーボール・バスケット）
 - 一七 先輩と職業を語る会（卒業生一四名）
- 一・一七、二五 校内課題研究発表会（物・工・生・流）
 - 二・五 一年小論文発表会
 - 一二 二年小論文発表会
 - 一六 県課題研究合同発表

二 教育目標・教育方針

校 訓 「大地に生きる」

「自然に親しみ、大地を踏みしめ、誠実に生きる」

教育目標

- 自主・自律の精神を養い、情操豊かな人間を育成する。
- 知性を磨き、教養を高め、創造性に富む人間を育成する。
- 勤労を重んじ、心身ともに健康でたくましい人間を育成する。

努力目標

- 1 創意工夫による充実した教育を実践し、学習意欲の向上を図る。
- 2 集団生活の中で、自主的自律的態度を養う。
- 3 生命を尊重し、人間性豊かで心身共に健全な人間を育成する。

平成二四年度教育の重点的取組

- 1 活力ある学校づくりを推進する。
 - ① 生徒活動（生徒会・農業クラブ・部活動）を充実させ、活性化を図る。
 - ② 地域に情報を発信し、地域との交流を促進する。
 - ・ ふれあいマート、ふれあい農園、ふれあいハーブ園を充実させる。
 - ・ P T A、農友会と連携し、農文祭を盛り上げる。
 - ・ インドネシア共和国タンジュンサリ農業高校との相互交流、交換留学を進める。
 - ・ 産業界、研究機関等との連携を強化し、農業のスペシャリストの育成、専門教育の深化を図る。
- 2 目的意識を明確にし、学ぶことの意義を実感させる。

① 分かる授業、意欲の持てる学習活動と整理整頓された学習環境で、真剣に授業を受けさせる。

② 自他を理解させ、進路意識を醸成し、早めの進路決定をさせる。

- ・ 資格取得を進める。
- ・ 進学指導を強化する。

3 基本的な生活習慣を確立させる。

- ・ 計画的にキャリア教育を進める。

① あいさつの励行、遅刻防止の指導を徹底し、規律ある生活態度を育成する。

② カウンセリング活動を充実させ、問題の早期解決に努める。
この一〇年間の教育方針は、根幹のところは変わらないが、具体的な目標は教育の変遷とともに、変わってきている。

本校の教育方針は、昭和六二年度に明文化された校訓「大地に生きる」のもとで「教育目標」があり、それを受けて「努力目標」、「教育の重点的取組」と続き、具体化されていく。そして最後は、その年の「各部の重点的取組」でより細かな取組内容が決まっていくという仕組みになっている。従って、それぞれに書かれる内容も、目標が下位になるにつれ抽象的な内容が少しずつ具体的な教育内容になってくる。ここ一〇年の変化は、下位の「教育の重点的取組」で見ることが出来る。
まず、本校は平成一六年度から一八年度までの三年間、文部科学省から「キャリア教育推進地域指定事業実践協力校」に指定された。本校は、平成一四年度から導入された総合的な学習の時間を進路学習の時間としてきているが、それをこの指定を契機にさらにキャリア教育として充実発展させようということになり、指定の翌年、重点項目②の「目的意識を明確にし、学ぶことの意義を実感させる」の②で、それまでの「得意分野を自覚させ」を「自他を理解させ」に変更し、新

たに「計画的にキャリア教育を進める。」の項目を追加し、現在に至っている。キャリア教育は、平成一〇年代半ば頃から登場したもので、進路指導の概念を広げ、すべての教育活動で、全教職員で進めるべきものとされている。以後、キャリア教育計画を毎年職員会議で決定し、実践している。

また本校は、平成一八年度から二〇年度までの三年間「目指せスペースヤリスト研究開発校」に文部科学省から指定を受けた。そこで、「一、活力ある学校づくりを推進する。」の重点項目の中に、「目指せスペースヤリスト研究開発を進める中で、農業のスペシャリストの育成・専門教育の深化を図る。」が平成一九年度に登場する。この略称「目指せスペースヤリスト養成」をテーマに四学科がその学科の特性を生かしながら地域と連携して進めたもので、幻の伝統野菜「新保なす」の復活や、地元食材から製造された「うららのドレッシング」の商品化など大きな成果を残すことになったが、この事業を学校あげて進めようとのねらいから目標に掲げられた。なお、この目標は「目指せスペースヤ」指定終了後も、研究開発を継続することで目標にとどまる。

しかし、平成二四年度からは次世代人材育成会議の答申を受けて県の職業教育充実のための取組事業が始まって変更された。この事業は一一の事業からなる総合施策となっており、企業、研究機関との連携により最先端の技術を生徒たちに教えようというものである。本校は今までもインターンシップや商品開発で産業界との連携がされていたが、この事業によってすべての学科において産業界との連携をより強くし、さらには試験研究機関との連携を進めるべく実施されている。そこで、平成二四年度の教育の重点項目ではこれまでの「目指せスペースヤリスト研究開発を継続し」を、新たな項目「産業界、研究機関等

との連携を強化し」に包含されるものとし、変更された。

福井県の高校、とりわけ専門高校については生徒減少を背景に学校再編の時代に入っており、農業高校では若狭東高校や坂井農業高校が総合産業高校に再編されることになり、残った本校には農業の基幹校、拠点校としての役割が期待されている。こうした中で、本校の教育方針も農業高校として根幹は変わらずとも、具体的な目標は今後も時代を反映して変化していくものと思われる。

各学科の目標

1 生物生産科

作物や野菜など農産物を生産するための基礎的な知識と技術を習得させ、時代の進展に対応できる農業技術者を目指し、地域社会の発展に寄与する能力と態度を育てる。

2 環境工学科

土木・林業・造園に関する基礎的な知識と技術を習得させ、環境と調和した快適な生活空間を創造できる技術を身につけさせるとともに、地域社会の発展に寄与する能力と態度を育てる。

3 生活科学科

農業・家庭および福祉に関する基礎的な知識と技術を習得させ、家庭生活の変化に対応するとともに、地域社会の発展に寄与する能力と態度を育てる。

4 生産流通科

地域性を生かした農産物の生産や加工、流通に関する基礎的な知識と技術を習得させる。また農産物流通をはじめとした社会のサービス化に対応し、地域社会の発展に寄与する能力と態度を育てる。

平成四年の学科再編以来現在の四学科体制で変更はなく、各学科の目標は、改正なく現在に至っている。

教育課程表

三 教育課程の変遷

学科 学年 教科	生物生産科					環境工学科					生活科学科					生産流通科					
	科目	1	2	3	計	科目	1	2	3	計	科目	1	2	3	計	科目	1	2	3	計	
国語	国語総合	4			4	国語総合	4			4	国語総合	4			4	国語総合	4			4	
	現代文B		2	2	4	現代文B		2	2	4	現代文B		2	2	4	現代文B		2	2	4	
地理歴史	世界史A			2	2	世界史A			2	2	世界史A			2	2	世界史A			2	2	
	地理A		2		2	地理A		2		2	地理A		2		2	地理A		2		2	
公民	現代社会	2			2	現代社会	2			2	現代社会	2			2	現代社会	2			2	
	政治・経済			2	2	政治・経済			2	2	政治・経済			2	2	政治・経済			2	2	
数学	数学Ⅰ	4			4	数学Ⅰ	4			4	数学Ⅰ	4			4	数学Ⅰ	4			4	
	数学Ⅱ		2	2	4	数学Ⅱ		2	2	4	数学Ⅱ		2	2	4	数学Ⅱ		2	2	4	
理科	科学と人間生活	2			2	科学と人間生活	2			2	科学と人間生活	2			2	科学と人間生活	2			2	
	物理基礎					物理基礎	2			2	物理基礎					物理基礎					
	化学基礎		2		2	化学基礎		2		2	化学基礎		2		2	化学基礎		2		2	
	生物基礎		2		2	生物基礎		2		2	生物基礎		2		2	生物基礎		2		2	
保健体育	体育	2	2	3	7	体育	2	2	3	7	体育	2	2	3	7	体育	2	2	3	7	
	保健	1	1		2	保健	1	1		2	保健	1	1		2	保健	1	1		2	
芸術	音楽美術書道	2			2	音楽美術書道	2			2	音楽美術書道	2			2	音楽美術書道	2			2	
外国語	英語Ⅰ	3			3	英語Ⅰ	3			3	英語Ⅰ	3			3	英語Ⅰ	3			3	
家庭	家庭総合		2	2	4	家庭総合		2	2	4	家庭総合		2	2	4	家庭総合		2	2	4	
専門 科 教 育	共通	農業と環境	4			4	農業と環境	2			2	農業と環境	3			3	農業と環境	2			2
		課題研究			2	2	課題研究			2	2	課題研究			2	2	課題研究			2	2
		総合実習(内)		2	2	4	総合実習(内)		2	2	4	総合実習(内)		2	2	4	総合実習(内)		2	2	4
		総合実習(外)	1	1	1	3	総合実習(外)	1	1	1	3	総合実習(外)	1	1	1	3	総合実習(外)	1	1	1	3
		農業情報処理	2			2	農業情報処理	2			2	農業情報処理	2			2	農業情報処理	2	2	2	6
		植物バイオ	3			3	植物バイオ	3			3	植物バイオ	3			3	植物バイオ	3			3
	緑化	食と農業			2	2	食と農業			2	2	食と農業			2	2	食と農業			2	2
		作物		3	3	3	作物		3	3	3	作物		3	3	3	作物		3	3	3
		森林科学					森林科学		4		4	森林科学		4	2	6	森林科学		2		2
		造園計画					造園計画		3		3	造園計画		3		3	造園計画				2
		環境緑化材料					環境緑化材料		2	2	4	環境緑化材料		2	2	4	環境緑化材料				
		農業土木設計					農業土木設計		4		4	農業土木設計		2		2	農業土木設計		2		2
土木	農業土木施工					農業土木施工		3	2	5	農業土木施工		2		2	農業土木施工					
	水循環					水循環		2		2	水循環					水循環					
選 択 科 目	進 学	国語表現Ⅰ			2	2	国語表現Ⅰ			2	2	国語表現Ⅰ			2	2	国語表現Ⅰ			2	2
		数学B			2	2	数学B			2	2	数学B			2	2	数学B			2	2
		英語Ⅰ	3	2	3	5	英語Ⅰ	3	2	3	5	英語Ⅰ	3	2	3	5	英語Ⅰ	3	2	3	5
	専 門	英語Ⅱ		4	4	4	英語Ⅱ		4	4	4	英語Ⅱ		4	4	4	英語Ⅱ		4	4	4
		課題研究		1	2	3	課題研究		3	3	3	課題研究		3	3	3	課題研究		3	3	3
		農業情報処理		2		2	農業情報処理		2		2	農業情報処理		2		2	農業情報処理		2		2
		農業機械		2	2	2	農業機械		2	2	2	農業機械		2	2	2	農業機械		2	2	2
		果樹		2		2	果樹		3		3	果樹		4		4	果樹		4		4
	理 科 専 門	化学			4	4	化学			4	4	化学			4	4	化学			4	4
		生物			4	4	生物			4	4	生物			4	4	生物			4	4
		農業経済		2		2	農業経済		4		4	農業経済		2		2	農業経済		2		2
作物			2		2	作物		4		4	作物		2		2	作物		2		2	
野菜		2		2	野菜					野菜					野菜						
普通科目	20	13	13	46	普通科目	20	13	13	46	普通科目	24	11	11	46	普通科目	20	13	13	46		
職業科目	10	14	9	33	職業科目	10	14	9	33	職業科目	6	16	11	33	職業科目	10	14	9	33		
選択科目	3	8	11		選択科目	3	8	11		選択科目	3	8	11		選択科目	3	8	11			
小計	30	30	30	90	小計	30	30	30	90	小計	30	30	30	90	小計	30	30	30	90		
ホームルーム	1	1	1	3	ホームルーム	1	1	1	3	ホームルーム	1	1	1	3	ホームルーム	1	1	1	3		
総合的な学習の時間	1	1	1	3	総合的な学習の時間	1	1	1	3	総合的な学習の時間	1	1	1	3	総合的な学習の時間	1	1	1	3		
合計	32	32	32	96	合計	32	32	32	96	合計	32	32	32	96	合計	32	32	32	96		
備考	(1) 2年進学・専門の選択はコミュニケーション英語Ⅱと専門科目の3単位とする。 (2) 3年進学・専門の選択はコミュニケーション英語Ⅲまたはコミュニケーション英語Ⅱ2単位と国語・数学の2単位と専門科目の4単位とする。 (3) 3年の選択理科は理科の選択または専門科目の4単位のいずれかの選択とする。																				

年間教育計画

月	行事予定		
	学校行事	教科	ホームルーム・部活動・生徒会
4	離任式、入学式、入寮式 新任式、始業式、対面式 1年オリエンテーション 心電図検査、身体計測、歯科検診 開校記念強歩大会、間接撮影 面接週間（1・2年）	ふれあい農園開園	生徒会入会式（対面式） 部活動紹介、ホーム役員選挙 ロングホーム計画作成（前期） 県農業クラブ代議員（第1回） 県農業クラブリーダー研修会
5	内科検診、耳鼻科検診 演習林実習（1工） 中間考査、スポーツテスト PTA総会、講演会、環境整備 避難訓練、読書会	測量士・測量士補試験 ふれあいマート開店	生徒総会 春季総体
6	芸術観賞、田植祭 内科検診 中高連絡会 PTA保護者懇談会（ふれあいトーク） 面接週間（3年）	簿記検定（全商）、秘書検定 英語検定（文科省1次） 危険物取扱者試験（丙、乙種） インターンシップ（2工）	春季総体、北信越高校総体 県農業クラブ代議員会（第2回）
7	期末考査、球技大会 卒業生からのメッセージ大会、 職場見学 保護者懇談会、終業式	ワープロ検定（全商）、（日商） 文書デザイン検定 家庭科技術検定（食調2・3・4級・被服4級） 販売士検定（日商） 英語検定（文部省2次） 情報処理技能検定 日本農業技術検定 インターンシップ（2物・2生・2流）	県民スポーツ祭 県農業クラブ年次大会 （意見発表、平板、農鑑）
8	全校登校日 中学生体験入学 夏期集中課外（3年）	毒物劇物取扱者試験 2級ボイラー技士試験	全国高校総体 全国高校総文 県民スポーツ祭 農業クラブ北信越ブロック大会
9	始業式、体育祭 修学旅行（2年） 演習林体験実習（1年） 遠足	英語検定（全商）	ロングホームルーム計画作成（後期） 生徒会役員選挙、ホーム役員改選
10	演習林実習（2工） 中間考査 環境整備 進路説明会（1・2年） オープンスクール	英語検定（文部省1次） トレース技能検定、文書デザイン検定 家庭科技術検定（被服3級）、情報処理技能検定 危険物取扱者試験（丙、乙種） 土木施工管理技術検定試験	国民体育大会 農業クラブ全国大会
11	農文祭 演習林実習（3工） 読書会 中高連絡会	英語検定（文科省2次） ワープロ検定（全商） 造園施工管理技術検定試験 漢字検定	新人大会 近畿高校総合文化祭
12	期末考査、球技大会 インドネシア農業研修生派遣 職業講話（2年） 保護者懇談会、終業式	家庭科技術検定（食調1級・被服2級） 文書デザイン検定	
1	始業式、推薦入学面接 期末考査（3年）	簿記検定（全商） 英語検定（文科省1次） 日本農業技術検定、情報処理技能検定 課題研究発表	
2	中間考査（1・2年） 期末考査（3年）	危険物取扱者試験（丙、乙種） 英語検定（文科省2次） 漢字検定 販売士検定（日商）	生徒会役員選挙 県農業クラブ代議員会（第3回）
3	卒業式、期末考査（1・2年） 入学者選抜学力検査 終業式	小規模ボイラー取扱者試験	蒼林発行

四 研究指定の取り組み

(一) 平成一六～一八年度

キャリア教育推進地域指定事業実践協力校

松下 巧

平成一六年度から三年間、文部科学省からキャリア教育推進地域指定事業実践協力校の指定を受け、美山地区の小中学校四校と本校が連携してキャリア教育の実践研究を行った。この事業の特徴は、一つの研究課題に小中高が連携しながら、それぞれがそれぞれの発達段階に応じた取り組みをすることで、より系統的・継続的なキャリア教育を行うところにある。

I 研究概要

一 研究主題

小・中・高等学校の系統的な指導による

望ましい勤労観、職業観の育成

Ⅱ「人間関係形成能力」と「職業理解能力」の育成を中心としてⅡ

二 研究仮説

小学校から高等学校までの発達段階に応じた系統的で継続的な指導や取り組みを展開することにより、「生きること」「学ぶこと」「働くこと」について前向きに考え、取り組もうとする児童・生徒が育つであろう。

三 研究の重点目標

(一)「人間関係形成能力」と「職業理解能力」の育成に焦点を当て、児童・生徒の発達段階に合った系統的な指導を行うための学習プログラムを開発し、実践する。

(二) 系統的で継続的な指導が行えるように、体験入学や文化祭交流、授業研究会などを通して相互理解を図り、小・中・高の連携を強化する。

(三) 家庭や地域社会、関係機関等の協力を求め連携を図りながら、体験活動を推進し、「働くこと」や「生き方」について考えることができるようにする。

小学校

- ① 自己及び他者への積極的な関心の育成
- ② 身の回りの仕事や環境への関心・意欲の向上
- ③ 勤労を重んじ、目標に向かって努力する態度の育成

中学校

- ① 肯定的自己理解と自己有用感の獲得
- ② 興味関心等に基づく職業観・勤労観の形成
- ③ 生き方や進路に関する現実的探索

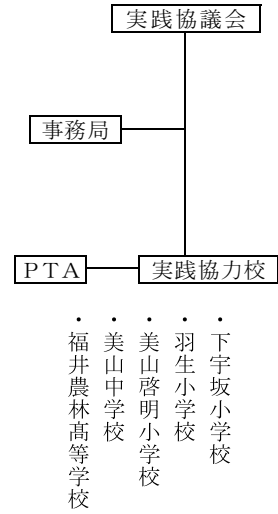
高等学校

- ① 自己理解の深化と自己受容
- ② 選択基準としての職業観、就労意識の形成
- ③ 進路の現実把握と試行的参加



小学校1年道徳「心を込めてありがとう」

四 研究実践のための組織



Ⅱ 研究の具体的取り組み

一 小・中・高連携プログラム

Ⅱ 発達段階に応じた人間関係形成能力の向上を目指した、「あいさつ」・「言葉づかい」を中心とした小・中・高連携プログラムの開発と実践 Ⅱ

○実践一 小学一年 ところをこめてありがとう

○実践二 小学四年 地域の人とのコミュニケーション活動を通して

○実践三 中学 あいさつ、言葉づかいに関する実践

○実践四 高校 場に応じたコミュニケーション能力の育成

二 授業研究会

Ⅱ 小・中・高の教員が各学校での授業を参観したり、授業研究会に参加したりして意見交換を行うことで、各学校段階での児童・生徒の発達状況を理解し、小・中・高系統的な継続的な連携を図る Ⅱ

○実践一 小学五年 道徳「努力の大切さ」 美山啓明小

○実践二 小学六年 国語「平和のとりでを築く」 下宇坂小

○実践三 中学二年 英語「出前授業」
○実践四 高校一年 総合学習「働く意義」

美山中
福井農林高

三 学校・家庭・地域・関係機関との連携

Ⅱ キャリア教育は、学校のみが行うものではなく、家庭、地域と連携してこそ実を結ぶ。協力校の児童・生徒同志の交流を進めながら、次の学校への進学を意識させ、また社会とつながることとで将来の社会人としての自分の姿を想像させる Ⅱ

○実践一 美山中学校学校祭への小学生、高校生の参加

○実践二 美山中学生が母校小学校への出前授業

○実践三 「職場体験」(中学)、「インターンシップ」(高校)

○実践四 キャリアアドバイザーによる講演会(小・中・高校)

○実践五 「職場見学」「米作り体験」「お店探検」(小)

Ⅲ 研究成果と課題

一 成果

(一) 小・中・高連携の今回の取り組みで、キャリア教育を推進するための組織・体制づくりが少なからずできた。教員間で学校訪問や授業参観を繰り返したり、研究会で意見を交換し合ったりして連携を深め、各学校の状況や児童・生徒の実態等に関して理解を図ってきた。それによって児童・生徒のよい点や問題点が明らか



美山中文化祭での本校生、小中学生交流

になり、取り組むべき点について共通理解することができ、系統性を考慮した深まった取り組みができた。

(二) 小・中・高校の系統性を念頭に置き、国語科や他教科、総合的な学習の時間・特別活動等との関連も図りながら作成した連携プログラムの基づいて、根気強く「あいさつ」や「言葉づかい」について指導を繰り返してきた。そうすることにより、児童・生徒の意識が高まり、好ましい「あいさつ」や「言葉づかい」が徐々にできるようになってきている。

(三) 職業理解能力の育成では、小・中・高の連携を図り、互いの情報交換をもとに各発達段階に応じた、かつ学校や地域の特色を生かした社会見学、職場体験、インターンシップなどの意義ある取り組みができた。このことにより、児童・生徒は「働くこと」や職業についての理解を深め、自分の学び方や生き方について考えることにつながった。

(四) 種々の活動をキャリア教育の観点に立ち、成長してほしい姿、身につけてほしい能力を念頭に置いて児童・生徒を見ることができるようになった。何か特別に新しいことを始めるのではなく、従来と同様の活動をする際にも四つの領域・能力を意識しながら、計画や支援、評価するなど、キャリア教育の視点を取り入れて活



校門での挨拶運動（美山中）

動できるようになった。

二 課題

(一) キャリア教育は、企業や関係機関との連携なしでは進まない。本研究でも、就業体験や社会人講演等において、個々の企業や講師の理解・協力を得てスムーズに実施することができ成果も上がった。しかし、就業体験を例にとれば、地理的条件や受入企業の負担などが障害となっており、生徒全員の希望がかなえられなかった。学校単位での啓蒙活動だけでは限界がある。上部機関を設置し、その機関での更なる啓蒙や生徒の交通費や受入企業のコスト等負担軽減のための助成措置など社会全体でのキャリア教育の推進に向けた環境整備が必要である。

(二) 本研究では、学校間の相互理解、共通理解を基に連携した取り組みを心がけた。しかし、共通理解は得られたが、具体的な目標設定や取り組みについては詳細な検討にまでは至らなかった。三校種の担当者が、現在の体制で時間を合わせるのが現実的に難しい状況があった。本格的に連携を密にしてキャリア教育を推進するためには、学校組織や業務内容の抜本的な見直しが必要である。

(三) 本研究では、その成果を主に生徒へのアンケートや感想文、教師の生徒観察によって測定した。しかし、その内容や実施時期が適切であったか、評価が主観的になっていないかなど検討課題が多い。キャリア教育によって児童・生徒の内面がどのように変化したのか、またその良い内面の変化がどれくらい定着したかなど、行動変容との関係でどのように測定、評価していけばよいかについての研究が必要である。

Ⅳ 本校の取り組み

一 取り組み

この研究指定を受けて、これまで総合的な学習の時間で行ってきた進路学習をさらに体系的に実施するため、新たにキャリア教育推進委員会を設置して、小・中学校との連携事業とは別に本校独自の次の5つの課題を設けて取り組んだ。

1 教科、総合的な学習の時間、特別活動の時間に系統性を持たせた指導の実践

▽一年生から三年生までの総合学習の内容を体系化し、総合学習、HR、特別活動などでのキャリア教育指導年間計画を職員会議で決定して行うようにした。

2 開かれた学校づくりを通して、人間関係形成能力を高める

▽生徒のふれあい農園、ふれあいマート活動を通じた人間関係形成能力の育成について研究した。

3 体験活動を通して働くこと、学ぶことへの意欲を高める

▽従来の二年生のインターンシップに職業人インタビューを加えるとともに、新たに進路選択に合わせた三年生のインターンシップを希望する生徒に始めた。

4 保護者へのキャリア教育の意義、必要性の啓発

▽グリーンメールでの「キャリアコーナー」の設置、進路に関する保護者アンケートの実施、進路説明会での保護者向けの進路講演会など、新たな取り組みで、保護者にキャリア教育の必要性を啓発した。

5 自己啓発ノートを利用した自発的なキャリア学習の推進

▽生徒全員にファイリングのできる自己啓発ノートを持たせ、記録させるとともに、一つの活動ごとにメモを取り、感想を書かせる

指導を進めた。

以上の実践を受けて、キャリア教育のこうした取り組みの成果と課題を明らかにするため、生徒に対し「進路学習に対する評価アンケート」を実施するとともに、自分自身のキャリア意識を自己評価させた。

二 成果と課題

- ・校内にキャリア教育推進委員会を設置し、全校体制でキャリア教育を推進できる体制が構築できた。

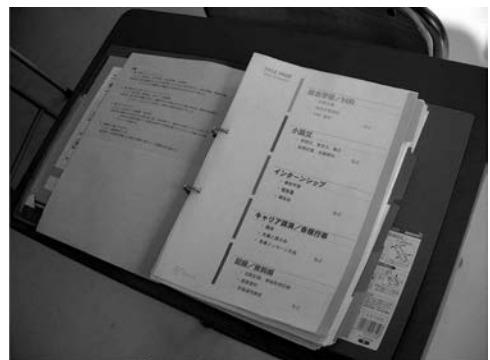
- ・学校教育全般をキャリア教育の視点で見直し、より計画的に幅広くキャリア教育を実践しなければならないという意識が教員に芽生えてきた。

- ・総合学習や進路指導に対する生徒評価を実施し、その後の改善に資することができた。

- ・一年生から計画的に段階的にキャリアに関する学習を生徒たちはしてきているが、やりっぱなしの観が否めない。一つ一つの学習に対して成果を確実なものにし、キャリア発達を促す観点から、キャリアアカウンセンリングの充実が必要である。

- ・各教科、学校行事でのキャリア教育の視点での取り組みが不十分である。

- ・生徒の実態に応じた、学校の特色を生かした重点的な取り組みが必要である。



自己啓発ノート

「あいさつ」・「言葉づかい」を中心とした小・中・高連携プログラム
一人間関係形成能力の向上をめざしてー

区分	小学校		中学校	高等学校
	低学年	高学年		
目標 (能力・態度)	<input type="checkbox"/> 基本的なあいさつや返事ができる <input type="checkbox"/> 素直なところで、感謝の気持ちが表現できる <input type="checkbox"/> 思いやりの気持ちを持ってあいさつをしようとする	<input type="checkbox"/> 相手の気持ちを理解しようとする <input type="checkbox"/> 思いやりの気持ちを持って、相手の立場に立ってあいさつができる <input type="checkbox"/> 相手を思いやる言葉や表現の基礎を知っている	<input type="checkbox"/> 他者に配慮した、あいさつをすることができる <input type="checkbox"/> 敬語を使うことができる	<input type="checkbox"/> 状況や立場に応じて、工夫したあいさつができる <input type="checkbox"/> マナーとしての敬語使用や、豊かな敬意表現をすることができる
具体的課題	◇「おはようございます」「さようなら」が言える ◇名前を呼ばれたとき「はい」としっかりした返事ができる ◇「ありがとう」「ごめんなさい」が言える	◇自分から、相手にわかるようにあいさつをすることができる ◇相手、時、場所に合ったあいさつや言葉遣いについて理解する ◇「です」「ます」など丁寧な言い方ができる	◇相手に、真心と敬意を込めてあいさつができる ◇円滑な人間関係を築くことを念頭に置きあいさつができる ◇相手との関係を意識した、言葉遣いができる	◇社会人のマナーとしてのあいさつ、言葉づかいについて理解し、身につけようとする。 ◇教員、学校訪問者に対して、多様なあいさつ、声掛けができる。 ◇会話のなかで、自然に敬語が使用できる
教育内容	【意識啓発教育】 ・全校朝礼や集会等での訓話 ・道徳学習を通じた意識啓発 【知識教育】 ・国語<話の聞き方> ・日常生活指導 【実践教育】 ・日常でのあいさつや言葉遣いの実践 <廊下での挨拶、職員室の出入り、来客に対してのあいさつ、教員との会話など> ・地域の人を迎えたときの挨拶実践	【意識啓発教育】 ・全校朝礼や集会等での訓話 ・道徳学習を通じた意識啓発 【知識教育】 ・国語科・総合学習 <敬語の種類、使い方> <見学依頼状、礼状、インタビューの仕方> 【実践教育】 ・日常でのあいさつや言葉遣いの実践 <廊下での挨拶、職員室の出入り、来客に対してのあいさつ、教員との会話など> ・自然教室や修学旅行での他校児童や地域の人との交流 ・見学や体験学習での地域の人との交流での実践	【意識啓発教育】 ・全校朝礼や集会等での訓話 ・生徒会活動を通じた意識啓発 <啓発ポスター> ・道徳を通じた意識啓発 【知識教育】 ・国語科 <敬語の使い方・手紙の書き方、インタビューの仕方> ・総合学習 <職場体験でのあいさつ、礼儀、敬語> 【実践教育】 ・日常でのあいさつや言葉遣いの実践 <廊下での挨拶、職員室の出入り、来客に対してのあいさつ、教員との会話など> ・職場体験での実践 ・生徒会運動 <「生活4原則」の実践> ・部活動での実践	【意識啓発教育】 ・全校集会等での訓話等 ・小論文指導の中での意識啓発教育 <あいさつに関するリード文を読んだの意見文> 【知識教育】 ・インターンシップ事前教育 <あいさつ、礼儀、敬語> ・総合学習でのマナー教育 <敬語の使い方、電話の話し方、社会人としての心構え> 【実践教育】 ・日常でのあいさつや言葉遣いの実践 <廊下での挨拶、職員室の出入り、来客に対してのあいさつ、教員との会話など> ・生徒会あいさつ運動 ・インターンシップでの実践 ・ふれあいマート、農園での実践 ・修学旅行「ファームステイ」での実践
	地域・家庭と連携した挨拶運動 <地域懇談会・学校、学級だよりでの家庭への啓蒙>			

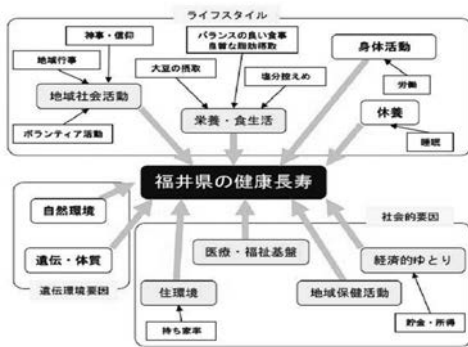
(二) 平成一八〇二〇年度

目指せスベシヤリスト

酒井 康旨

目指せスベシヤリストとは文部科学省が産業教育の振興を図るための事業で、平成一五年度から先端的な技術等を取り入れた教育や伝統的な産業に関する学習を重点的に行うなど、特色ある取組を行う専門高校を「目指せスベシヤリスト」として指定し、将来のスベシヤリストの育成に係る教育の教育課程等の改善に資する研究開発を行っている事業である。

福井県は平成一二年に平均寿命が男女とも全国二位(平成一七年は男子四位、女子一位)となり、その後その地位を維持する日本を代表する健康長寿な県となっている。そこで県では平成一六年度、福井県の健康長寿の要因を探るため、さまざまな統計調査、文献等をもとに検討を行い、また、県民の栄養や健康面等の調査も開始した。県の健康福祉部が中心となり、福井県の健康長寿を多角的に分析し、考えられる五つの要因を浮き彫りにした。その第一番目に「福井型食生活」の重要性をあげている。この福井型食生活を支えるものとして福井県に独特な食材が考えられ、その代表として伝統野菜をあげ、県でも伝統野菜を見直し、食品加工研究所を中心に伝統野菜の有効成分の分析にも着手し始めている。そこで、本校は地域に根ざした農



福井県の健康長寿を支える諸要因のイメージ

業高校として、伝統野菜を福井の健康長寿を支える食材ととらえ、その保存と流通・普及を担うこととしたことが研究開発の契機である。

なお、福井県内には約三〇種の伝統野菜があるが、「福井県独特の品種があること」「福井県内での栽培面積が広いこと」「福井県内での消費量が多いこと」「薬理効果が解明されていること」の四つの観点からラッキョウ・ナス・ウメ・シソの四つを教材とすることにした。

本研究では伝統野菜の遺伝資源としての保存・育種とその加工流通技法習得のためのプログラムを研究開発するものである。

研究指定期間は、平成一八年五月九日から平成二二年三月三十一日までの三年間で、研究開発課題(研究テーマ)は「健康長寿日本一の食材づくりを目指した将来の農業のスベシヤリスト養成」とした。

研究開発の概要は、①伝統野菜の遺伝資源としての保存・育種とそのための栽培環境の整備、さらに加工・流通のためのプログラム開発、②伝統野菜の栽培技術や採種法、組織培養による増殖法の習得、また、耐病性・耐虫性の高い品種の開発、③伝統野菜の販売を通じた地産地消の推進、郷土料理の掘りおこし・再現・福井型食生活の献立提案や食材の加工・調理である。

研究開発の特徴は、①四学科が学科目標に沿って役割分担し、学校全体として組織的な取組み、②全学科の生徒が履修し、福井県の健康長寿を支える人材の育成を図るための実用書として新たな学校設定科目(食と農業)の設置、③産業界や研究機関等との連携である。



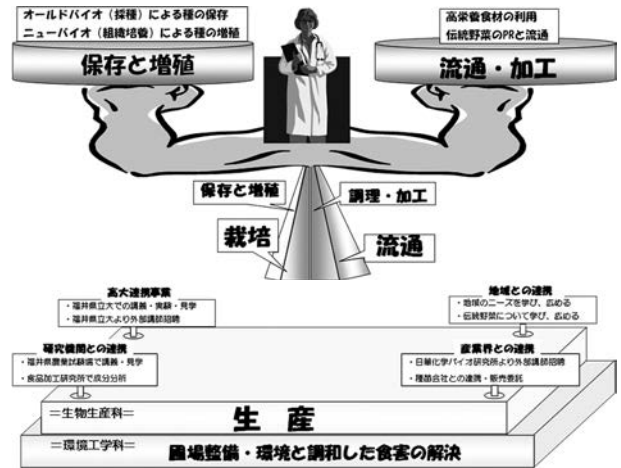
福井の伝統野菜マップ

目にはしない)とし、単位数は全学科二単位とした。内容は、全学科共通部分(二五時間相当)と学科選択部分(四五時間相当)に分け、全学科共通部分は座学だけでなく、実習も組み入れた。主な共通部分の単元としては、農業の役割、健康長寿の要因、伝統野菜と長寿との



「食と農業」表紙

学科の生徒が健康長寿に係わる基本的知識や技術、さらに各学科の専門性を生かした応用的な知識や技術を身に付けさせ、福井県の健康長寿を支える人材の育成を図ることである。履修学年は全学科三年生、履修スタイルは全学科生徒全員履修(選択科



「健康長寿日本一の食材づくりを目指した将来の農業のスペシャリスト養成」イメージ図

各学科に研究分野を次のように分担した。「食材の生産・保存・育種」を生物生産科、「食材の流通」を生産流通科、「食材の加工・調理」を生活科学科、「栽培環境の整備」を環境工学科である。また、新たな学校設定科目「食と農業」を設置した。設定の目的は、全

関わり、食育と地産地消、伝統野菜とは、地域の活性化などで、この科目は農業の科目とした。一、二年次の農業の科目の中で簡単な基礎基本を学び、三年次の「食と農業」と「課題研究」で、基礎基本を定着させ、知識や技術を実践させる位置づけとした。

産業界や研究機関等との主な連携先としては、(大学関係) 福井県立大学、仁愛女子短期大学、(研究機関) 福井

県農業試験場、食品加工研究所、若狭湾エネルギー研究センター、(産業界) フク醤油株式会社、アップル流通株式会社、ファームビレッジさんさん、(学校関係) 啓蒙小学校、福井南看護学校、(その他) 福井県栄養士会、鯖江市役所、啓蒙壮友会、たねとりくらぶ などがある。

運営指導委員会(外部評価)を年一回以上開催し、取組み状況の報告や適切な助言をもらった。運営指導委員は大城閑(福井県立大学生物資源学部教授)、谷洋子(仁愛女子短期大学教授)、坪田洋次(平成一八年度)・吉岡均(一九年度)・小竹哲郎(二〇年度)(福井農林総合事務所長)、高畑芳晴(福井県Aコープ株式会社運営課長)、西田哲章(福井県若原青年の家所長)の五名にお願いした。開催日は、平成一八年二月二五日(月)、平成一九年五月三〇日(木)、平成二〇年二月二七日(水)の生徒中間発表会、平成二〇年十一月二日(火)、平成二〇年二月二一日(木)の研究発表会の五回である。



第1回運営指導委員会

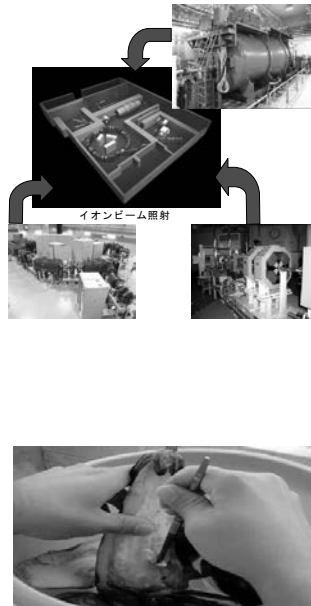
I 研究事項

一 生物生産科・伝統野菜の保存・育種

1 生徒への研究に対する興味づけ
 2 イオンビーム照射法を利用した新品種作りと健康長寿

福岡県敦賀市にある若狭湾エネルギー研究センターに協力を得て、イオンビーム照射法により突然変異を誘導した。

- ・ナス嫌いをなくす品種の作出
- ・ピーマン嫌いをなくす品種の作出



3 伝統野菜ナスの保存と増殖

a 伝統野菜ナスのタネの採種法、種子の保存法

b 新保ナスの発芽率調査（ポット、無菌）

MS培地に無菌播種し、培養苗から組織を摘出（葉、根、節）

c 無菌播種による保存（無菌培養法）

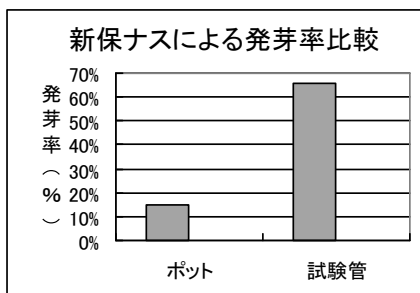
d 伝統野菜ナスの採種、育苗と組織培養による大量増殖

4 ラッキョウの栽培調査

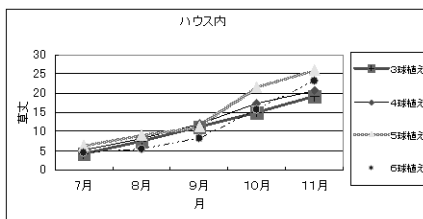
a 栽培条件を変えた研究（ハウスと露地に三〜六球定植）

ハウス栽培では五球植えが最も良く成長

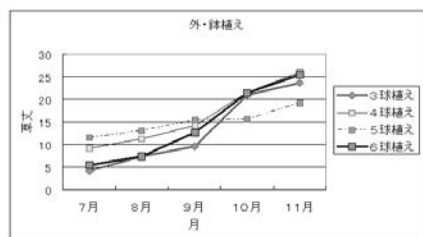
露地栽培では六球植え及び、三球植えが最も良く成長



ハウス栽培



MS培地に組織培養



二 生産流通科…伝統野菜の流通

1 伝統野菜の栽培研究と伝統野菜産地の現状を確認し利用拡大

- a 伝統野菜産地の見学（穴馬かぶら、河内赤かぶら、吉川ナス、マナなど）



穴馬かぶら加工場見学



河内赤かぶら産地見学



吉川ナス産地見学

- b たねとりクラブの全国大会（池田町で開催）に参加

2 伝統野菜の販売（ふれあいマーケットでの販売）

- 新保ナス、妙金ナス、立石ナス、吉川ナス、木田チリメンジン、河内赤かぶらなどを販売



新保ナス・吉川ナス販売



河内赤カブラ販売



民間保存の在来種展示紹介

3 伝統野菜のPR活動

- a 福井テレビ（おかえりなさい）のPRコーナーに出演
- b ふれあいマーケット前の花壇でのナスの実物展示

4 ポスシステムの有効な活用

導入されたポスシステムを利用して、販売の学習・販売内容の検討などを行った。この他にバーコード入力方法や取り扱いなど従来にないシステムで、ふれあいマーケットでの販売に臨んだ。

5 農文祭や各地のイベントに参加

- a 農文祭での販売
- b 福井グランドモール秋の市での販売
- c フラワーグリーンセンターでの販売
- d 農業水産高校フェア（県庁一階）での販売



地元テレビ番組でのPR活動



ポスシステム



ナスの展示
（左から吉川・立石・妙金・新保ナス）

三 生活科学科・伝統野菜の加工・調理

1 食生活を見つめる学習

a 外部講師による栄養講座

- ・食の選択力向上出前講座
- ・特別支援学校との給食交流

b 伝統野菜、郷土料理についての学習

- ・魚をさばける福井人
- ・お米と郷土料理の学習会
- ・小浜食文化館での体験実習と朝食メニュー作り
- ・梅の講習会

2 伝統野菜・食生活についての知識を広める学習

a 生徒が運営する食育活動

- ・食育教室に向けてのオリジナルグッズ、替え歌作り
- ・保育園での食育活動
- ・その他の食育活動



福井グランドモール秋の市での販売



農業水産高校フェア（県庁1F）での販売



「魚をさばける福井人」実習

3 調理実験の基礎学習

a 食品加工研究所にて

- ・全国高校生食育王選手権
- ・全国高校生による食生活改善研究「I&Y ou 食生活」

b 調理実験の基礎学習

- ・食品のPHと米の食味を測る
- ・仁愛女子短期大学にて
- ・野菜の色の加熱による変化
- ・その他の測定機器

4 食品加工の基礎学習

a ラッキョウの利用

- ・ラッキョウ漬け↓うららのドレッシング（オリジナル商品）
- ・ラッキョウチップス

b 地域の伝統野菜「新保ナス」の取り組み

- ・啓蒙小学校との交流
- ・啓蒙壮友会との交流
- ・その他の発表活動



うららのドレッシング



食品加工研究所にて



新保ナス啓蒙小学校との交流

b ナスの利用

- ・干しナス↓真空凍結乾燥機を利用
- ・ナスジャム↓農産物直売所イベント、啓蒙小学校で試食
- ・ナッスイーツ↓仁愛女子短大教授と商品開発審議

c シンの利用

- ・梅干し
- ・シソ茶↓真空凍結乾燥機を利用、着色料として活用
- ・梅シソ利用↓調味料として利用、しそご飯など

d ウメの利用

- ・学校の果樹園のウメを加工
- ・梅干し↓うららのドレッシング(オリジナル商品)
- ・梅ジャム↓保護者対象料理講座開催
- ・梅シロップ↓特別支援学校との給食交流、中学生体験入学にて調理
- ・梅ゼリー↓特別支援学校との給食交流、中学生体験入学にて調理

e 真空凍結乾燥機

5 食品加工の応用学習

a 伝統野菜の調理法

- ・伝統野菜の薬理効果の利用
- ・真空凍結乾燥機の利用

b 福農オリジナル商品開発↓うららのドレッシング(オリジナル商品)



真空凍結乾燥機



学校給食でドレッシングが登場

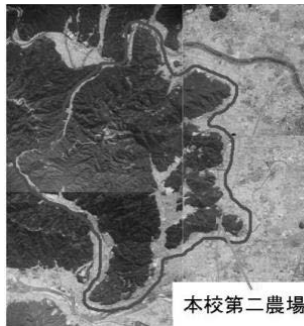
四 環境工学科…伝統野菜の栽培環境の整備

1 環境調査の基礎学習

- a 野生動物についての事前学習
- b クマによる果樹被害の実態調査
- c 講演会



獣害対策基本講座



本校第二農場

森林調査範囲



センサーカメラで撮影されたツキノワグマ

2 生態系保全工法の基礎学習

環境科学基礎で環境保全学習

3 環境調査の応用学習

a 森林調査と森林適正管理

・航空写真による森林調査

・イノシシ被害実態調査

b 森林整備とイノシシ出没抑制

について

・森林状況調査、森林整備の実施

・イノシシ出没調査

c 栽培環境調査

第二農場斜面の森林



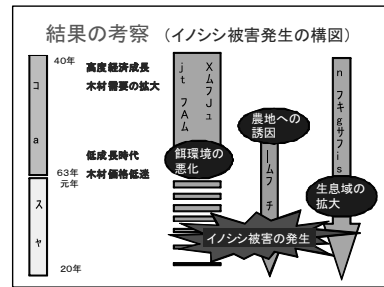
森林調査範囲



伐採前



伐採後



イノシシ被害発生メカニズム

4 生態系保全工法の応用学習

a 防護柵による食害防除

・防草シートの敷

設、電気柵の設

置、電気柵の管

理、物理柵の設

置

b 忌避野菜による

食害防除

・シンの栽培と忌

避効果

・ミントの栽培と

忌避効果

c 柚子による忌避

効果の研究

5 先進地見学及び地域

との交流

a イノシシ祭・狩

猟によるイノシ

シ捕獲現場見学

b 鳥獣害のないま

ちづくりワーク

シヨップ見学



イノシシ祭(イノシシに関する講演)



成長したシン



電気柵の取扱説明



6号圃の周囲に防草シート



鯖江市西袋町の見学



成長したミント



竹を使った物理柵の設置



敷設樹園地の周囲に電気柵設置

Ⅱ 効果とその評価

一 生物生産科・伝統野菜の保存・育種

1 生徒への効果

研究のキーワードを「採種」と「バイオテクを利用した保存」と決めアンケートを行った。三年生への効果については、最終学年になると、課題研究のテーマとしてバイオテクノロジーを利用した保存法・増殖法の研究を行う生徒や突然変異の誘発、分岐性の継続研究を行う生徒が現れ、九〇%を超える生徒がキーワードについて理解し、身になるものになったことを確信した。

2 教職員への効果

- a 安全な食材についての興味関心が増え、外部講師を招聘しての講演会を希望する声が増えた。
- b 突然変異誘発技術利用についての興味関心が増えた。
- c 最終発表会を通し、育種技術や伝統野菜に関して理解がさらに深まった。

3 保護者への効果

- a 伝統野菜の果実の提供を希望する保護者が現れ、興味関心を増やすことができた。
- b 伝統野菜の苗の提供を希望する保護者が現れ、実際に栽培・採種を行う保護者が現れた。このことにより興味関心を増やすことができた。

4 学校運営への効果

生産流通科との連携により、ふれあいマーケットによる販売を行うことができ、地域の方にも伝統野菜のPRができた。

二 生産流通科・伝統野菜の流通

1 生徒への効果

課題研究の三年目のまとめ発表をマーケット班と共同で行い、その産地の現状、仕入れ、販売までに至る知識や調理方法など学習できた。ふれあいマーケットでは、販売食材の知識を基に各地域のイベントに参加し、伝統野菜の感触を理解した喜びは大きい。

2 教職員への効果

直接担当する教員は一部であるが、集約などで協力体制ができた。また販売を通して福井県の伝統野菜の存在価値を理解してもらえたものと自負している。

3 保護者への効果

三年間の研究の間、グリーンメールで広報してきたので、それなりの効果はあったと考えているが、販売数量そのものがまだ多くなく、今後販売量・種類の拡大の中で一層保護者への浸透が期待できる。

4 学校運営への効果

栽培不可能なものに対しては、適期に仕入れを行い安価で提供していきたい。その中で地域の紹介を行い地産地消の一役を担うことができるようしていけば、伝統野菜と我が校の結びつきが強くなると考える。

三 生活科学科・伝統野菜の加工・調理

1 生徒への効果

a コンクールの成績

- ・第二回全国高校生食育王選手権大会 第六位(三年次)
- ・牛乳・乳製品利用料理コンクール福井新聞社賞(二年次)
- ・毎日農業記録賞高校生部地区優秀賞(二、三年次)

・ごはんCUP2008決勝大会進出(三年次)

・高校生による食生活改善研究活動「I & You 食生活」栄養改善普及会会長賞(二年次)

b 地域交流の取り組み

・すべての生徒が成長を実感している結果であった。約八割の生徒がこの取り組みを通して「調理技術が習得できた」と記述していた。

・今後の生活に生かしていきたいこととして、「習得した調理技術を自分の食生活に生かす」「栄養や安全面から食生活を見直したい」と記述した生徒も約七割であった。その他、「食と人間との関わりやつながり」「他の人にも学んだことを広げていく(地域交流への意欲)」「新たな商品開発への意欲」「自身の進路選択につながった」という記述もあった。これらの結果から、ねらいを達成するために身につけるべき力とした「基礎的な知識・技術」「自律的に行動する力」「コミュニケーション力」に結びつくものであり、加工・調理のスペシャリストに大いに近づいたと考えられる。

2 教職員への効果

a 教職員自身のパワーアップに繋がった。

仁愛女子短期大学での商品開発に関わる研修、食育シンポジウム等の講演会や講習会への参加、「食品衛生責任者」の資格取得、授業研究会の実施などの研修や活動を通して、教職員自らが新たな知識や技能の習得をめざし、地域や関係者との交流に努めた。生徒へ還元させるために始めた研修や活動が、教職員自らも研究を通じてつけた三つの力「知識や技能」「自律的に行動する力」「コミュニケーション力」を身につけることがで

きたと考えられる。

b 学科教職員の連携が強化した。

県内外の大会への生徒引率では担当教員以外も休みを返上して協力したり、梅が足りなければ全員で知人の山に収穫に赴いたり、空き時間に商品開発の実験をしたりと、それぞれの役割を持って互いに協力し取り組むことができた。このような協力体制をとることができたことが研究の成果に結びついたと考えられる。

3 保護者等への効果

三年間この研究に携わってきた三年年の保護者にアンケートを取った。「この取り組みはお子さんにとって良かったと思われるか。」はい(三二人)いいえ(〇人)。「はい」と答えた理由は、学習意欲が向上した(八名)、食や農についての知識が向上した(二二名)、生活技術の習得がみられた(二二名)、コミュニケーション能力が向上した(七名) 複数回答あり。

4 学校運営への効果

a 営業許可取得

「そうざい」菓子「つけもの」の営業許可の取得により、加工品が販売できるようになった。

b 関係機関との連携

うららのドレッシングの販売に際して、福井県学校給食会に全面的な協力をいただいた。商品化し販売する過程での安全面や衛生面の配慮について、細部まで指摘していただき、学校側では気づかなかった点がわかり、より安全性の高い商品を製造することができた。また、加工においては(株)フク醤油、保管配送においては(株)アップル流通とのパイプ役をしていただいた。

また、本学科の活動が報道機関に多く取り上げられたこともあり、自治体や地域から、商品の研究開発（例えばサラダ人参をどう普及させるか）や発表等の依頼があった。学校が情報発信の核になりつつあるといえる。その他、生産者からも地元の農産物や魚などの消費拡大を図るため、今後も学校と関係機関とが連携して、若い世代に生産物の加工・調理の仕方を教えて欲しいと望まれている。

四 環境工学科・伝統野菜の栽培環境の整備

1 生徒に対する効果

アンケートの結果、特に環境問題や野生動物との関わりについては、強く興味関心を持つ生徒が増えた。生態系保全に関する活動や、獣害の現状とその対策についても年々関心が高まっていった。野生動物についての関心や共生の必要性についても、一年次に比べ数値は上昇した。逆に、環境保全活動や環境問題を解決するための活動の必要性については、強く感じる生徒の割合が一年次が最高で以後伸び悩んだ。環境問題は生態系のような自然のものだけでなく、化学的あるいは物理的にも捉えていく必要がある。今回は、獣害問題に取り組んだことで、自然的な環境問題への関心については十分に高めることができた。しかし、生徒達に環境問題について聞いてみると、多くの生徒が真っ先に地球温暖化、CO₂削減などを挙げる。それらの問題が、生態系に大きな影響を与えることを改めて理解させ、身近なところから環境保全活動や環境問題を解決する取り組みをしていくことの大切さを、様々な授業や実習、現場見学等を通して感じ取れるような指導が必要である。そして、十分に意識を高めた上で三年次に履修予定の「食と農業」に繋げていきたい。

2 教職員に対する効果

環境調査ならびに生態系保全工法の学習分野において、実習前の準備や第二農場での実習中、さらに次回の実習に向けて頻繁に連絡を取り合い、スムーズな実習を心掛けることができた。また、第二農場ならびに生物生産科の実習教員の協力も得られ、計画通りに実習を行うことができた。

クラス全員が参加した「イノシシ被害と防除に関する現場見学」は、学科の教員六人も一緒に参加し、生徒とともにイノシシと人間の関係について考える機会となり、学科に一体感が生まれた。

3 保護者に対する効果

環境調査の学習分野では、生徒の保護者に対して野生動物による農作物被害の実態調査、環境調査ならびに環境配慮型の食害防除法の研究に役立てることを目標に、獣害に関するアンケート調査を行った。研究初年度に実施したため、全体的に関心が低く、回収率が低調に終わったことは残念であったが、保護者に対して本学科が取り組む内容を伝えることができた。

4 地域に対する効果

環境調査の学習分野では、地域住民へのアンケートを実施した。山林に接する地域の農業は、イノシシやクマ等の獣害に悩まされていることから、学校周辺地域へのアンケート調査や地域猟友会との接触を通して、学校が調査研究を始めたことに期待が寄せられ、結果のフィードバックを求められると同時に、クラス等他の獣害についての調査研究への期待も示され、地域と密着した活動が展開できた。

生態系保全工法の学習分野では、電気柵設置においてJA福井

市、木田ジソの種子を入手するため木田蔬菜出荷組合、電気柵の資材やシソ・ミントの種子の購入にあたり福井シード株式会社と連携できた。

Ⅲ 問題点と今後の課題

一 生物生産科・伝統野菜の保存・育種

a 伝統野菜の栽培技術の習得と化学的分析による成分比較技術の習得
・継続的に伝統野菜を栽培し、栽培技術のスペシャリストを養成する。

・DPPHラジカル試薬を利用して抗酸化性の測定を行い、標準種千両二号と伝統野菜の成分を比較し、健康長寿との関連を継続的に調べる。

b 伝統野菜の採種法の習得

・継続的に採種し、保存を継続的に行っていく。

c 伝統野菜の組織培養による増殖法の習得

・節培養による伝統野菜の保存法の再現性をとる実験を行う。

d 多分岐性の継続的な追究

・露地圃場による発生率調査を行う。
・無菌播種による発生率調査を行う。

e 新品種野菜育種法の習得

・イオンビーム照射種子より生育させた品種の継続的な栽培
・発芽できなかつた理由を探索する

二 生産流通科・伝統野菜の流通

a 伝統野菜の仕入れの増大とその販路の確保

・耕志会をはじめとした福井市内農家との連携
・県内企業、JA等の販売流通の連携

b 伝統野菜の現地調査の拡大

c 伝統野菜の販売所・加工所等の見学
三 生活科学科・伝統野菜の加工・調理

a うららのドレッシングの販路拡大

b 伝統野菜を使ったオリジナル商品第二号の研究

c さらなる食育活動の推進

四 環境工学科・伝統野菜の栽培環境の整備

a 実習の安全対策については、クマ鈴等を携帯し実習に取り組んでいきたい。

b 福井県内の関係者だけではなく、全国で獣害や防除に関わっている人たちと相互交流を目指したい。

c 環境調査の学習については、生徒自身の研究に対する充実感が得られるように、生徒自身の手で行う「課題研究」にしていきたい。

d 生態系保全工法の学習については、本年度までに行った防護柵や忌避野菜等による食害防除の問題点を解決し、他の防護柵や忌避効果のある品目を作付けし、効果を検証するとともに、環境配慮型の食害防除の取り組みを第二農場全体に広めていきたい。

(三) 平成二四、二五年度

福井県視聴覚教育研究会（福井・吉田大会） 研究委嘱校

岩尾 弘康

平成二四、二五年に福井県視聴覚教育研究会（福井・吉田大会）の研究委嘱校となり、高校の部は二五年一月二一日、本校を会場に県内の高校教諭を中心とした五〇名あまりの参加を得て、公開授業、授業研究会、研究発表などを行った。

この大会は、幼小中高の各校種が、統一テーマのもとICT機器を利用した効果的な授業法を研究しその成果を発表する大会で、二年に



一度県内四ブロックもちまわりで開催される。今年度は福井・吉田ブロックが担当となり新田塚幼稚園、森田小学校、足羽第一中学校と本校が研究を委嘱された。本校では平成二四年五月の職員会議で、「福井県視聴覚教育研究大会準備委員会」を立ち上げた。この組織は松下教頭を委員長に、図書部、情報委員会代表、各教科・学科主任からなり、図書部に事務局を置いた。

平成二四年度は「主体的に学び、豊かに生きる力を育む視聴覚教育のあり方を追求しよう」という大会テーマを受けて、後述したように本校の研究主題、主題設定の理由、研究方針、研究計画などを決定し、各教科・学科で視聴覚機器を利用した授業を実践し、「効果的な利用について研究する」という目標で取り組んだ。その結果一五の実践が報告された。

DVDやCDの視聴から、パワーポイント、デジカメの利用による実技や実験の指導、Skypeによるテレビ電話などの様々な機器・ソフトを利用した取り組みが実践され、「効率よくスムーズな授業展開」、「時代背景や思想の理解に役立つ」、「写真利用で評論教材の筆者の論が自分と関わる出来事として理解された」、「モニターで確認することにより問題点を共有できる」というような利点が挙げられた。また、「衝撃の強い実験（屠殺など）は事前に映像を見せることにより少し緩和された」という効果もあった。「定着が図りにくい」ということはよく指摘されるが、「繰り返し視聴できるので却って定着しやすい」という成果も得られた。一方インターネットの利用が制限されるため

生徒や教師の発想の足かせとなるということも指摘された。

このように全般的には視聴覚機器の効用は認めつつも、準備に時間がかかる、不便な環境（本校ではスクリーンやプロジェクターが常設されている教室がなかった）、インターネットの利用しにくさなどが使用を躊躇させる原因となっており、機器・設備などを含めた環境作りが課題となった。

二五年度は、昨年度の取り組みを受けて公開授業の準備と共に環境整備を行った。公開授業は身近な機器を共通に使って様々な使用方法を紹介するという意図で、タブレット端末を共通に用いた公開授業を計画した。実践の結果、動画や写真を容易に利用でき、理解を深められるという効果がある一方で、入力イメージと画像のずれが見られることや、パソコンとの使い分けなど課題も出てきた。環境についてはこの一二〇周年学校記念事業として、視聴覚室、同窓会館に天井吊り下げ式プロジェクターとスクリーンを設置し、更に同窓会館には音響設備も設置していただいた。



大会当日は、二年生産流通科で松田隆喜教諭が「生物基礎」を、二年生物生産科で嶋田宏行教諭が「植物バイオテクノロジー」、三年環境工学科で吉田幸人教諭が「農業土木設計」の授業を公開した。三教諭はiPadを駆

使し、動画やKeynoteなどの使い方を紹介した。この後開かれた授業研究会やアンケートによるとiPadの使用法の研修はよくあるが、授業での実践はまだ少ないので役立ったとか、刺激を受けた、準備は大変だがこれからやりたいという意見が多く出され、成功のうちに大会を終えた。

研究の概要

1 研究主題

視聴覚メディアを活用し、学習や研究への興味・関心を引き出し、意欲を高めるための効果的な視聴覚機器の利用

2 主題設定の理由

生徒たちは幼少期から様々なメディアに接し、自らインターネットを利用した情報を入力する技術を習得してきた。このような生徒たちには視覚に訴える授業は学習への興味・関心を引き出し、意欲を高めるのに有効な指導方法であろう。

本校においても、視聴覚機器を利用した学習方法は各教科の特性に応じて展開してきた。特に農業高校である本校においては実習などの体験的な学習での事前指導や補充として、また課題研究などの問題解決学習における調べ学習として視聴覚機器を利用することが多かったが、その対応は各教師の個々の取り組みに終わっていた。そこで今回の大会を契機として従来の活用方法を全体で共有するとともに、より効果的な機器の活用方法を研究していきたい。また、学科毎に整備・利用されることの多かった視聴覚教材や機器についても、全体で利用できるように環境整備していきたいと考え、この主題を決定した。

3 研究方針

(一)すべての教科で視聴覚教材や機器の利用を進め、生徒の興味・関心を引き出し、意欲を高めるのに効果的な活用を研究する。

(二)視聴覚教育を進める上での環境整備をはかる。

4 研究計画

平成二四年度

(一)視聴覚機器を取り入れた授業実践についての実態把握と教員の意識調査のためアンケートを実施する。

(二)各教科・学科で視聴覚機器を利用した授業を実践し、効果的な利用について研究する。

(三)公開授業者を選考する。

(四)各教科・学科・校務部等で所有している視聴覚機器の一覧を作成する。

平成二五年度

(一)各教科・学科で昨年度の実践と研究を引き続き推進する。

(二)一学期公開授業期間に、公開授業予定者が機器を利用した授業を実践し、研究大会での機器の利用法について検討する。

(三)研究大会に向けて日程、役割等の検討をする。

5 平成二四・二五年度の取り組み

国語	国語	教科
国語総合	国語総合	科目
漢文 「論語のことば」	評論「世界観の変貌」 内山節	単元
DVDデッキ・ モニター	パワーポイント (パソコン、テレビ)	使用機器
解を深める一助とした。	「論語」の学習のまとめとして、孔子の生涯を紹介したアニメーション作品を視聴させ、孔子の思想についての理解を深める一助とした。	使用した場面・方法
	映像を見せることによって作品の時代背景や思想などの理解に役立った。	機器・教材使用上の工夫改善に関する意見・感想

芸術	英語	保健体育	理科	地歴公民	地歴公民	国語	教科
音楽 I	英語 I	体育	生物 I	現代社会	地理歴史	現代文	科目
器楽アンサンブル	(Communication Activity1)	機械運動 (跳び箱)	眼の構造	地方自治のしくみ と住民生活	世界的視野 からみた気候	「こころ」	単元
DVDプレーヤー・ モニター	パソコン・ プロジェクター	デジタル カメラ	パソコン、 DVDプレーヤー、 プロジェクター	DVDプレーヤー	i-padmini、アッ プルTV、プロジェ クター、スクリーン	パワーポイント (パソコン、テレビ)	使用機 器
プロ奏者の演奏を視聴 させ楽器の奏法や表現 法を工夫させた。	Slideを使ってALT の友人(カナダ)と会 話する。(準備 会話 にそれぞれ1時間)	跳び箱の技の練習時に、 演技を撮影しそれをフ ィードバックして技術 の向上を目指した。	Power pointを使って 錯視の映像を紹介した り、学習のまとめに使 用。	授業の内容に関するD VDを見せ、授業の深 まりを意識させた。	授業の復習として画像 や動画を活用した。	内容読解の際の板書の 代わりとして利用した。	使用した場面・方法
曲のイメージを膨らませる のに効果があった。モニタ ーがもう少し大きいと全員 が細かい奏法を確認できる。	本校では、インターネット で制限されているものが多 くあり、生徒やALTの発 想を生かし切れない。	デジカメの画面では、小さく 見にくいので、モニター等に 映して見ると、見えやすくも う少し細かい技術指導ができる。	映像を実際に見せることで 印象に残る授業になるよう 意識した。使用する教材を データ化することで、効率 よく授業を行う。	地歴・公民科としての学習 目標を到達できるような内 容であることを意識した。	授業では使用できなかった 画像や動画を活用すること で、生徒に豊かなイメージ をもたせることができた。	通常よりも効率よく授業が 行え、プレゼンテーション 資料の配付によって見通し が立ち理解もしやすかった と思う。	機器・教材使用上の 工夫改善に関する意見・感想

家庭	家庭	家庭	芸術	教科
被服製作	家庭総合	家庭総合	音楽 I	科目
小学生対象ミシン教室	防災・防犯に備えた 住まい方	衣服の素材	TEXT&MUSIC	単元
パワーポイント (パソコン・スクリーン)	パワーポイント (パソコン・テレビ)	テレビ・小型カメラ	DVDプレーヤー・ モニター	使用機 器
ミシンの名称や操作を 知らせる場面や、学校 のミシン画像を用いて 説明したり、事前にと った動画を使用した。	地震や火災などの災害 に対する備えについて 考えさせる場面や、そ の導入として東日本大 震災の画像(ポラント エア時に撮影したも の)を見せた。	被服分野の繊細な組織 を学習する際に、自分 たちの身につけている 衣類の組織をその場で 見た。その際、小型カ メラをモニターに接続 することによって、ク ラス全員でそれぞれの 組織を確認した。	楽曲の作られた時代背 景を描いた映像を視聴 させ、作者の思いを探 らせた。	使用した場面・方法
ミシンの機種によって少 ずつ違いがある点(スイッ チの位置やダイヤル類)や 使用方法をわかりやすく説 明できた。動画を見ること により、実習のシミュレ ーションができた。	授業者が撮影した被災地 の様子を解説したので、真 剣な面持ちで画像を見て いた。写真を拡大印刷し 使用するよりは画像利用 が容易であった。	自分自身の身につけて いる物なので、興味関心 を持ちやすかった。また 肉眼でも見える範囲だ が、それをモニターで 確認することによって クラス全員で共有する ことができた。ただし、 導入的な内容にしか使 用できないので、その 後の授業内容にも使 用できる工夫がほしい。	曲想を歌詞の内容や楽曲 の背景と関わらせて感 じ取り、イメージを持 った表現の工夫につな がった。	機器・教材使用上の 工夫改善に関する意見・感想

農業	農業	農業	農業	教科
農業情報処理	農業情報処理	環境科学基礎	畜産	科目
プレゼンテーション ソフトウェアの活用	農業情報処理	自然再生工事の進め方	鶏の屠殺および解体	単元
パソコン・液晶プロ ジェクター、スク リーン	パソコン・中間 モニター・マイク	パワーポイント(パソコン、 プロジェクター、スクリーン)	デジタルビデオ (プロ ジェクター付き)	使用機器
新聞記事からのプレゼ ン四枚のスライド作成、 発表	練習問題の解説に教師 用パソコンを用い、そ の操作方法を中間モニ ターに映した。	授業全般、パワーポイ ントによる授業を展開 した。	事前に屠殺および解体 の作業をビデオで撮影 しておく。その後、実 習において、場面ごと に映し出すことで生徒 に作業を繰り返し見せ、 やり方を覚えさせる。	使用した場面・方法
新聞記事のデータを活用して、 現状・分析・今後の課題とい う三段構成でのプレゼン作成 を指示した。	モニターで処理の結果は見る ことができるが、関数の入力 方法などキーボードの操作を 生徒にせよとさらさらによい と思う。	パワーポイントによる授業は 事前に教材を準備しておくこ とで、導入、展開、まとめを スムーズに行うことができる。 今回の単元は教科書に載って いなかったため、写真を中心 に分かりやすく教えることを 意識して授業を行った。	屠殺は精神的に強いストレス を受けるが、事前に映像を見 せることで、少し緩和される ように感じた。また、映像で 残すことで、生徒も見ることが できるので、年度の学習の定 着も促された。	機器・教材使用上の 工夫改善に関する意見・感想

(四) 平成二四、二五年度

NIE実践

小林 充

本校は平成二四年度より、NIE実践校として活動を取り組むことになった。

二五年度から実施される学習指導要領に新聞活用が明記され、高等学校の教育活動においても新聞を取り入れて授業を行うことが今後多く見られるであろう情勢のなか、実践校に当たったことは本校にとって大変有意義なことであると考えている。

さて、私は平成二四年度七月三〇日～三一日にかけて開催された「第一七回NIE全国大会・福井大会」における公開授業者であった。一年生産流通科の三五名を仁愛女子高等学校に引率し、仁愛女子高等学校にて公開授業を行った。先述したように、本校は実践校となつてからの日が浅いため、寄稿文章としてはその公開授業資料(全国大会における冊子資料)を載せておきたい。

△公開授業▽

新聞を活用した課題探究学習

主体的によりよい社会を形成するための課題を設定する

福井県立福井農林高等学校 教諭 小林 充

一 単元名

新聞を活用した課題探究学習

主体的によりよい社会を形成するための課題を設定する

二 単元の目標と言語活動

新聞から社会をよりよくするための課題を自ら設定し、その解決策にむけての探究活動を通して、他者の多様な価値観からその課題に向き合い、よりよい社会の形成に自ら参画していける資質や能力を育成する。このクラスの生徒は、日頃からあまり新聞を読んでもおらず、身の回りのこと以外の諸課題について関心をもとうとする生徒は少ない。そのため、せまい世界での価値観でおさまっている生徒が多い。そこで、新聞を活用する学習を通して、新聞のなかから自らの生きる社会に存在する課題を設定し、その課題について、グループ活動をを通して順位づけするための言語活動を設定することで、多様な価値観からよりよい社会を形成するための資質を育成していく。

三 教材

福井新聞（七月三十一日付け）

ワークシート

四 単元の評価規準

関心・意欲・態度	新聞から課題を設定し、よりよい社会における人間としての在り方・生き方について幸福、正義、公正などを用いて多面的・多角的に考察し、社会の変化や様々な立場、考え方を踏まえ公正に判断し、その過程や結果を様々な方法で適切に表現している。
思考・判断・表現	新聞から課題を設定し、よりよい社会における人間としての在り方・生き方について幸福、正義、公正などを通して収集し、学習に役立つ情報を適切に選択して、効果的に活用している。
資料活用の技能	よりよい社会を形成するための課題に関する諸資料を様々なメディアを通して収集し、学習に役立つ情報を適切に選択して、効果的に活用している。
知識・理解	よりよい社会を形成するための課題について理解し、その知識を身につけている。

五 単元の展開

時	学習活動	評価基準
第一次 1	<ul style="list-style-type: none"> 新聞から課題を設定する。 個人で設定した課題をグループ活動で順位づけする。 グループ討議の結果を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 新聞から、よりよい社会にむけての課題を設定することができている。 グループ活動において、自ら設定した課題について、根拠をもった説明ができています。 グループ活動では、他人の価値観を認め合いながら、活動に取り組んでいる。
第二次 2・3	<ul style="list-style-type: none"> 各グループが発表した課題の中から最も重要なものをクラスで一つ選択し、その解決策を考える。 解決策について、個人で順位づけをする。 個人で順位づけした資料をもとに、グループで最も適した解決策の順位づけの案を作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 解決策について、法律や道徳など様々な視点や立場から見いだそうとしている。 グループ活動では、他人の価値観を認め合いながら、活動に取り組んでいる。
第三次 4	<ul style="list-style-type: none"> グループで作成した解決策の順位づけ案を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> グループがめざすよりよい社会とはどのような社会かを明確に述べることができている。 他のグループの発表を聞いて、その価値観を認め合いながら自分の価値観を広げることができている。

本時は、学習指導要領における内容の（１）にあたるところである。現代社会における諸課題を扱う中で、社会の在り方を考察する基盤として、幸福、正義、公正などについて理解させるとともに、現代社会に対する関心を高め、いかに生きるかを主体的に考察することの大切さを自覚させたい。

六 本時の展開

(一) 本時の目標

自分で新聞から課題を設定し、異なる多様な価値観に理解を示しながら、よりよい社会を形成していこうとする資質を育成する。

(二) 本時の指導・評価

展開 2	展開	導入	課程	関	思	技	知	評価方法等
<ul style="list-style-type: none"> 設定した課題をグループ活動で説明しなさい。 ワークシート 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを使って、課題を設定しなさい。 	<ul style="list-style-type: none"> 本日の新聞から、よりよい社会を形成するための最も重要な課題を一つ設定しなさい。 	<ul style="list-style-type: none"> 発問 (指示) 学習活動等 (生徒による活動) 	○	◎	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 第一面や、県内の記事など様々な記事から課題を設定する記事を選ぶ。 ワークシートを使い、課題を設定する。 多面的・多角的な視点から、課題を設定しようとしている。
<ul style="list-style-type: none"> 設定した課題をワークシートを使い、自らが設定した課題を説明する。 グループ活動で、ワークシートを使う 			<ul style="list-style-type: none"> 昨日をふり返り、何が福井新聞のトップ記事になっているか、また何が第一面の記事になっているかを考えて発表する。 	○	◎	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 積極的に発言しようとしている。
○	○			○	◎	○	○	
○	○			○	◎	○	○	
○	○			○	◎	○	○	
<ul style="list-style-type: none"> 設定した課題について、グループ活動で根拠をもった説明 				○	◎	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 他のグループが提示した課題や、めざそうとする社会について、他者の価値観を認めながら、自らの思考を深めようとしている。 次時の活動について、意欲的に取り組んでいる。

終 結	展開 3	
<ul style="list-style-type: none"> 次時の活動について考えなさい。 	<ul style="list-style-type: none"> グループで考えた最も重要な課題と、めざそうとする社会を黒板に提示しなさい。 	<ul style="list-style-type: none"> を使って、設定した課題をグループのなかで順位づけし、発表Aと発表Bを作成しなさい。
<ul style="list-style-type: none"> 本時の新聞で各グループが提示した課題のなかで、最も重要だと思う課題はどれか考えてみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを使ってグループで考えた最も重要な課題と、めざそうとする社会の二点を黒板に貼る。 	<ul style="list-style-type: none"> つて、メンバーが設定した課題を順位づけする。 最も重要な課題と、その課題の解決によってめざせる「よりよい社会」を示す。
◎	○	
○	◎	
	○	
	○	
<ul style="list-style-type: none"> 次時の活動について、意欲的に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 他のグループに理解されやすいような表現の工夫をしている。 	<ul style="list-style-type: none"> グループ活動では、他人の価値観を認め合いながら、活動に取り組んでいる。

七 単元の振り返り

本単元をさらに発展させるうえで、以下の二点について振り返りをしたい。

(一) 順位づけの活動について

本単元における順位づけは、まだまだ生徒の感覚によるところが大きい。そのため、今後は順位づけの過程に焦点をあてて、さらに学習を深化させていきたい。それは、どのような価値基準で順位づけをしていくのか、また、価値基準の尺度や軸が異なれば順位づけも異なる、ということを考えていくことである。そのような価値基準の尺度や軸を理解し獲得することで、多様な価値観からよりよい社会を形成するための資質をさらに育成していきたい。

(二) 課題設定について

近年、顕在化した課題に対する問題解決能力という学びはよく見られる。しかし、今後は所属する社会や組織の中で主体的に問題意識を持ち、何が課題なのかを自ら設定していき、その設定した課題の解決に向かっていくことも大切であると考えている。本単元では新聞を活用してそのような課題を設定することは多少なりともできていたが、この学習活動においてもまだまだ生徒の感覚によるところが見られた。今後は、生徒自らが設定した課題をより分析的なものにしていく学習活動へと試みたい。

最後に、今回の公開授業が大成功したことを挙げておきたい。私の微力を一年生産流通科の生徒の頑張りが取



り返してくれた。また、授業準備のお手伝いをしてくださった岡田玉緒先生をはじめ、研究協議会の司会を引き受けてくださった浅井裕美子先生、記録をしてくださった田原康治先生、生徒引率をしてくださった橋本靖子先生、そして公開授業準備のためにほとんど校内の仕事ができなかった私を支えて下さった福井農林高校の多くの先生方に感謝の意を表して、むすびの言葉としたい。



五 各学科の教育

(一) 生物生産科

平成四年に行われた学科再編により農業生産・経営に関する学科として新しく生物生産科が生まれた。

本学科では一貫して「作物や野菜などの農産物を生産するための基礎的な知識と技術を習得させ、時代の進展に対応できる農業技術者を目指し、地域社会の発展に寄与する能力と態度を育てる」を上位目標に掲げ指導にあたっている。特に、近年は下位の目標として「福井県の農業を支える担い手の育成」「農業を深く理解し、地域のリーダーとなりうる人材の育成」「環境の重要性を深く理解できる人材の育成」の三点を掲げている。

学習の特徴としては、農産物の生産を体験的に学び、時代の進展に幅広く対応できる創造性豊かな思考力と実践力を持った農業後継者や農業技術者の育成を目指している。そのため、一学年では農業に関する基礎的な知識と技術を身につけ、二、三学年では稲を基本として、



作物、露地野菜などの栽培技術や畜産、農業機械を学ぶ「農業コース」と、施設を利用した野菜、草花、果樹などの栽培技術や植物バイオテクノロジーを学ぶ「園芸コース」を設けて、より専門的な知識と技術が習得できるように指導している。また、専門的な知識の充実のため、平成二一年から日本農業技術検定、平成二四年からは土壤医検定など農業専門資格を取り入れ、危険物取扱者やワープロ

資格取得一覧表

(人)

卒業年度	農業技術検定		土壤医検定	動物取扱者	危険物取扱者			ボイラー取扱者		ワープロ実務検定				情報処理技能検定		文書デザイン検定				ガス溶接		
	2級	3級	3級	一般	甲種	乙種4類	乙種4類外	丙種	2級技師	小規模	1級	2級	3級	4級	2級	3級	1級	2級	3級	4級		
平成15年度				1		6	11	14		4		1	11	25								
平成16年度				1		4	1	18	1	11		5	22	29								
平成17年度						11	24	28	1	21		1	17	27								
平成18年度						3	5	17		10		1	12	32		4		1	2	3		
平成19年度						6	3	23		5		3	14	34								1
平成20年度						8	25	18		9		1	18	34						3		
平成21年度	3			2		3		11		2		1	15	24						13		
平成22年度		12		1		1	1	8		6	1	2	15				1	11	17	1		
平成23年度		8			1	6	20	4		13		2	24					13	5			
平成24年度		12	2			2	9	8		10		1	27		10	9		10	9			

検定などの資格も習得できるよう指導している。

地域交流として、地域の伝統野菜である新保ナスの種子の保存と栽培研究も継続して行われている。また、五年ほど前から福井市（清水町旧天津村）でごくわずかに栽培されている「神力」という酒米の栽培・採種を行っている。この「神力」を使用して旧清水町にある西岡河村酒造において清酒（天津神力）が製造されている。「神力」は、明治ごろより戦前まで西日本で広く栽培されていた米で、一世を風靡した品種だが現在栽培されているのは僅かであり、地域の宝として残すべきものである。

今後も、地域の農業高校として、校外での体験や校内での実験・実習時間の確保と充実を目指して、いろいろな現場にて生徒たちが多くの体験ができるよう指導していきたい。



(二) 環境工学科

平成四年度の学科再編により設置された環境工学科は、水・土・里豊かなネットワークづくりを目指して、二年次から環境緑化コースと環境土木コースに分かれて学習を展開している。

1 環境工学科における特色ある教育の推進

平成二二年度より実施している小型車両系建設機械運転特別教育をはじめ、トレース技能検定、ワープロ実務検定、造園技能検定、ピオトープ計画管理士など、資格試験の合格を目指した活動を行っている。測量士・測量士補、二級土木・造園施工管理技術検定学科試験については、朝補習など徹底した受験指導を実施している。また、平成一八年度から二〇年度まで文部科学省から指定を受けた目指せスペシャリスト研究開発の継続として、本校第二農場において、電気柵の設置など安心して安全な作業環境を提供し、野生生物との共生についての取り組みを行っている。

2 農業クラブ・農業系の活性化



農業クラブ全国大会の農業鑑定競技会の農業土木と林業に参加する生徒は、毎年のように優秀賞を獲得している。また、環境緑化部は、来客者の目に付きやすい校内の庭園や植栽の管理を中心に活動している。そして、平成一八年に第八回日本水大賞を受賞した環境土木部は、農業水路への設置を目的とした小規模魚道の開発による環境保全活動を継続研究するとともに、国土交通省福井河

資格取得一覧表

(人)

	測量士	測量士補	2級造園施工管理技術検定学科試験	2級土木施工管理技術検定学科試験	危険物取扱者						毒物劇物取扱者	2級ヒオトップ計画管理士	ガス溶接技能講習	小規模ボイラー取扱者	小型車両系建設機械運転特別教育	造園技能検定	トレース技能検定			情報処理技能検定			全商ワープロ実務検定				文書デザイン検定				秘書検定			家庭科技術検定食物調理		パソコンスピード入力認定	
					乙1	乙2	乙3	乙4	乙5	乙6							丙種	3級	3級	4級	1級	2級	3級	1級	2級	3級	4級	1級	2級	3級	4級	3級	3級	4級	2級	3級	
平成14年度			4	19	6			2		1							37							1	11	27											
平成15年度			7	17	10	1			4		1						31							2	7	69									19		
平成16年度	1	17	17	6	2	4	2	3	4	3	1			2			23			1			2	8	31		1	3	1				8				
平成17年度	2	12	16	3	3		4	2		2	1	1	1		2	11			1	1	1	1	1	4	27	1		1	2			1	1				
平成18年度		10	5			1				1	1							30							13	31											
平成19年度		2	4	1													1	27						4	17	32											
平成20年度		6	6	2				1									22	32				29		2	20	30											
平成21年度		2	9		1	1	1							1			12	31				33		1	26	26											
平成22年度		6	4	2						1		2		4	10		30	22		1	24		3	26	22				1								
平成23年度		7	4												20	2	15	31				26	1	2	20	22										1	
平成24年度		11	6	1											20	1	24	28				28		1	28	17									1	1	

※ 2級土木施工管理技術検定学科試験は、平成17年度まで土木施工技術者試験
2級造園施工管理技術検定学科試験は、平成17年度まで造園施工技術者試験
英語検定ならびに漢字検定の資格所得状況は除外

川国道事務所が毎年行っている九頭竜川水生生物を指標とする水質調査に参加するなど、地道に活動している。

3 地域交流の推進

地域農業を支えるために県が企画した地域農業サポート事業に、平成二三年度から高校生ボランティアとして参加している。また、水と緑のネットワーク事業として、平成二〇年度からえちぜん鉄道の横を流れる芝原用水沿いの桜並木を管理する取り組みを行っている。

4 体験的活動の充実

二年生が六月に実施している就業体験は、インターンシップの心構えなどの事前指導を行い、就業体験後に一年生の前で報告会を催し、最後に報告書を作成している。演習林実習は、一年生（演習林の除伐・間伐・施肥実習、水準測量実習）が五月、二年生（大型林業機械操作実習、地籍測量実習）が一〇月、三年生（チェーンソーによる演習林の除伐・間伐実習、総合路線測量実習）が一月に、奥越高原青少年自然の家に宿泊しながら二泊三日で実施している。

(三) 生活科学科

平成四年度の学科再編以来、生活科学科は農業・家庭・福祉を学習の柱とし、生産から消費までを総合的に捉え、また広く社会のかかわりの中で生活をとらえ、豊かな感性と福祉の心を育てることを目標としてきた。

主な学習内容は、農業関係の授業では、稲、野菜、果実、ハーブなど作物や野菜に関する学習、家庭科関係では食物、被服、保育に関する学習、福祉関係では社会福祉基礎、基礎介護、社会福祉援助技術に関する学習である。課題研究はこれらの学習の集大成として、野菜、草花、食物、被服、福祉の五分野に分かれて研究が行われてきたが、

平成一九年度より、米（作物）、野菜、草花の三分野になった。

ボランティア活動としては、平成一〇年よりアジア・アフリカへ衣類を送る活動が続いている。平成二二年度末に東日本大震災があり、新学期の子どもたちへスクールバックやズック袋を製作して（二三年度 スクールバック三四〇個 二四年度スクールバック及びズック袋各一三六個）送った。その他にも、啓蒙地区の独居老人宅へのお弁当サービスの協力やデイサービスでの活動を行った。

平成一七年度より、文部科学省から指定をうけた「目指せスペシャリスト」において、生活科学科では福井型食生活を推進し、「伝統野菜の加工・調理」についての研究活動を担った。内容は、ラッキョウ・梅干し・木田シソなど福井の伝統野菜を使用した「うららのドレッシング」の開発・商品化である。（財）学校給食会、(株)フク醤油と連携して、年間三〇〇ℓ分のドレッシングを学校給食に提供し、それ以外に二〇〇mlの市販サイズを年間一、四〇〇本以上販売している。（平成二〇年度より本格的に販売開始）。他にも平成二一年度より学校産、福井県産の野菜をフリーズドライ（FD）加工し、野菜ふりかけ「ベジかけ」を商品化した。これらは、(財)学校給食会、(株)駒屋と連携して行っている。様々な野菜八〇kg分を洗浄・加熱加工し、越前町にあるふるさと加工場にてFDするまでが本校の役割である。一回の加工で一六、〇〇〇食分のふりかけが作られその中の一四、〇〇〇食が学校給食に提供されている。このような、商品化にあたり、本校の家庭経営デザイン室を食品加工室とし、「総菜」（平成一九「菓子」（平成一九）「漬け物」（平成二二）「清涼飲料水」（平成二三）の営業許可を取得した。また、外部講師による講習会を多く取り入れているが、プロの技を目の前で見て実習することは大いに刺激になっている。別表に講師一覧をまとめた。

また、交流学習も多く行っている。前述した「目指せスペシャリスト」の指定を受けたことをきっかけに、四〇年近く栽培されていなかった地元の伝統野菜新保ナスを復活することができた。その後、啓蒙地区の有志でつくる啓蒙壮友会との栽培交流が始まった。新保ナスやサラダニンジンの栽培方法を習ったり、それらを用いた総菜・菓子の研究を広める交流を行っている。平成二二年度より課題研究発表会に招き、助言をさせていただいている。また、啓蒙公民館とも密接に交流し、企画・運営にも携わっている。たとえば、平成二一年度より小学生対象の料理教室の講師を担当し、平成二三年度には啓蒙地区文化祭に初めて出店し、活動紹介や販売を行った。他にも新保地区のフリー

資格取得一覧表

(人)

	全国高等学校 家庭科技術検定					訪問介護員 養成認定	
	食物		被服			2級	3級
	1級	2級	1級	2級	3級		
16年度	13	33		7	39	20	13
17年度	10	38		14	38	10	28
18年度	11	38		24	38	3	30
19年度	6	37		31	37	14	23
20年度	11	31		26	31	8	
21年度	3	29	3	27	29	8	
22年度	5	35	2	32	35	8	
23年度	4	32	0	28	32	9	
24年度	4	32	0	23	36	6	

生活科学科のあゆみ-1

	主な出来事	農業クラブ	各種コンクール	外部講師による講演会・実習
平成一六年度	<ul style="list-style-type: none"> ・福井豪雨のためインターンシップの受け入れ先変更があった ・農文祭学科展示にて、プラタブとベルマーク集めのボランティア活動を紹介 ・農文祭バザー売上金の一部を中越地震義援金にあてた 	意見発表 北信越大会出場 3生 天谷真衣	牛乳・乳製品利用料理コンクール 優秀賞 3生 天谷 真衣 2生 尾崎麻利江	イタリア料理講習会(碓子泰徳氏) 福祉講座(コムサポート 吉田知栄美氏) お米の学習会(井上照美氏) 布のおもちゃ講習会(浦瀬由美子氏) 食育講座「骨密度検査」(松田芳子氏) ホームヘルパー事前指導講演会(木内茂美氏) チョコレートのお菓子講習会(谷間正見氏) ビジネスマナー講習会(花谷美智子氏) テーブルマナー講習会(西野伸芳氏)
平成一七年度	<ul style="list-style-type: none"> ・美山中学校の学校祭において、浴衣の着付け教室実施(3生) ・啓蒙地区独居高齢者宅への食事サービスボランティア参加(月1回)開始 ・インターンシップ期間を3日間から5日間に延長 ・ライオンズクラブ国際協力海外派遣生として1ヶ月間スウェーデン留学(3生 出口美咲) ・啓蒙小学校の5年生対象にミシン教室実施(3生)(以降毎年開催) 	3生 尾崎麻利江 米国派遣農業研修生として短期留学	牛乳・乳製品利用料理コンクール 福井新聞社賞 2生 米岡利夏 毎日農業記録賞 地区優良賞 3生 須美紀美江	イタリア料理講習会(碓子泰徳氏) 福祉講座(山内敬一郎氏) お米の学習会(井上照美氏) 布のおもちゃ講習会(浦瀬由美子氏) 食育講座「骨密度検査」(松田芳子氏) ホームヘルパー事前指導講演会(横田治美氏) ビジネスマナー講習会(花谷美智子氏) テーブルマナー講習会(西野伸芳氏)
平成一八年度	<ul style="list-style-type: none"> ・農文祭時に介助犬育成のための農文活動実施(課題研究福祉班) ・二年次インターンシップ3日間に変更 ・啓蒙地区自治型デイサービスに参加 	年次大会プロジェクト発表 「スローライフの種を探して」 意見発表 年次大会 3生 阿部 渚	福井ボランティア作文入賞 1生 吉田優子 牛乳・乳製品利用料理コンクール 優良賞 2生 梯 美菜 毎日農業記録賞 地区入賞 3生 阿部 渚 プレデンシャル活動報告 3生 阿部 渚	イタリア料理講習会(碓子泰徳氏) 梅の学習会(坊 善次氏) 魚をさばく講習会(魚商組合青年部) 食の出前講座(福井栄養士会) 布のおもちゃ講習会(浦瀬由美子氏) 食育講座「骨密度検査」(松田芳子氏) ホームヘルパー事前指導講演会(木内茂美氏) お米の学習会(井上照美氏) ビジネスマナー講習会(加藤友美氏) テーブルマナー講習会(西野伸芳氏) 浴衣着付け教室(今泉於佐美氏)
平成一九年度	<ul style="list-style-type: none"> ・総菜・菓子の営業許可取得衛生責任者講習会に参加 ・保育園にて食育教室開催 ・啓蒙小学校と「新保ナス」の栽培交流開始 ・インターンシップを11月に3日間実施 ・本年度より課題研究が農業3分野(野菜・草花・米)になった 	全国大会農業鑑定競技出場 3生 酒井かおる	福井ボランティア作文入賞 1生 吉田優子 牛乳・乳製品利用料理コンクール 優良賞 1生 小寺里沙 毎日農業記録賞 地区優良賞 3生 太田 萌 ごはんCUP2007審査特別賞 3生 円城明子、梯 美菜、須藤織栄 高校生による食生活改善研究活動 「I&YOU」栄養改善普及会会長賞 3生 伊藤夏希、岩永 渚、 田中美乃、辻本亜斐、 留木理衣、吉田夕貴	イタリア料理講習会(碓子泰徳氏) 魚をさばく講習会(魚商組合青年部) 布のおもちゃ講習会(浦瀬由美子氏) 食育講座「骨密度検査」(松田芳子氏) お米の学習会(井上照美氏) ビジネスマナー講習会(加藤友美氏) テーブルマナー講習会(勝木雅彦氏) アニマルセラピー講習会(大門由美子氏) 新保ナスについて講習会(野路武夫氏) 浴衣着付け教室(今泉於佐美氏)
平成二〇年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「うららのドレッシング」商品化 ・啓蒙社友会と栽培交流開始 ・インターンシップを9月実施 	全国大会農業鑑定競技出場 2生 前川あいこ 北信越大会 意見発表出場 3生 荒川有希	全国高校生食育王選手権大会6位入賞 3生 藤井絵理佳、丸木優恵、舟岡 綾 牛乳・乳製品利用料理コンクール 優良賞 2生 小寺里沙 毎日農業記録賞 地区優秀賞 3生 森岡麻衣 ごはんCUP2008決勝大会出場 優良賞 3生 荒川有希、 村居 綾、吉田優子、 酒井里奈、村上優真 審査委員特別賞 4生 田中明穂、清水沙織、 田中秀美、藤井絵理佳、 森岡麻衣	イタリア料理講習会(碓子泰徳氏) 魚をさばく講習会(魚商組合青年部) 布のおもちゃ講習会(浦瀬由美子氏) 食育講座「骨密度検査」(松田芳子氏) お米の学習会(井上照美氏) ビジネスマナー講習会(加藤友美氏) テーブルマナー講習会(勝木雅彦氏) 浴衣着付け教室(今泉於佐美氏)

生活科学科のあゆみ-2

	主なできごと	農業クラブ	各種コンクール	外部講師による講演会・実習
平成二二年度	つけもの製造の営業許可取得	全国大会農業鑑定競技出場 3生 藤井麻緒	牛乳・乳製品利用料理コンクール NHK福井局長賞 2生 小餅谷萌 毎日農業記録賞 地区優良賞 3生 藤川奈巳 入賞 3生 上岡加奈 福井県ボランティア作文 入賞 3生 石川祥子 2生 三好恵里香 学校賞受賞	イタリア料理講習会(碓子泰徳氏) 梅の学習会(坊善次氏) 魚をさばく講習会(魚商組合青年部) 食育講座「骨密度検査」(松田芳子氏) お米の学習会(井上照美氏) ビジネスマナー講習会(加藤友美氏) テーブルマナー講習会(勝木雅彦氏) 和裁教室(福井県職業能力開発協会) 障害者理解講座(西尾浩昭氏) わらの利用講習会(井上祐介氏) 介護講座(内藤哲也氏) 浴衣着付け教室(今泉於佐美氏) ホームヘルパー事前指導講演会 (福井市福祉公社)
平成二三年度	「ベジかけ」商品化 16000食生産 課題研究発表会助言者 井上照美氏 ・啓蒙公民館主催「小学生対象 料理教室」実施(以降毎年開催) ・福井保健所「衛生監視」実施	全国大会農業鑑定競技出場 3生 熊谷柚希 年次大会 意見発表 3生 熊谷柚希	牛乳・乳製品利用料理コンクール J A福井県経済連会長賞 3生 鎌野 佑里 毎日農業記録賞 地区優良賞 3生 熊谷 柚希 入賞 3生 渡辺ほのか 福井県ボランティア作文 入賞 1生 内ノ宮愛真 全国高校生食育王選手権大会 3位 3生 藤澤 泉、平泉麻希、 橋本佳奈 パパ弁コンテスト 3生 留木香里、小餅谷萌 福井スイーツグランプリアイデア賞 2生 黒濱優花、家根仁美、 吉川莉沙	イタリア料理講習会(碓子泰徳氏) 梅の学習会(坊善次氏) 魚をさばく講習会(魚商組合青年部) 地産地消料理の学習会(高志の 食サポーター) ビジネスマナー講習会(加藤友美氏) テーブルマナー講習会(勝木雅彦氏) 和裁教室(福井県職業能力開発協会) 味噌作り講習会(寺坂律子氏) ひまわり油搾り講習会(西端利幸氏) 介護講座(内藤哲也氏) 浴衣着付け教室(今泉於佐美氏) ホームヘルパー事前指導講演会 (福井市福祉公社)
平成三三年度	「ベジかけ」商品化 16000食生産 課題研究発表会助言者 ・清涼飲料水の営業許可取得 ・東日本大震災ヘスクールバック 製作ボランティア実施(340 個作製) ・学校設定科目「食と農業」導入	全国大会農業鑑定競技出場 優秀賞 2生 毛利なつみ	牛乳・乳製品利用料理コンクール 優良賞 1生 伊藤こゆき 福井県ボランティア作文 入賞 1生 田中 瑞樹 全国高校生食育王選手権大会優秀賞 2生 西口ひかる、小倉百子、 上坂七海 福井スイーツグランプリ アイデア賞 2生 大坂沙也香、藤田せいら、 秋山陽香	イタリア料理講習会(碓子泰徳氏) 梅の学習会(坊善次氏) 魚をさばく講習会(魚商組合青年部) お米料理学習会(高志の食サポ ーター) ビジネスマナー講習会(加藤友美氏) テーブルマナー講習会(勝木雅彦氏) 和裁教室(福井県職業能力開発協会) 味噌作り講習会(寺坂律子氏) ラッキョウ堀り講習会(坂本栄治氏) 介護講座(内藤哲也氏) 浴衣着付け教室(今泉於佐美氏) ホームヘルパー事前指導講演会 (福井市福祉公社) 品質表示についての講習会(田 原雅典氏)
平成二四年度	職業高校充実のための取り組み 事業開始 ・企業連携型地域産業担い手育 成事業 *職業教育アドバイザー (井上照美氏、宮崎幸枝氏) *高度技術者招聘事業(菓子、 味噌、魚、メニュー開発) *実践的長期企業実習(見谷 ナーゼリー2名) *起業家育成プログラム(ふ りかけ生産 年2回)	年次大会プロジェクト発表 北信越大会プロジェクト発表 「福農発 スローフードのコー ディネーターを目指します」 意見発表 年次大会 3生 横田尚香 全国大会農業鑑定競技出場 3生 秋山陽香	福井の美味しい食材料理コンクール 優秀賞(福井県農林水産部長賞) 2生 田中瑞樹 優良賞 1生 梯 知世 ボランティア作文入賞 優秀賞 1生 西野ほの香 入賞 1生 松本 貴子 福井スイーツグランプリ 優勝 1生 清水彩花、 佃 奈々、 藤澤涼子	イタリア料理講習会(碓子泰徳氏) 梅の学習会(坊善次氏) 魚をさばく講習会(魚商組合青年部) 地産地消料理の学習会(高志の 食サポーター) ビジネスマナー講習会(南伊津美氏) テーブルマナー講習会(勝木雅彦氏) 和裁教室(福井県職業能力開発協会) 味噌作り講習会(寺坂律子氏) お菓子講座(上出真子氏) 介護講座(内藤哲也氏) 浴衣着付け教室(今泉於佐美氏) メニュー開発講座(出倉弘子氏) 認知症理解の講習会(野波比瑠子氏)
平成二五年度	職業高校充実のための取り組み 事業開始 ・企業連携型地域産業担い手育 成事業 *職業教育アドバイザー (船一枝氏、宮崎幸枝氏) *高度技術者招聘事業(菓子、 味噌、魚、イタリア料理) *実践的長期企業実習(J A 福井市 2名) 実践的農業教育強化事業開始 *三里浜特産農協に校外実習(2生) *喜ね舎へ商品開発のための 実習(3生) ・インターンシップを7月特別 時間割制に実施	全国大会農業鑑定競技出場 2生 篠崎美果	福井の美味しい食材料理コンクール 優良賞 2生 山内菜緒	イタリア料理講習会(碓子泰徳氏) 梅の学習会(高橋氏) 魚をさばく講習会(魚商組合青年部) 地産地消料理の学習会(高志の 食サポーター) ビジネスマナー講習会 和裁教室(福井県職業能力開発協会) 味噌作り講習会(寺坂律子氏) お菓子講座(上出真子氏) 介護講座(内藤哲也氏) 浴衣着付け教室(今泉於佐美氏)

マーケット「新保まつり」にも出店した。

福祉関係では、愛全園にて福祉実習を、ひかりデイホームにてボランティア実習をさせていただいている。啓蒙保育園、東藤島保育所、上北野保育園とは保育実習以外にも食育教室を実施させていただいたり、本校農場での作物の収穫や加工などの交流も行っている。盲学校・福井東養護学校・福井養護学校とは交流だけでなく農文祭にも参加していただいている。

他にも、平成一七年より啓蒙小学校とミシンの講習会を始めた。本校の生徒が講師となって小学生にミシンの基本操作を教えるものがあるが、大変喜ばれている。

四 生産流通科

生産流通科は平成四年度の学科再編により誕生し、設置当初から一貫して「消費者の立場に立った農産物生産の学習」と「流通および情報分野の学習」を通して農産物を取り扱う流通ビジネス関係のエキスパートを育成することを目指している。

教育課程には、生産から流通にいたる一連の学習を行うため、農業科目の他に商業科目を多く取り入れ、実践教育を通して専門学習を深めることや資格取得を重視した教育を展開している。

平成一五年度入学生からは、農作物の生産だけでなく商品価値を高めるために「加工」の領域を加えた。さらに、平成二三年度からは三年生において学校設定科目「食と農業」を導入し、文部科学省から指定を受けた目指せスペシャリスト研究開発の継続として、伝統野菜を教材に福井県農業の理解と生産流通科の学習内容の深化を図っている。

1 実践教育を通しての専門教育

専門科目で習得した知識の実践の場として平成一〇年度に開設された「ふれあいマーケット」を活用している。

毎回の「ふれあいマーケット」の運営については二年生が商品の仕入れ、商品準備、陳列を担当し、三年生が接客、販売、会計を行っている。五月下旬から一月中旬にかけて、火曜日の午後で開催している。平成二三年度には年間二三回開催し、延べ一、二五五人の地元の方々に来店していただいた。なお、三年生はふれあいマーケットでの接客・販売を実践する前に、外部講師による「接客マナー」の講習を受講している。また、地域イベント等でも販売実践を行い、併せてマーケット・リサーチも行っている。

2 資格取得を取り入れた専門教育

本学科では流通ビジネス関係の将来のスペシャリスト育成を目指して、各種の資格取得に対応した指導を行っている。近年は、幅広い技能習得を目指して新たな資格を導入し、学年進行に伴って上級合格を目指せるように教育内容を組み立てている。また、就職に有利になるよう業界での評価の高い資格取得にも力を入れている(表参照)。

教材に資格取得を取り入れることによって次のような副次的効果も現れている。

授業に対する目標設定ができ、受験結果から自分自身を振り返り、



資格取得一覧表

(人)

	販売士 検定			秘書検定			簿記検定			ワープロ検定				文書デザイン検定				情報処理技能検定				パソコン 利用技術検定	
							日商	全商		県商	全商												
	3級	2級	3級	3級	2級	3級	3級	1級	2級	3級	4級	1級	2級	3級	4級	1級	2級	3級	4級	2級	3級		
平成15年度	2			2	8	27		3	23	38	34											3	
平成16年度	1		1		7	14	1	1	13	25	23			5				7					
平成17年度	13			1	7	16	7	2	16	34	28	2	17	18			6	23		2	3		
平成18年度	9				12	27		4	22	30	35	12	22	16	5	2	13	25	6				
平成19年度	7				13	30		1	14	25	30	10	16	5		2	13	26	5				
平成20年度	4				12	21		3	30	30	4	1	23	6			1	33					
平成21年度	4				9	28		1	21	27	3	8	13				30	30					
平成22年度		1	17		9	24		7	27	26	1		12	5			33	33					
平成23年度		1	13		8	28		7	32	24		3	21				27	34					
平成24年度	6		8		12	30		9	29	26			22	1			30	30					

自分の能力や経験、価値観が把握できる。また、合格によって満足感と達成感を得、上級の資格取得に向けた原動力となっている。
さらに、受験までのプロセスにおいて時間管理能力、持続力、忍耐力、集中力も身に付いている。

六 各部・室の取り組み

(一) 庶務部

1 地域・保護者との連携

a グリーンメール発行

平成一一年度から発行されているグリーンメールは、レイアウトをリニューアルしながら毎月発行している。表面には学校長や教頭の巻頭言、各部からの啓発記事、保護者からの意見や感想、月の行事予定などを、裏面には学校行事に関する生徒の活動や部活動大会結果などを掲載してきた。学校・生徒・保護者の連携



2012年7月号



2008年4月号

を深める情報誌となっている。生徒を通して保護者に渡すことになっているが、平成一九年九月号からはホームページにも掲載するようになった。

b ホームページ更新

ホームページは平成一五年度に開設されたが、技術的な面から次の更新までに時間を要した。平成二一年度に業者に依頼してリニューアルを行ったが、やはり更新は技術面で難しかった。平成二三年度より技術面でのサポート体制が整い、更新が早くなった。

c 緊急メール連絡網開設

平成二三年度一学期の試行期間を経て、九月からメール連絡網を導入した。前年度の大雪により従来型の緊急連絡が思うように届かず混乱したことで、素早い緊急連絡の取り方として携帯電話によるメール連絡網を導入することにした。未登録者には保護者会で呼びかけ登録を促している。

d 学校案内作成

学校案内はそれまで数年ごとに作成してきたが、平成一七年度からは毎年作成することにした。内容は、これまでと同様に学校行事、四学科の紹介、農業クラブ、部活動、進路についてである。毎年、文や写真の更新を行った。平成二四年度からは教育課程表も掲載した。

2 校舎・校具の保全活動

管理委員会を中心に校舎・校具の点検を行ってきた。その多くがスイッチの押し込みに対する修繕や防止の呼びかけである。

平成二三年度には、管理職、各部主任による校舎内外の安全点検を行った。

3 防火防災活動

年度はじめに防火・防災計画により防火管理組織を整備し、また一学期中に避難訓練を行い、万が一に備えている。

平成一六年度、前年度同様の大規模な消防訓練を企画したが、雨天により中止となった。

平成二四年度、啓蒙地区で行われた福井市総合防災訓練に参加した。啓蒙地区の生徒、管理委員、JRC部員を中心に、生徒二四名（男子八名、女子一六名）が参加した。避難訓練、応急手当訓練、救助・救出訓練などを行った。

教職員対象の防火防災訓練については、平成一六年度に救助袋体験、初期消火、緊急通報の訓練を校務分掌単位で取り組んだ。平成二一年度は、職員対象の防火防災研修（緊急通報、水防訓練）を行った。平成二四年度も、防火防災研修（緊急通報、水防訓練）を行った。

(二) 教務部

戦後七度目の学習指導要領改訂は、教育内容を厳選し、「総合的な学習の時間」の新設、基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成をテーマにした。それを受け、高等学校の学習指導要領が一九九九年（平成一一年）に告示され、二〇〇三年（平成一五年）度の第一学年から学年進行で実施された。この改訂により、二学期制、中高一貫教育の導入、学校完全週五日制実施、総合的な学習の時間が新設され、さらに、クラブ活動が削除された。今回の改定は、学習内容の大幅な削減が行われ、「ゆとり教育」のスタートとなった。しかし、現在はゆとり教育から、ゆとりでもなく詰め込みでもなく、知識、道徳、体力のバランスのとれた「生きる

力」を育成することとなった。基礎的な知識や技能の習得と思考力、判断力、表現力を育てることを強調した生きる力の育成を実現することとした「脱ゆとり教育」となっている。

総合的な学習の時間の新設と学校完全週五日制実施による「ゆとり教育」で危惧されていることとして、学力の低下、学習意欲の低下が懸念されていた。普通科高校では、平日以外にも土曜課外の実施、授業確保のため二期の始業式を早めるなど各校で授業・学習対策を講じたが、これといった対策はないのが現状であった。平成二四年度の県立高校における授業・学習状況調査においても、本校においては自ら学ぶ姿勢が低く、学校以外の家庭における学習はほとんどない生徒が多いなど、学習時間の減少と学習意欲の低下が大きく現れ、定期調査にも影響が見られるようになった。日本の経済の状況と比例し就職難のこの時期において、求められる人材は、コミュニケーション能力とともに基礎学力が大きく問われる。本校においても、各学年において基礎学力の向上を取り組みの一つとして努力目標に掲げている。本校生徒は希望をもって努力すれば自分の夢は実現できると思っている生徒が多くいる、つまり努力をすることにより道が開けるという考えを持っており、その意味で、キャリア教育が重要である。

教務部としては、毎年学習意欲の向上を重点的取り組みとしている。その一つに、修得不認定科目（欠点科目）減少の取り組みがある。生徒の中には、欠点を多く持ち進級および卒業に困っている現実がある。三年生まで持ち越す生徒も見受けられる。この対策として、追認審査八月実施導入（平成一七年六月二九日改正）。進級の認定および原級留置に関する規定では、二年生から三年生の進級では、一年時の修得不認定科目は関係なく「当該学年の修得不認定科目三科目以内」で進級であったが、「当該学年を含む修得不認定科目が三科目以内の者」とす

る」という内規の改訂（平成一九年六月一九日改正）を行い、修得不認定科目解消に取り組み意欲の向上と努力を図った。

ここ数年、生徒の多様化が進み、いろいろな支援を必要とする生徒も入学するようになった。特に治療を要する生徒には、欠課や欠席が発生することがある。本校の規定には、履修・修得に関する規定では、特別な理由のない限り、年間出席すべき時数の五分の四以上の出席が必要である。特別な理由で欠席した場合でも三分の二以上の出席が必要である。そこで特別な理由で欠席・欠課が三分の一を越えそうな生徒に対しての認定について検討する「特別認定対策委員会」がつけられた。（平成二二年四月一日）これにより、早くから生徒の状況を把握することができ適切な指導ができるようになった。

考查への取り組みについては、以前からも教室内の環境整備、教科書の持ち帰り、家庭学習の指導や考查に対する取り組みと指導項目をあげ指導を行っているが、これといって大きな成果が見られないのが現実である。特に考查期間の取り組みもクラスによってばらばらであった。また、傾向として考查に対する真摯な受験態度が見られない生徒も見受けられる現状であった。基礎学力や学習に対する意欲向上の基本として、考查に対して努力する、計画的な学習を立て、安易に欠席をしないことが大切である。この対応として、平成二〇年二学期考查一週間前より清掃終了後STを含む午後四時までの四〇分間、全クラスで学習会を実施することにした。本校生の中には取り組みや集中力の悪い生徒がいるが、以前に比べ考查を大切にしっかりと取り組み傾向が見られ、考查の安易な欠席も減少した。

基礎学力の向上には、自らの学習への取り組みが大切である。学習意欲の喚起は、生徒一人一人に「魅力ある授業」や「分かる授業」をしていくことが大切である。学習意欲を向上させることにより基礎学

力の向上が期待できる。そのためには教える教師の指導力向上が必要である。これに関しては、平成二三年度より、全教員が授業公開を実施し、お互いに情報交換、協議を行い授業の現状や改善の方向について認識を共有し、個々の教員の指導力向上を目指して切磋琢磨している。

社会、経済、産業構造の急激な転換により、今後社会から求められる新しい学力、教育が大きく変化していくかと思われるが、教える教師側が根気強く、丁寧に、毎日の授業を大切にしていくことが大切であり、教える力の向上が教育力向上の原動力となるかと思われる。

(三) 生徒指導部

生徒指導は、教育課程の内外において一人一人の生徒の健全な成長を促し、生徒自らが現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指しており、学校の教育活動全体を通して行われている。

生徒指導部の主管する分野は訓育的な内容が中心となる。ルールを守ろうとする「規範意識」の醸成、風紀・容儀など「基本的生活習慣」の確立、集団生活をスムーズに送れる能力を育てる「モラル・マナー」の指導などがそれである。また、自己存在感を高め、自己決定することを経験し、相互理解を深めながら、友達との共感的人間関係を育てる「ホームルーム」「生徒会」「部活動」の指導など多岐にわたる。

生徒指導部では、『規律の正しい学校』『生徒と教師、生徒間に触れ合いのある学校』『職員間に意思疎通のある学校』を目指し、『落ち着いた学校』になることを目標にしている。

1 指導の柱

a 指導方針の共通理解

毎年四月の職員会議で「生徒指導方針」と、それを実行するための

手段を確認することにより、教職員の共通認識の下に組織的・体系的に生徒指導ができる体制作りに努めている。生活習慣を確立させるための基本方針、さらに、生徒に身につけさせたい事項と違反した場合の処置について具体的に確認を行うことよって、どの教員も生徒に対して同じ指導ができるようにしている。教員が同じ姿勢で生徒と向き合うことは生徒間に不公平感を生まず、教員が不正や反社会的行動に対して毅然とした態度で臨むことが教員と生徒との良好な人間関係を形成すると考える。

組織的に生徒指導に当たることによって教員と生徒間により人間関係ができ、それによって効果的な生徒指導ができるようになるという正のスパイラル効果が期待できる。

b 集団生活の中で優しさと厳しさを伝える

集団での活動や生活における生徒相互の人間関係の在り方は、生徒の健全な成長と深くかかわっている。生徒一人一人が存在感をもち、共感的な人間関係を育み、自己決定の場を豊かに持ち、自己実現を図っていきける望ましい人間関係づくりは極めて重要である。

本校では「学校行事で生徒を育てる」をモットーに、体育祭、農文祭では実施数ヶ月前から実行委員会を立ち上げ、生徒自らが計画し、実施するという生徒主体の学校行事を心がけている。

行事に向けて、教員と生徒、生徒同士の人間的な触れ合いを深めたり、行事成功により充実感・達成感を味わう機会となる。また、その結果が不本意なものになっても真摯に受け止めること、自らの選択や決定に従って努力することなどを学ぶ機会ともなる。さらに、自分の欲求や要求を実現するだけでなく、集団や社会の一員として認められていくことで自己実現を可能にする力が育まれていく。

c 問題行動への予防・初期対応

生徒の問題行動は校則の理解不足から起こることが少なくないと考えられる。また、違反した場合の指導内容が理解されていないために教員の指導に従わない生徒がいるのも事実である。

そこで、平成二三年度から生徒が違反ししやすい項目について校則の確認と違反した場合の指導事項を具体的に表記した「生徒指導基準の確認」を教室掲示している。

この掲示によって、違反した場合も素直に聞き入れ、行動を正す生徒が増えてきた。また、事前に違反した場合の指導内容を具体的に周知することによって違反行為の予防にもなっている。

2 時代に対応した指導

生徒指導は、「不易流行」を理念として指導に当たる必要がある。そこで時代に対応して指導方針・内容を変更した事例として携帯電話指導を紹介したい。

近年の携帯電話やスマートフォンの普及にはめざましいものがあり、インターネットを通じて、暴力や性、自殺などの違法・有害情報に触れる危険性が高まっている。

本校では、これまで原則的に携帯電話の持ち込みを禁止してきた。しかし、保護者からの要望があれば持ち込みを許す措置を執っていたので、現実にはほとんどの生徒が携帯電話を持ち込んでいた。そのため校内で使用するなどの違反者が後を絶たない状況だった。

そこで、平成二二年度から携帯電話の持ち込みを禁止する指導ではなく、持ち込みを許す代わりに規則を明確にしてそれを守らせる指導に方針変更を図ることにした。

昨今、他人の迷惑を顧みない自己中心的な言動や、ルールを平気で破るなど、若者の規範意識の低下が社会問題になっている。そこで生

徒の興味関心の高い携帯電話を切り口に「規則・マナーの遵守」さらには「規範意識の醸成」に繋げようとしたわけである。

新ルールは、生徒・保護者に規則と違反行為に対する指導基準を示し、規則を守ると確約できる生徒のみが保護者記入の「携帯電話所持願ひ」を提出するというものである。

申請数は年々増加しているが、規則違反により指導を受ける生徒は徐々に減少している。規則が浸透すると同時に規則を守ろうとする気持ちが育っているのではないかと考えている。そのことは、平成二四年度の学年末に行ったアンケートで約九割の保護者が「ルールを守ろうとする姿勢が育った」、また、約九割の生徒が「ルールを守って生活できた」と回答し、三年連続で上昇していることから伺える。

生徒指導部では今後もすべての生徒の人格のよりよい発達を目指すとともに、学校生活がすべての生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指して指導を続けて行きたいと考えている。

(四) 実習部

実習部は、特色ある農業教育の推進を目標に活動を行っている。具体的には①課題研究や資格取得を通して、学科の特色を生かした実験実習の充実を図る。②地域・産業界との交流に積極的に取り組む、地域連携を深めるための取り組みを行うことである。本校は平成四年の学科改編により生物生産科、環境工学科、生活科学科、生産流通科の四学科に改編された。各学科が特徴ある実験実習により、自営者や学科関連産業の技術者の育成を目指している。この一〇年間における話題として次のようなことが考えられる。

1 文部科学省指定「目指せスペシャリスト事業」

平成一八年から二〇年までの三ケ年にわたり、特色ある取り組みを

行う専門高校を支援し、将来の専門的職業人（スペシャリスト）の育成と専門高校の活性化を図る目的で指定された。本校では、健康長寿日本一の食材づくりを目指した将来の農業のスペシャリスト育成を課題として研究を行ってきた。伝統野菜の遺伝資源としての保存・育種とその加工流通技法習得のためのプログラム開発、伝統野菜の販売を通じた地産地消推進や郷土料理の掘り起こしと再現、福井型食生活の献立提案や食材の加工・調理、伝統野菜の栽培技術や採取、組織培養増殖技法の習得、耐病性・耐虫性の高い品種開発、獣害対策とその効果などが主な研究である。この研究の継続学習として学校設定科目「食と農業」を作り、すべての学科の三年生で履修をしている。

2 地域交流・連携活動

開かれた学校づくりの一環として、ふれあい農園・ふれあいマート・ふれあいハーブ園が開設されて利用され、活用されている。ふれあい農園は毎年三〇名程度の入園者を募集して、本校の生徒とのふれあいが積極的に行われている。ふれあいマートは食の安全安心が関心事となっている今日、学校の生産物の供給と生徒の販売実践の場として重要性を増してきている。平成一五年（一一〇周年記念事業）に完成したふれあいハーブ園は「生物活用」、「草花」の圃場として運営され、市民の憩いの場として有用である。

「目指せスペシャリスト事業」で復活した福井の伝統野菜「新保ナス」の栽培や調理をきっかけに、啓蒙地区のグループ・学校との継続的な連携活動が行われている。さらに出張食育教室や介護福祉の学習も充実してきた。毎年、三年生の課題研究発表会には、連携したグループの方に参加していただいている。

平成二四年からは県の「職業教育充実のための取り組み事業」により、産業界との連携を強め、社会から求められるニーズや技術進展に

対応した教育の充実や、技術・技能の急速な変化や進展に対応した専門教育のための教員の授業力向上が求められている。その事業のなかでも地域連携はさらに重要となり、実践的な職業教育を展開している。

3 国際交流

平成七年にインドネシアに農業研修生を派遣したのを始まりとして、インドネシアとの交流活動が発展してきた。平成一二年には国立タンジュンサリ農業高校との友好協定が初めて結ばれ、両校相互の派遣と受入が行われている。平成二三年には第九回目となるインドネシア派遣と二回目の友好協定更新がされた。タンジュンサリ農業高校の授業に参加したり。福井農林高校の教員による授業が行われたりと、回を重ねるごとに両校の交流活動は深まってきている。

4 体験活動（インターンシップ）

県の「高校生（緊急）就職支援事業」により就職内定率向上と早期離職防止を図るために、各学科では先進農家や関連する企業における体験実習を行っている。一企業あたり生徒二〜五名程度で連続した期間での就業体験を行い、将来の進路選択に取り組み態度や能力を育成している。

5 情報発信

校外のコンクールやイベントに積極的に参加している。毎日農業記録賞高校生部門、牛乳・乳製品利用料理コンクール、全国食育王選手権、ごはんCUP、福井スイーツグランプリ等で優秀な成績を収めている。環境土木部では、外部機関と共同で取り組んできた生態系調査や小規模水田魚道の開発に関する研究により、平成一八年に第九回日本水大賞グランプリを受賞した。平成二一年には福井で全国植樹祭が開催され大会の植樹にも参加した。

6 主な導入施設設備等

平成一七年度校内LAN整備。平成二二年度鶏舎改修工事。

近年の主な導入設備等は平成一五年度バイオテクノロジー実験装置・穀物乾燥機、平成一七年度破砕機（チップパー）・密閉型堆肥装置、平成一八年度真空凍結乾燥機、平成二〇年度プレハブ式冷凍庫冷蔵庫・C A I学習装置・タイヤシヨベル、平成二二年度トラクター、平成二二年度モルタルバイブレーター、平成二四年度現況観測装置（電子平板・測量機）である。

(五) 進路指導部

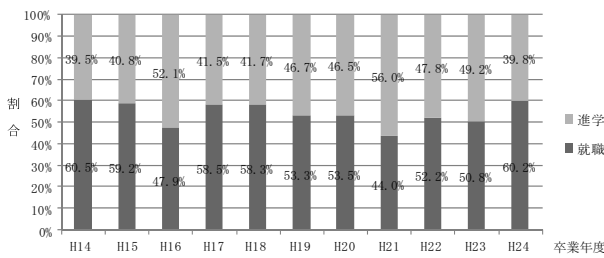
平成二四年（二〇二二年）は民主党の野田良彦第一次改造内閣発足から始まり、自民党圧勝の衆議院総選挙による第二次安倍晋三内閣発足で終わることになった。安部内閣が掲げる財政政策、金融政策、成長戦略の三本の矢でのデフレ脱却に注目し、今後の高校卒業時や卒業後の景気回復や雇用改善に期待したい。

さて、ここ一〇年間における大きな経済的な出来事としては、何といてもアメリカ大手の投資銀行の一つであるリーマン・ブラザーズが、二〇〇八年（平成二〇年）九月に破綻したことで起こったリーマン・ショックないし「リーマン危機」である。これを契機として発信元のアメリカはいうまでもなく、ヨーロッパや日本をも巻き込んで、世界は未曾有の経済危機に陥り、現在もその影響が続いている。

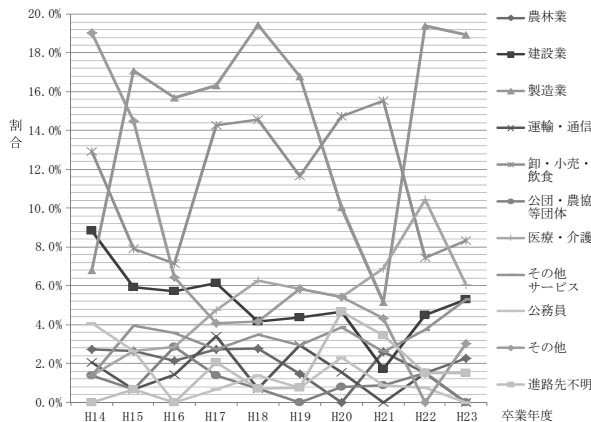
高校生を取り巻く雇用情勢も一〇年間で大きく変化した。ここで、本校の過去一〇年間の進路先状況をまとめてみた。ハグラフ1 Vは進路先の就職・進学割合である。就職（公務員含む）・進学別割合はこの一〇年間、平成一五年三月卒の就職六割の頃から徐々に進学が増加し、平成二二年度卒は逆に進学が六割近くになった。これはリーマ

ン・ショックの影響による就職難を反映していると思われる。その後、就職が増加し、平成二五年三月卒では再び就職六割に戻った。近年の就職増については進学しても就職難という現状からくる高校卒からの就職と考えられる。

次に、ハグラフ2 Vは一〇年間の就職先の職種別割合である。リーマンショックの影響を受けたと思われる職種は製造業である。製造業への就職については年度差は見られるが、平成二〇、二二年度卒に激減している。その反面、平成二〇、二二年度卒に増加したのが卸・小売・飲食業であるが、近年は減少傾向にある。同様に減少傾向にあるものは、公務員、建築・建設業、その他（家業・縁故就職）である。



グラフ1

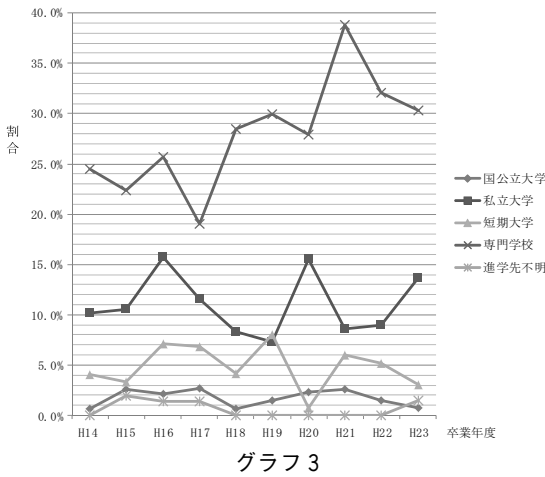


グラフ2

逆に、増加傾向にあるものは医療・介護関係で、高齢化社会の現状とマッチングしている。また、一〇年間ほとんど変化がないものは農業、運輸・通信業、公団・農協等団体であり、特に農林業や農協関係への採用数については今後、増加させていかなければならない。事務系については、女子の希望が増加しているが、近年、福井銀行やJAなどの金融機関にも採用されている。公務員については、グラフにはないが、全国的に公務員希望が増加する中、平成二四年度卒で六年ぶりに福井県庁総合土木職に一人合格者を出した。意欲と地道に勉強する努力がこの結果を生んだと思われ、今後も合格者を出していきたい。

次に、ハグラフ3Vは一〇年間の進学先の校種別割合である。全年度を通して見ると、どの年度卒も専門学校が圧倒的に多い。特に平成二一年度卒三八・八%をピークに増加傾向であったが、ここ近年は減少傾向にある。これは保護者の経済的負担が重くのしかかっているためだと思われる。

一〇年以上ぶりに福井県立看護専門学校に平成二三〜二五年度に一人ずつ合格者が出た。専門学校卒業後、医療・介護・福祉系、美容系、ペット系、ブライダル系など多方面で活躍している。また、私立大学は大きな割合が



グラフ3

二つあるようだが、近年は増加傾向にある。特に、専門を生かした学部・学科への増加が多くなっている。平成二〇年度卒の増加については、平成一八〜二〇年度までの三年間、文部科学省から「目指せスペシャリスト」の指定を受けたことによる進学意識が高まったからだと思う。また、国公立大学については、全年度とも一〜四人の合格者を出している。平成一五〜一七年度卒頃は三重大や岐阜大の合格者であったが、近年は希望する生徒がいなくなってきた。また、入試方法としてはほとんどが推薦入試であるが、近年AO入試が増加し、意欲があれば誰でも出願できるようになってきた。平成二三年度卒では、このAO入試で福井大学工学部建築建設工学科に一〇年ぶりに合格者を出せた。新潟大学は隔年に一人、福井県立大学はほぼ毎年一〜三人の合格者を出している。専門性を生かした学部・学科に合格しているわけで、卒業後は福井県を支える産業人・教員になってもらいたい。

例として、教員採用試験に合格された方としては、教科「農業」で東京農業大学卒（平成二〇年度卒）、「英語」で仁愛大学卒（平成一九年度卒）生が出ている。短期大学については、年により差があるが近年は減少傾向にある。中では、指定校推薦、公募制推薦、AO入試などによる仁愛女子短期大学幼児教育学科への希望が増加している。

最後に進路指導とともに重視されるものとして、高等学校におけるキャリア教育の在り方がある。新しい学習指導要領においてもキャリア教育が位置づけられ、高等学校学習指導要領総則の中に「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること」と明記された。高等学校の教育課程の基準の改善の基本的な考え方として、知能・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成バランスを重視することがあり、これらの学習や勤

労働・職業観を育てるためのキャリア教育などを通じ、学習意欲を向上するとともに、学習習慣の確立を図るものとした。ボランティア活動などの社会奉仕に関する活動や就業体験に関する活動の充実を図る。キャリア教育は、自分で生きていくために必要な力、自分らしく生きていく力を身につけさせる点が進路指導との違いだ。社会は厳しい。厳しい世の中を生きていかなければならない。今日の厳しい現状の中でも、働くことの意義や喜びを感じつつ、これに立ち向かうための活力が必要だ。

今、夢がなくてもいい。いつか見えてくるものがきつとあるはず。しかし、その「いつか」は、誰かのために懸命に何かを成し遂げ、その人（人たち）のために僅かでも役に立てた、と実感する経験を積まないと訪れない。「やってよかった」「生きていてよかった」という私たちの感慨の大半は、自分が誰かの笑顔に貢献できたと実感した時に湧き上がる。誰かの笑顔に貢献できた自分を実感できる機会を数多く、幅広く生徒たちに提供していきたい。

（六）保健部

保健部は次の三点を柱に活動している。

- 1 心と体の健康教育の充実
 - 2 掃除の徹底
 - 3 生徒保健委員会活動の促進
- 以下、この三点を中心に一〇年間を振り返ってみたい。

1 心と体の健康教育の充実

a 救急救命講習会

平成一七年度（一八年二月）に、全職員が不測の事故に対応できる

ように心肺蘇生法（AED講習を含む）の講習会を、約一時間半、福井市消防局東消防署の職員に来てもらい実施した。

翌年から、生徒対象の心肺蘇生の方法やAEDの取扱講習会を実施している。福井東消防署の「普通講習」を三時間行い、受講者には「普通救命講習Ⅰの修了証」が交付されている。

平成一八年度と一九年度は二年生を対象に三月の特別時間割中に行い、二〇年度には一月に一年生、三月に二年生が受講した。翌二一年度からは一年生を対象に実施しており、現在に至っている。

なお、平成一九年度には本校独自に二台目のAEDを配備し、事務室と園芸実習棟に備えた。

b 性教育について

本校では、性教育を重視し、平成一八年度までは、養護教諭が各クラスのLHの時間に一時間「性教育」を行っていた。

年度	一年生	二年生	三年生
一四	避妊と性情報	つくられる男、つくられる女	性的自立
一五	性交と避妊	男らしさ、女らしさ	性的自立
一六	性行動について考える	大好きマップでコミュニケーション	性的自立
一七	性感染症の実態とその予防	恋愛の達人になろう	性的自立
一八	性感染症の実態とその予防	恋愛の達人になろう	性的自立

こうした中、平成一七年度には、文部科学省の「性教育実践調査研究事業」を行った。二月一日に記念講演会が実施され、「思春期・青年期の心と体〜一〇代の性の実態について〜」の演題で、鈴木秀文氏（愛育病院産婦人科部長）を講師に招き行った。

平成二〇年度からは、それまでの形式を改め、自己理解・他者理解の講演会を実施している。

二〇年度は、一年生対象の講演会（演題「大切な人を守るために」講師・循環器病院 中丁栄美子氏）と、二年生対象のデートDV防止の講演会（演題「ハッピーラブ・暴力のないパートナー関係」講師・H.E.A.L. ホリスティック教育実践研究所 金香百合氏）を実施した。

二二年以降は一年生を対象に実施しており、現在に至っている。（演題「エイズについて考える」講師・循環器病院 中丁栄美子氏）

なお、薬物乱用防止講演会は生徒指導部を中心に毎年実施しているが、平成二〇年度には、「夜回り先生」として著名な水谷修氏を講師に招き、「さらば、哀しみの青春」の演題で講演を行った。

c 健康管理、感染症予防

平成二二年度には、新型インフルエンザが全国的に流行した。本校においても、一月に五七名が感染し（二月には一三名と収束）、感染拡大を可能な限り抑制することが求められた。

ここでは、健康管理や保健指導の徹底（朝のS.H時の健康観察の実施、教室等への消毒用アルコール配置による手指消毒、石鹸・流水による手洗い指導およびマスク着用呼びかけ、印刷物等による保護者への情報提供、予防対策の啓蒙）と、校内の連絡体制の整備（健康状況把握、出席停止、学級閉鎖等の決定、臨時休業中の対応等の決定）がすすめられた。

インフルエンザの感染は、翌二二年度（一月に一八名、二月に一四名）、二三年度（二月に二三名）にも一定の流行が見られたが、二二年度の教訓をもとに素早く対応できた。

また、二四年度には、本校で一〇月下旬から流行性角結膜炎が流行した。スポーツ課・医師との連絡を密にし、教室などの消毒や生徒・保護者への啓蒙などの対応をすすめた。その結果、一定数の感染に食い止めることができた。

感染症の拡大予防のために、福井県は「欠席者情報収集システム」を導入した。二四年度の一月から運用になり、毎日養護教諭が対応している。

d 保健統計及び生活実態調査

平成一四年と二四年の身長・体重（三年生）は次の通りである。

体重		身長			
男子					
全国	県	本校	全国	県	本校
六三・二kg	六三・九kg	六四・二kg	一七〇・七cm	一七一・五cm	一六九・六cm
六二・九kg	六二・七kg	六七・三kg	一七〇・七cm	一七〇・七cm	一六九・九cm
女子					
全国	県	本校	全国	県	本校
五三・五kg	五四・〇kg	五三・二kg	一五七・九cm	一五八・八cm	一五七・六cm
五一・九kg	五三・二kg	五三・九kg	一五八・〇cm	一五八・〇cm	一五七・八cm

男子の身長、女子の身長・体重は、県・全国平均とそれほど変わらない。しかし、二四年の男子体重は県・全国平均を大きく上回っている。遡ると、平成一七年頃から男子の体重は県・全国平均を大きく上回るようになってきた。背景には相撲部の活躍があるように思えるが、保健統計における本校の特徴と言える。

また、平成二一年七月に、県内三七高校の六、七七六人の生徒（男子三、三七〇名、女子三、四〇六名）を対象に、高校生の生活実態調査を行った。本校では、全クラスで実施した。さらに、二四年一〇月には、福井市内の高校生（男子九六九名、女子九一六名）に再度高校生の生活実態調査を行い、本校では全クラスで実施した。

「朝食の摂取状況」で、本校生徒は、二二年、二四年とも「毎日食べる」と回答した割合が、約三分の二にとどまっており（平均はいずれも約八割）、男子生徒に至っては「ほとんど食べない」が一二％近くもいて、問題である。

また、「寝起きの状況」で、「すっきり目が覚めた」と回答した男子生徒の割合が、二四年調査結果では平均よりも少なかった。

2 掃除の徹底

a ワックスがけ

平成二〇年度から校舎のワックスがけに取り組んでいる。二〇年度は一二月に教室のワックスがけを実施した。その翌年からは、七月には管理棟と第二教棟の廊下、一二月に教室のワックスがけを行っている。

平成二三年度には廊下のワックスがけを全校舎ローテーションで実施することに決め、翌二四年度は第三・四教棟の廊下のワックスがけを行った。

b 環境整備、大掃除

本校では、現在五月と一〇月に「環境整備」として、校舎外の大掃除を実施している。

平成一八年度までは、二回の「環境整備」と月例大掃除が行われていた。その月例大掃除として、六月・七月は外掃除を実施していた。

しかし、校務員の日常的な整備活動により、除草や溝掃除などの外掃除の逼迫性が薄れ、平成二〇年度からは環境整備として年二回外掃除を実施している。

こうした中、内大掃除も、「月例大掃除」という呼び名をなくした。田植祭や体育祭、農文祭などの学校行事の後や学期末、また、卒業式や入学試験に備えた形で大掃除を実施している。

c 環境美化・ゴミの分別についての学校評価

平成一八年度から「学校評価制度」が導入された。教職員、生徒、保護者それぞれに対しアンケートを実施し、具体的取組がどこまでなされたのかを判断するものである。

保健部においては、環境美化とゴミの分別に関して取り組みをすすめている。この取り組みの一環として、平成二二年度に教室のゴミ箱を「燃えるゴミ」「燃えないゴミ」「ペットボトル」「缶」の四つに分けて設置した。教室におけるゴミ分別をすすめる中で、ゴミ分別の意識がそれなりに定着してきている。

3 生徒保健委員会活動の促進

a 農文祭での展示とゴミの分別回収

保健委員会として、平成一九年度まで「禁煙」をテーマに（平成一八年度だけ「食育」がテーマ）農文祭での展示活動を行った。二〇年度からは、農文祭の模擬店における衛生指導をすすめている。また、校外からも多くの人が訪れる農文祭で、ゴミの分別回収の徹底をはかっている。

b 環境整備や内大掃除等での活動

年二回の環境整備及びワックスがけの際に用具等の準備や後始末を行っている。特に、ワックスがけでは、クラス全員による汚れ落としの後に、保健委員が担当区域のワックスをかけている。また、生徒会による清掃ボランティアにも保健委員会の活動の一環として参加している。

c 健康に関する啓蒙活動

平成二一年の一月に新型インフルエンザが大流行したことを受け、インフルエンザ予防のポスターを作成し校内に掲示した。また、手洗いを徹底するために、手洗い場に石鹸を設置し管理補充を徹底した。この経験がもとになり、翌二二年度から保健委員会の活動として、手洗い・うがいのポスターづくりと掲示が毎年すすめられている。二三年度からは食中毒防止やゴミ分別についても扱い、啓蒙活動をすすめている。

また、毎月の「保健だより」発行を一年生の保健委員が担当し、継続して行っている。

(七) 図書部

1 図書館の概要

本校図書館の歴史は、昭和二八年高志高等学校から独立した時、旧本館で蔵書五〇〇冊を開架式で閲覧することから始まった。昭和三八年に第三教棟の完成に伴い、二階西側に図書館が移り、現在に至っている。その間、平成四年に司書室、書庫が設けられ、平成一二年には、耐震工事により、南側窓辺にコンクリートの筋交いが入った。

館内は閲覧室（一五三・四五㎡）、司書室（二〇・九平方メートル）、書庫（三〇・七㎡）からなり、備品は大机八脚、椅子四五脚、パソコン二台である。また、蔵書数は一万八、六九二冊（生徒一人あたり四五冊）、平成二二年度よりコンピュータによる貸し出し管理を行っている。

2 図書館活動

図書館の運営は図書部教員と生徒会図書委員とで行っている。教員の配置は従来五名であったが、平成一八年度より四名に減員になった。司書の配置は積年の悲願であるが実現されていない。県立高校の司書未配置校は坂井農業高、小浜水産高と本校の三校だけだが、学校再編で小浜水産高が若狭高校と合併され、坂井農業高も来年度から再編され学年八クラスの坂井高校になると、いよいよ本校一校だけとなる。一二〇年の伝統の更なる発展のためにも文化の砦としての図書館機能の充実を図るため、選任司書の配置は是非実現して欲しい課題である。

図書予算については、生徒数の減少もあって一〇〇万円から七〇万円に減額されている。平成二二年には農友会の故山崎義弘名誉会長か

らご自身八度目となる二〇万円の寄贈をしていただき、御遺志に沿うように、専門書や小説など生徒に役立つ本や楽しめる本を購入させていただいた。

視聴覚教育については、授業やロング・ホームでの視聴覚教室の利用のほか、各行事の記録や録画したテレビ番組・学校関係のニュースをDVD化しているが、特に二四、二五年度は福井県視聴覚教育研究大会（福井・吉田大会）の高校の部研究委嘱校となり、その研究にむけて視聴覚室及び機器の利用が増えている。大会に関連して設備充実のため、視聴覚室プロジェクト天井吊り下げ設備と一二〇インチのロールアップ式スクリーンを、また農友会館「大地」二階には上記設備に加えてオーディオセット、それに備品としてタブレット端末とブレゼンテーションシステム三セットを一二〇周年の学校記念事業として農友会から御寄付いただいた。県の予算削減で視聴覚機器のデジタル化のための設備の更新が遅れている中、非常にありがたい贈り物をいただき、大会だけでなく、授業などで活用させていただいている。

その他、平成二〇年には県より五〇インチ液晶テレビとブルーレイレコーダー一式、平成二一年図書室書庫にブルーレイレコーダー一台、平成二三年北陸電力教育振興財団による助成事業として四〇インチ液晶テレビとブルーレイレコーダー、キャスター付きテレビ台二セットを寄贈され二階、三階に配置し、各教室で利用している。

一一〇周年時に課題としてあげた図書のコンピュータ化に関しては平成二二年に図書管理ソフト「EGG3」を導入し、バーコードによる蔵書及び利用者の管理とスキャナーによる図書業務のコンピュータ化を行うようになった。

3 読書会

平成八年から行われている放送を使った集団読書、平成一四年から実施された生徒自身が自分の読む本を準備して一時間静かに読書を行う一斉読書は現在も五月と一月のロングホームを利用して行われている。平成一二年から実施されている一月の放課後図書委員を中心に希望者の参加によるミニ講演会はミニ読書会に姿を変え、先生方や生徒による本の紹介を行ってきたが、平成二三年からは県立図書館の司書を講師に招きブックトークや読み聞かせをしていただいている。このように従来から行われている読書会は少しずつ姿を変え、マンネリ化しないようにしている。平成二四年からは新たな取り組みとして朝読書を実施した。本来の朝読書は毎日実施するものであるが、本校では放課後の当番実習の関係で校時を繰り下げることが困難であり、各学期末の特別時間割の時に始業前一五分間実施することにした。各学期五日程度、年間一日ほどではあるが、生徒の多くが始業前に静かに読書している姿は、落ち着いた一日の始まりを感じさせ気持ちよいものである。しかし、トピック的に行うので事前の準備を忘れ読書に取り組めない生徒もいる。今後はそういう生徒への手当を考えながら、行事の定着をはかることが課題である。

また、平成一九年からは一年間の借り出し冊数の多い生徒を多読賞として顕彰している。

4 最後に

学校図書館は読書センターとして、また学習・情報センターとしての機能の充実を求められている。しかしその一方で、教職員の定数削減や予算削減によって物理的に図書館の運営が難しくなっているのが実情である。県立高校でも九校で図書部として独立して運営していくのが困難となり、庶務部や教務部と合併する学校が出てきている。

かし、司書のいない本校で安易に合併を行うと図書が混乱してしまう危険性がある。

今後も少子化や予算削減の流れが変わらない中、図書部の人員・予算の確保は難しくなってくると思う。この現状の中で行事の精選はかりながら生徒に読書の楽しさを感じてもらおうのが今後の課題である。

放送による一斉読書・ミニ読書会の図書一覧

年度	一斉読書	ミニ読書会
H一五		さんちき 吉橋通夫 作
H一六	高瀬舟 森陽外	
H一七	奉教人の死 芥川龍之介	青いエグジツト 石田衣良作
H一八	佐賀のがばいばあちゃん 島田洋七	糸車 山本周五郎
H一九	新婚さん 吉本ばなな	ひよこの眼 山田詠美
H二〇	モモ ミヒヤエル・エンデ	
H二一	雨ニモマケズ・虔十公園林他 宮沢賢治	葉っぱのフレディ レオ・バスカリア
H二三	高瀬舟 森陽外	父の詫び状 向田邦子
H二三	佐賀のがばいばあちゃん 島田洋七	ブックトーク・読み聞かせ 県立図書館田中智美
H二四	雨ニモマケズ・虔十公園林他 宮沢賢治	ブックトーク・ストーリーテリング 県立図書館田中智美
H二五	怪談より耳無し芳一の話 小泉八雲	ブックトーク・ストーリーテリング 県立図書館田中智美

○図書館部門別蔵書冊数

0 総記	1 哲学	2 歴史	3 社会	4 自然	5 工学	6 産業	7 芸術	8 語学	9 文学	計
四四二	四四一	二八五	一三八	一四三	一五八〇	一八〇二	二、四三	四二七	四三三	八六五二

○生徒一人当たりの冊数……四・五冊

(ハ) 教育相談室

教育相談担当は、教育相談室担当者・養護教諭・各学年相談係の五人構成である。平成二二年度より各学年相談係を学年主任にお願いしている。

平成一六年度より毎週一回の相談者担当者会議を持ち、各学年の実態把握や対応策の検討などを行ってきた。年によっては、相談室担当者が学年会に出席させていただき実態把握・情報交換などを行ってきた。

気がかりな生徒については、特別支援教育センターの先生に発達検査をお願いし、発達障害を抱える生徒の得手不得手を調べるテストをしていただいた。学校での対応法の検討や進路を考える指導に活用している。場合によっては保護者の要請を受け、その分析結果から分かった事柄を校内職員研修会で話し合い、望ましい関わり方、言葉かけ、対処法について学習し、共通理解を図った。

また、生徒の多様化に伴い、特別支援センターや医療機関とも連携を取り、生徒のニーズに応えられる教育相談室を目指している。

1 相談件数の推移・相談内容

平成一四年度～一八年度は、電子メールによる相談を受けていたこともあり、平成一六年度は一一九件、平成一七年度は一三八件、平成一八年度が二四八件と多かったが、平成一九年度は四三三件、平成二〇年度は三五五件、平成二一年度は二九九件、平成二二年度は五一一件、平成二三年度は三四四件。平成二四年度は八四四件であった。相談件数が五〇件を超える年は、いずれも相談室登校による来室があった。

相談内容については、いずれの年も友人関係の悩みが最も多く、携帯電話の所持率増加に伴う、インターネット上の書き込み等での人間関係のもつれが増えている。

2 構成的グループエンカウンター

平成一五年度に総合的な学習の時間に実施し、以来、平成一九年度以降は新入生オリエンテーションの日程内で「クラス開きのエンカウンター」を実施している。集団学習体験を通して、関係づくりと自己発見による行動の変容と人間的な自己成長をねらったものである。「自己の本音」を表現し、「他者の本音」を受け入れることにより、生徒同士の豊かな人間関係が育まれ、集団の中に自分の居場所を作るのに効果的である。

3 Q-Uテスト

平成一九年度より生徒理解の手がかりとして、一年生を対象に年に一度実施している。「Q-Uテスト」は生徒個人と学級集団の情報をデータ化し、生徒にとって学級を居心地の良いものにすることを願って実施している。少子化時代の様々な問題の根底にある人間関係の希薄さが、いじめや不登校、学級崩壊などを引き起こしていると考えられる。これらの問題行動の予防や、学級診断アセスメントとして活用している。

4 教育相談講演会

社会の風潮に影響を受けやすい年頃の子どもの心に添った講演会が、各部主催で行われているが、教育相談が主催した講演会は以下の通りである。

平成一五年度 鈴木るみ子氏（心理カウンセラー）

「自立への旅路 ～I LOVE MEから始めよう～」

平成二一年度 西尾浩昭氏（盲学校教諭）

「一度で二度おいしい人生」

平成二三年度 鈴木るみ子氏

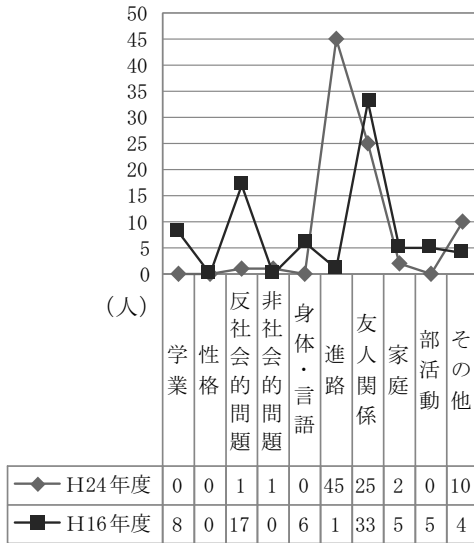
「人生は自分でつくる物語」

～I LOVE MEから始めよう～

5 職員研修会

平成二〇年度には集団に溶け込めない生徒や不登校の生徒を抱え、福井大学の広沢教授や「まどころクリニック」の間所院長をお招きし、事例研究会等も行った。

平成一九年度からは「特別支援教育」実施に伴い、相談担当者が研修を受講するようになった。平成二二年、二三年には特別支援教育センターより指導主事を招き、「発達障害理解」の職員研修会、平成二四年には川村信治先生（勝山南高校教諭）による「Q-Uテスト分析と活用」についての職員研修会を行い、生徒理解を深める場を持った。なお、教育相談担当者は、平成一五年度が竹原真規子、平成一六年度から平成二二年度が宇野智子、平成二二年度から平成二五年度が稗田浩子であった。



平成24年度／16年度 利用数比較

(九) 修明寮

修明寮は、遠隔地から通学する生徒の寄宿舎として校地内西側に建てられている。鉄筋コンクリート二階建てで男女三六名ずつ計七十二名が収容できる施設である。遠隔地の生徒以外でも、部活動で帰宅が遅くなったり、朝練習などで通学が不便になる生徒や、冬期間のみ通学が不便になる生徒も寄宿している。現在は男子二名、女子二名が寄宿している。

寮での生活は寮則や寮生心得をもとに、専任舎監の坂下貞雄先生や給食員中村さん、学校舎監の先生方の指導の下、朝夜の点呼を始めとする規則正しい生活をしている。また、全員での清掃活動や給食当番などの自治的な活動を行っている。

寮の行事としては、四月には新入寮生を迎える入寮式、三月には卒業生を送るさよならパーティを行い、寮生全員で和やかな雰囲気で行っている。また、本校はインドネシアのタンジュンサリ農学高校との交流があり、隔年で本校での学習を学びに来る。その際に修明寮に留学生を受け入れ生活を共にしている。受け入れ前日には、前年度にインドネシアに留学した生徒も交え、歓迎パーティを行い、受け入れ体制のよいきっかけ作りとなっている。農文祭ではブースを設け、生活の様子などを展示し、修明寮の広報の場としている。

寮生を支えるスタッフの情報交換の場として、月に一度修明寮関係者会議を実施している。寮生の確認や舎監割り出しの確認、生徒指導や保健・給食面での情報交換、備品や修理等の管理面や会計等のことについて意見を出し合いながら、情報を共有している。

大変豊かになっている近年において、寮で規則を守り規則正しく集団生活をするのは、心身ともに大きく成長し自立していこうとする高校生にとって、大切な経験だと思う。その一翼を担っていることに責任と誇りを持って生徒たちの成長を支えていこうと思う。

七 学校評価

(一) 実施までの経緯

平成一九年六月、学校教育法第四二条に「学校評価に関する規定」が定められ、すべての学校に自己評価、学校関係者評価の実施と公表、報告が義務づけられた。

背景は、「学校週五日制」の下、地域の協力を得ながら「特色ある学校づくり」や「開かれた学校づくり」を進めるためには、学校が説明責任を果たす必要がある、その実現のためには、教職員自らが日々の教育活動を点検・評価し、改善していく必要があることだった。実は平成一九年の義務化より五年前の平成一四年、文部科学省は「小・中学校設置基準の設置、高等学校設置基準の一部改正」を行い、「各学校が教育活動その他の学校運営の状況を自己評価し、その結果を公表するよう努めること」と、努力義務を課していた。

こうした動きを受けて福井県教育委員会は、義務化前年度の平成一八年度と一九年度の二年間、学校評価モデル校三校を県内小中高校から指定、全校種本格実施に向けて準備作業に入った。本校も高校の評価モデル校一〇校の一つに選ばれ、学校評価について検討、試行が行われた。

(二) 学校評価の流れ

学校評価は、PDCAサイクルで行われ、先ず学校経営方針を立てるP「計画」から始まる。この計画書を「スクールプラン」と呼び、校訓、教育目標、重点目標、具体的取組が体系的に記載される。重点目標の項目は、各学校が必ず取り組むとされている「学習指導」「生徒指導」「進路指導」の共通項目と、学校の実情に合わせて学校が独自に

設定する独自項目とに分けられる。そしてスクールプラン作成と合わせて、「学校評価総合シート」が作られる。このシートは「評価の観点」「目標指数」「判断基準」「判定基準」からなっており、判断基準は後のC（評価）段階でのアンケートに使用される。

こうした目標設定は年度始めで行われ、次のD「教育活動」が一年間展開される。

C「評価」は、「評価アンケート」、「学校自己評価」、「学校関係者評価」で行われる。計画段階の学校評価総合シートをよりどころに、生徒、保護者、教員に対して重点項目ごとにアンケートを行い取りまとめる。そのアンケート結果を基に学校が自己評価を行い、次年度への改善・向上策を記した「学校評価書」を作成する。さらにその「学校評価書」や学校教職員からの聞き取りなどから、学校関係者による評価が行われる。学校関係者は、保護者、地域住民などから構成される。

学校自己評価や学校関係者評価は、次年度の計画立案に活かされるときともに、ホームページに公開、県教育委員会に報告される。

(三) 本校の学校評価

本校は、平成一八、一九年度の二年間、学校評価モデル校に指定され、二年間の試行期間を経て平成二〇年度から本格的に実施している。本校の重点項目は、共通項目の他、各部、各学科、各学年等合わせて一五項目に及び、他の学校の六〜八項目と比べて二倍となっており、全校体制で取り組んでいることが特徴である。評価アンケートは各重点項目毎に、教職員回答は取組指標、生徒回答は成果指標、保護者回答は満足度指標としてとらえ、判断基準をA〜Dの四段階で示して実施している。また、結果の判定はアンケートでA（大変満足している）

及びB(だいたい満足している。)と答えた人数の割合で行い、A+Bの回答が八〇%越えることを目標としている。

学校関係者評価委員は、啓蒙公民館長、農友会事務局長、元福井農林高校校長、PTA会長にお願いし、学校行事等への参加をいただきながら的確で示唆に富んだ評価をいただいている。

四 評価の結果

評価の結果について、共通項目の一つである学習指導を例に見てみる。重点目標は「生徒の学習意欲を高める」で、それに対する具体的取組は「分かる授業の推進」としている。その評価の観点として、教員は、「自主補助教材等を作成したり授業内容を工夫しているか」で、生徒は、「授業が理解できているか」、保護者は、「本校の授業に満足しているか」で評価してもらう。その判断基準は、教員は工夫した授業実施率が、Aが七五%以上、Bが七五%～五〇%、Cが五〇%～二五%、Dが二五%未満で、アンケートに回答してもらう。生徒は、授業が理解できた割合が、Aが七五%以上理解、Bが七五%～五〇%、Cが五〇%～二五%、Dが二五%未満を判断基準に回答、保護者は子どもの理解度に、Aが満足している、Bが大体満足している、Cがあまり理解していないので不満足、Dが殆ど理解していないので不満足で判断してもらう。平成二三年度の結果では、AまたはBで答えた割合が、教員は一〇〇%、生徒は七一・七%、保護者は九〇・一%となっている。目標指数はいずれも八〇%なので、生徒の理解度が目標に達しておらず、結果の判定としては要改善で生徒の授業理解度について次年度への改善向上策が求められることになる。

以上、このような形で、他の二〇の具体的取組に対しても、アンケート結果から判定が出て評価されていく。目標指数で取組全体を概観

すると、生徒のA+Bの割合の平均値は、七八・五%で目標指数に達していないが、教職員、保護者の平均値は生徒より高く九〇%近くになっており、かつすべての項目で目標指数をクリアしている。生徒の結果で目標指数の八〇%に達していないのは、授業の理解度、図書関係の本の貸し出し利用、図書館利用や保護者への情報提供などで、毎回目標を下回っている。

学校評価は、平成二〇年度に取り入れられて五年目が過ぎた。学校評価の目的は、教育の成果を確かめ学校として組織的・継続的改善を図ること、説明責任を果たすことで学校・家庭・地域の連携協力を得ること、の二つであるが、そうした目標のかなう学校評価になっているか点検する必要がある。目標に対して評価項目・評価基準が適切か、アンケートの結果は実態を反映しているか、アンケートの結果が年度度の工夫、改善につながっているかなど、見直すべき課題も多い。中でも、この学校評価の鍵を握るのは、先生方の自己診断能力である。個々の教員が自分の実践を振り返る、組織の一員として自校の組織の在り方を見つめる、こうしたことができて教育は改善されていく。平成二二年に改訂された文部科学省の学校評価のガイドラインでは、これらの評価に加えて第三者評価の項目が登場している。学校関係者評価も第三者評価も帰する所は、教職員がそれらを参考に如何に評価を自分のものとして捉えられるかどうかにかかっている。

学校評価アンケート結果年度比較表（A+Bの割合％）

具体的取組	評価の観点	回答者	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	備考
わかる授業の推進	授業を工夫している	教員	83.7	95.6	94.7	100	97.4	教務
	授業が理解できている	生徒	67.7	72.1	76.6	71.7	80.5	
	授業に満足している	保護者	94.9	84.2	82.7	90.1	90.8	
挨拶の推進	挨拶指導をしている	教員	98	90.7	97.5	100	100	生徒指導
	挨拶をしている	生徒	79.1	82.6	86.4	87	91	
	子どもが挨拶している	保護者	88.5	89.5	89	88.7	88.7	
規範意識の醸成	規則指導をしている	教員	/	/	97.5	100	100	生徒指導
	ルールを守っている	生徒			88.7	89.0	93.0	
	子どもがルールを守っている	保護者			88.5	87.0	89.0	
キャリア教育の推進	キャリア教育を実践している	教員	65.9	84.6	88.9	83.3	91.9	進路指導
	進路に関心や目標を持つ	生徒	77	76.7	86.9	78	78.4	
	子どもと進路を話し合う	保護者	84.1	83.3	80.2	79.7	79.3	
図書館利用	図書館を授業等で利用する	教員	73.9	70	73.7	80	79.5	図書
	利用した本の冊数	生徒	22.5	29	22.4	23.5	26.6	
	図書館行事、施設に満足している	生徒	47.2	55.6	56.3	50.5	68.9	
掃除活動	清掃監督に行った	教員	76.2	88.9	89.7	95.1	100	保健
	清掃に取り組んだ	生徒	78.8	84.4	83.9	86.8	91.2	
	環境美化が行き届いている	保護者	86.7	95.4	93.9	95.8	95.2	
ゴミ分別	分別の指導をしている	教員	74.4	86.7	90	82.9	85.7	保健
	分別のやり方を理解している	生徒	86.3	90	94.5	90	94.5	
	分別している	生徒	82.4	83.8	91.5	91.5	93.2	
配布物	保護者に情報提供している	教員	90.2	75.6	73.7	64.1	82.1	庶務
	配布物を保護者に渡している	生徒	60.9	71.5	71.8	72.3	77.2	
	配布物やホームページを読んでいる	保護者	76.3	88.7	81.3	84.1	81.5	
安全	防災、安全を意識させている	教員	/	93.3	92.3	92.5	85.7	庶務
	防災、安全に気をつけている	生徒		57.7	65.5	69	75.1	
	プロジェクトや資格取得指導を行っている	教員		80.6	72.7	93.8	78.9	
資格取得や実習に取り組んだ	生徒	73.5	71.9	78.3	80.2			
農業教育に満足している	保護者	96.8	95.6	97.4	97.1			
地域交流	地域、産業界連携に取り組んだ	教員	/	71.8	78.8	82.4	63.2	実習
	地域と交流できた	生徒		51.5	55.5	55.6	70.7	
	地域交流、産業界連携の取組に満足している	保護者		97	97.5	98.7	97.3	
基礎的な知識と技術の習得	意識して指導している	教員	92.9	83.3	88.9	100	90.9	生物
	専門学習に意欲的に取り組む	生徒	84.8	85.4	96.9	85.3	90.4	
	子どもが楽しく取り組んでいる	保護者	71.6	88.6	94.3	95.1	97.0	
資格取得	資格取得の学習指導をしている	教員	80	100	83.3	100	100	工学
	資格取得の専門知識を理解できた	生徒	90.1	87.5	87.5	83	87.9	
	子どもが資格取得に取り組んだ	保護者	75	82.1	80.5	78.3	75.3	
地域連携	生活に生かせる授業に取り組む	教員	100	83.3	100	100	100	生活
	専門学習に努力した	生徒	88.5	89.8	88.1	91.3	94.2	
	子どもの専門学習に満足している	保護者	80.7	92.3	89.1	89.5	93.5	
資格取得	資格取得の学習指導をしている	教員	70	85.7	77.8	50	87.5	流通
	資格取得に取り組んだ	生徒	85.4	83.8	81.6	89.1	91.1	
	子どもの結果に満足している	保護者	88.3	88.4	85.6	86	88.7	
学習習慣	試験前学習会で学習させる	教員	/	100	100	100	88.9	1学年
	試験前に学習した	生徒		81.4	76.5	80.9	80.6	
	子どもが家庭学習をするようになった	保護者		70.6	59.8	65.9	70	
基本的生活	時間を厳守する指導をしている	教員	90.9	100	100	87.5	100	1学年
	時間を厳守している	生徒	91.2	87.6	96.2	92.6	95.7	
	子どもが遅刻せず登校している	保護者	92.2	90.2	96	93.9	89.8	
進路意識	進路目標を明確にする指導をしている	教員	/	88.9	100	100	80	2学年
	進路を意識した生活をした	生徒		91	85.6	83.8	94.7	
	子どもはインターンシップなど進路学習に取り組んだ	保護者		84.9	91.6	84.8	85.7	
進路実現	適性を考えた指導をした	教員	83.3	90.9	87.5	100	100	3学年
	進路決定に意欲的に取り組む	生徒	84.4	86.2	90.2	90.2	88.6	
	子どもの進路に満足している	保護者	94.4	94.6	95.2	93.4	92.4	
行事への取組	行事に意欲的に取り組むよう指導した	教員	93.3	90.9	88.9	100	90	3学年
	行事に積極的に取り組んだ	生徒	83.2	94	91.7	92.4	96.8	
	行事は成功しているか	保護者	95.4	91.7	94.4	95.1	96.6	
全体平均値			81.2	83.8	85.0	85.5	87.3	
教員平均値			83.8	87.4	88.8	90.6	90.1	
生徒平均値			76.6	76.2	79.1	78.5	83.1	
保護者平均値			85.1	88.5	87.3	88.1	88.6	

八 制服改定

(一) 改定の背景

本校は歴史と伝統のある農業の専門高校として平成二五年に創立二二〇年を迎えた。この記念として平成一二年の導入以来一度の見直しもなかった制服の改定案が持ち上がった。

また、平成二一年三月に教育委員会が発表した「県立高等学校再編整備計画」に基づいて県立高校の再編が開始され、平成二四年三月には「第二次実施計画」の決定により、本校が県内で唯一の農業単独の専門高校として存続することとなった。

このように、創立二二〇年という歴史と伝統を持ち、県内唯一の農業単独の専門高校として益々発展することを願って一四年ぶりに制服の全面改定を行うことになった。

(二) 改定の経緯

平成二四年一月に「制服委員会」を立ち上げ、制服の改定作業に着手した。委員会は平成二六年度入学生から導入する制服の改定案作成を目的とし、教頭を委員長に各学年会代表、家庭科代表、生徒指導部主任、生徒会担当、生徒指導部風紀担当を構成メンバーとした。組織するにあたって、生徒、保護者及び教職員への周知が徹底することと意見の集約がスムーズに行われることに配慮した。

改定手順としては改定の方針を決め、それに沿って業者を決める。その後、業者と打合せを繰り返しながら新制服を完成させる方式を採用することとした。

改定方針を決めるために、一月に近年の制服事情を調査する目的で制服展示会を視察した。また、一二月には新制服への要望と現在使

用している制服の改善点を把握する目的で生徒、保護者、教員を対象にアンケート調査を実施した。そして、視察結果とアンケート結果に基づいて委員会で五回にわたる協議により改定方針をまとめ、平成二五年一月と三月の職員会議で審議の上承認を得た。

納入業者の決定に際しては、制服委員、事務長、保護者代表で構成される「業者選定委員会」を組織し、平成二五年四月に参入を希望する業者に対して改定方針を説明し、五月末日までに企画書の提出、一週間後に試作品を用いてのプレゼンテーションによるコンペティションを開催した。

業者決定後は、試作品を見ながら、業者を交えて一〇月中旬までに六回にわたり委員会を開催し、デザイン性、機能性、指導のしやすさなどを中心に細部の詰めを行った。その間、七月、八月、一〇月の職員会議で経過報告、審議を行い、八月の中学生体験入学、一〇月のオープンスクールでは中学生及びその保護者に対して改定途中の制服を披露した。

一月二日の一二〇周年記念行事の一環として生徒によるファッションショーを行い正式発表の場とした。さらに、広く周知するために一月八日には新聞発表を行った。

(三) 新制服の特徴

新制服は伝統ある農業の専門高校をイメージさせ、生徒が着たい、保護者が着せたい、また、教職員が指導しやすい本校オリジナルの制服になっている。

改定の特徴はネクタイ・リボンで胸元を強調している点と、衣替えを導入することによって冬服と夏服の着用時期をはっきりさせたことである。

ジャケットは肩幅と着丈を黄金比率とし、二つボタンのシングルとした。福井県内初となる深みのある「ダークブラウン」を取り入れ、胸元のワッペンに校章を入れることでオリジナリティを高めてある。また、素材には家庭で洗濯ができるものを用いた。

スカートはチェック柄で、優しさがあり、可愛らしい印象を与えるよう、生徒に人気のあるピンクを取り入れている。

男子のスラックスはチェック柄でその中にエンジのラインを取り入れている。

シャツは動きやすく、家庭での手入れが簡単な新素材のニットシャツを採用した。シャツの色は白としたが、従来のシャツに比べ透け防止にも優れている。胸元には県の花「水仙」と本校のイニシャル「FN」をモチーフにしたオリジナルの刺繍が施してある。なお、ジャケットのボタン、スカートの裾にもオリジナルデザインを施してある。

女子のリボンはパールトーンの淡いピンクで、福井市の花「あじさい」をイメージしたデザインである。男子のネクタイには凛々しい青色を入れ、男女の統一感、爽やかなデザインにしてある。ネクタイ、リボンはワンタッチの金具でつけられるタイプにしてある。

夏シャツは、白のニットシャツで、形は半袖オーバー型とし、第一ボタンをつけない形である。

オプションとして「セーター」(男女ともにグレー、胸には本校オリジナルデザイン刺繍)と夏用ズボン・スカート(冬と同じデザイン)を用意した。

(四) おわりに

本稿を書いている時点ではどうにか制服が決定しただけである。これから委員会での協議内容を着用方法に移し、二六年度入学生からきれいな着こなしができるように準備を進めたいと考えている。

今後、新しい制服が広く県民に受け入れられるとともに、末永くこの制服を本校の象徴として誇りを持って着用してくれることを期待している。



第二節 農業教育

一 地域との交流

(一) ふれあいマート

平成四年の学科再編により現在の生物生産科、環境工学科、生活科学科、生産流通科の四学科が誕生し、第二教棟・第三教棟や農業実習棟、農友会館などの施設が新規に建設され、リフレッシュ事業で改修された。ほぼ同時期に、ふれあい農園の開園とふれあいマートが開設した。ふれあいマートは主に生産流通科の生徒が学校の商品を地域の方に「販売実践」する場として位置づけられている。その実践のために農業科目の「農業経済」だけでなく「簿記」「マーケティング」「商品と流通」など商業科目を多く教育課程に取り入れた。そして、それらの科目の習得により、農産物流通をはじめ社会のサービス化に幅広く対応できる産業人の育成を目指すことになった。在学中には実践のスキルを高めるために販売士や簿記検定・各種情報検定の資格が取得できるような指導を行っている。ふれあい



マートは毎週火曜日の午後二時から三時までを開店時間としている。三年生が生産流通科における学習の集大成として販売に当たっている。またその準備として、午前中（三・四限目）に二年生が生産物や加工品の計量・袋詰め・バーコード貼付などの調整を行っている。一、二年次における「農業科学基礎（農業と環境）」や「草花」「野菜」などの基礎科目におけ



る知識技術を修得した上での実践授業であり、このマート運営に携わりたいので入学を決意したという生徒も多くなってきた。生産流通科の学習においてふれあいマートの重要性が一層高まっている。

しかし、開設当初と異なり、ふれあいマートを巡る周囲の環境は厳しくなってきた。その第一の原因は、JAの農産物直売所や民間のスーパーマーケットが近隣に多く開店をしたことである。来店者数は店舗の開店以来減少傾向が続いてきている。来店者が少なくなるとマートの活気がなくなると生徒の学習意欲を削ぐことにもなりかねない。他店舗との差別化を図って運営を行う必要性を感じる。新鮮さや価格はもちろん、棚に並べる商品の種類や接客などの改善を行って顧客満足度を上げていかなければならない。第二に国内に食の安全性に対する危機感が高まっていることである。食品偽装や鳥インフルエンザへの脅威があり、その対策としてトレーサビリティや食品表示の義務化など生産者の顔が見える食品が求められている。



平成24年度ふれあいマート部門別販売目

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2月
野菜	タカノツメ インドネシア唐辛子 つまみ菜 カブ	つまみ菜 カブ ダイコン キュウリ スズキーニ ナス トウモロコシ	つまみ菜 キュウリ ナス 新保ナス ピーマン ミニトマト オクラ 伏見甘長 スズキーニ プリンスメロン トマト シンカンウリ シシトウ オクラ シシトウ シマウリ インドネシアの豆	プリンスメロン ガワズ瓜 クワ瓜 ミニトマト 新保ナス オクラ つまみ菜 トマト シンカンウリ シシトウ シシトウ オクラ シシトウ ナス 伏見甘長 インドネシアの豆 ミディトマト ピーマン	オクラ 新保ナス つまみ菜 ピーマン ナス シシトウ オクラ インドネシアの豆 甘党美人 伏見甘長	つまみ菜 ナス 伏見甘長 ピーマン シシトウ オクラ インドネシアの豆 インドネシアの豆 インドネシアの豆 新保ナス サニーレタス ショウガ 冷凍トウモロコシ 甘党美人 タマネギ苗 ダイコン 種子鳥紫	ハクサイ・ダイコン キャベツ・ゴボウ ニンジン ブロッコリー キュウリ 生しいたけ じゃがいも ネギ・タマネギ さしもの、しょうが つまみ菜・ナス ピーマン・ピー太郎 シシトウ・伏見甘長 ホウレン草 小松菜・山芋 サラダホウレン草 スティックブロッコリー カブ	ハクサイ ダイコン キャベツ ブロッコリー カブ つまみ菜 しょうが 唐辛子	キャベツ ブロッコリー サニーレタス
草花	ペチュニア	コリウス カンパニュラ ジニア 日々草 インパチェンス	ヒマワリ 日々草 朝顔 トルコキキョウ	花束	切り花 コモチラン ペゴニア ハナキリン オリヅラン テールヤッシー	切り花 コモチラン ハナキリン ペゴニア	ペチュニア パンジー 石竹・プムラ カラコエ ガーベラ・水仙 ポットマム ミニバラ モミジセランユーム ハツユキカズラ ゴールドクレスト ポインセチア ワリシチア ラベンダー オリヅラン ハナキリン サボテン 寄せ植え パンジー・ビオラ 葉ボタン・切り花 ジャコバサボテン ハオルチア サボテン鉢	花束 パンジー ビオラ シクラメン	サイネリア プリムラ
畜産	卵(赤) 鶏糞	卵(赤) 鶏糞	卵(赤) 鶏糞	卵(赤) 鶏糞	卵(赤) 鶏糞	卵(赤) 鶏糞	卵(白・赤) 豚肉ハム	卵(白)	卵(赤)
作物	大豆	大豆		じゃがいも	じゃがいも コシヒカリ イクヒカリ あきさかり アキタワラ お米ブチセット	コシヒカリ イクヒカリ あきさかり アキタワラ お米ブチセット 枝豆 朝紫	安納芋 ハーブスウィート シモン ジャンボ落花生 大豆・朝紫 コシヒカリ イクヒカリ あきさかり あきだわら お米ブチセット 黒小豆・枝掛浸し豆	コシヒカリ イクヒカリ アキタワラ あきさかり お米ブチセット 朝紫 枝掛浸し豆 黒小豆 大豆 ジャンボ落花生	大豆 朝紫 ハトムギ
果樹		ウメ		桃 巨峰	巨峰 藤稔 姫リンゴ リンゴ	姫リンゴ 合わせ柿 リンゴ	吊し柿 合わせ柿 リンゴ(青・赤) 甘柿		
環境工学		生シイタケ	生シイタケ					生シイタケ ゆず	生シイタケ 越前カンタケ
第二農場	ニラ	ニラ 赤タマネギ 唐辛子 タマネギ	ホウレン草 タマネギ 赤タマネギ キュウリ 唐辛子・ナス	唐辛子 タマネギ 赤タマネギ キュウリ トマト・長ナス	唐辛子 タマネギ 赤タマネギ 長ナス	タマネギ 長ナス ワルムラサキ	カブ・レタス ブロッコリー ほうれん草 長ナス・ネギ タマネギ苗・甘柿	ネギ	ホウレン草
生活科学	うららのドレッシング ベジかけ	うららのドレッシング	うららのドレッシング ウメシロップ	うららのドレッシング ウメシロップ	ウメシロップ うららのドレッシング ベジかけ	ベジかけ うららのドレッシング	ベジかけ うららのドレッシング リンゴジャム 柿ジャム	ベジかけ うららのドレッシング リンゴジャム	ベジかけ リンゴジャム
生産流通				キウイジャム	キウイジャム 奈良漬 シカクマメ		ホウレン草クッキー リンゴジャム ニンジンクッキー シガクマメ 節約石鹸 リンゴジャム 奈良漬	奈良漬 リンゴジャム ヘチマたわし ヘチマ水 節約石鹸 福農味噌	福農味噌
五十嵐農園	トマト キュウリ	トマト インゲン キュウリ	トマト キュウリ ゴーヤ	トマト ゴーヤ オクラ キュウリ	キュウリ オクラ	キュウリ トマト	トマト	トマト	
山田農園	ホウレン草 小松菜	ホウレン草 小松菜 水菜	水菜 小松菜	水菜 小松菜	水菜 小松菜	水菜 小松菜	水菜 小松菜	小松菜	ナス 赤スキ ジャガイモ ネギ
市場	ダイコン ニンジン じゃがいも タマネギ・ナス ピーマン ブロッコリー	ダイコン ニンジン じゃがいも タマネギ・ナス ブロッコリー カレーセット	ダイコン ニンジン ジャガイモ ブロッコリー バラエティセット キャベツ	ダイコン ニンジン じゃがいも ブロッコリー 生しいたけ カレーセット キャベツ	ダイコン ニンジン じゃがいも ブロッコリー 生しいたけ キャベツ	ダイコン ニンジン じゃがいも ブロッコリー 生しいたけ キャベツ	ニンジン じゃがいも ブロッコリー キャベツ カレーセット タマネギ 生しいたけ	キャベツ ニンジン タマネギ じゃがいも カレーセット	
その他	山芋 キャベツ カンパニュラ 千鳥草	ダイコン	木田シソ ミニトマト すもも		栗	パプリカ	次郎柿	甘柿	

ふれあいマートの商品はほとんどが生徒の実習生産品なので安心安全なのは当たり前だが、栽培の過程や具体的な調理加工の方法をPRすることで安心して購入していただけるように努力することが必要である。

生徒の学習の場としてのふれあいマートを今後ますます充実させるために、生徒が自主的にマートを運営できるようにすること、校外での活動を通して福農ふれあいマートの存在を知ってもらうこと、近隣店にはない品揃えや学校における学習成果を実物や展示などで理解していただくこと、地産地消や伝統野菜など地域の方との連携を深めながら健康長寿ふくいを広めていくことが大切であると考ええる。

(二) ふれあい農園

本校では平成九年度から畑のない方々に、土とふれあい農業の楽しさを体験していただくために「ふれあい農園」という名称で学校農場を開放している。また、学校を見ていただくことにより、本校の生徒との交流や農林高校を知っていただくことも目的の一つとして行っている。今、まさに社会から求められている「地域に開かれた学校」を目指しているものである。

開園の年から参加しているベテランの方や土に触れるのも初めてという初心者の方まで、夫婦、親子、孫を連れてとか、お友達となど、それぞれのスタイルで農園ライフを楽しんでいただいている。その中から入園者の皆さんの感想を掲載させていただく。

土といえは植木鉢の土しか縁のなかったものです。ふれあい農園に入り初めてスコップと鍬で畑を耕して、農作業の大変さ、自然の恵み、命をいただいていることを感じました。「街の人はかわいそ

うや、農業がいっぱいいている野菜を食べている」と農家の人が言っていたのを聞いていて、無農薬で安心できる安全なものを家族・孫たちに食べさせたいと思いました。虫に食われる野菜はおいしいんだなと思いつつ、虫は長靴で踏みつけてしまします。

畑のまわりの野鳥や蛙、雑草のかわいい花、農園に来るといつもほっとします。時間のたつのも忘れてしまいます。作物の成長を見る楽しさ、自分で作ったものを食べるおいしさ、近所の方々に喜んでもらえるうれしさなど、野菜作りは今では私の生きがいです。

入園六年女性

ふれあい農園に入園しはや四年が経過しました。現役中には「ふれあい農園」の存在は、通勤途中で見かけて知っていましたが、興味はありませんでした。退職後、野菜作りをと思い入園させていただきました。

入園前は、家庭菜園の野菜には虫がついたりして、あまりありませんでしたが、無農薬野菜、有機肥料で栽培した野菜は貴重で、自家消費を減らして知人にお分けしております。

春に土地の耕作から始まり、種まき、手入れ、収穫等一年掛りで



の作業ですが、自然の大切さがわかってきました。今後もふれあい農園に積極的に参加したいと考えております。

入園四年男性

定年退職後、当時の新聞でふれあい農園の募集記事を見つけ、応募して入園させていただいて以来一二年間、今まで経験したことが無かった畑の作業を体験し、貴重なことを学ばせていただきました。何よりの収穫は、不格好な野菜でも自分の手で土から耕し、苗又は種子から育てた安全、安心のものを食する喜びです。

ふれあい農園でお会いする方に教えても貰いながら、楽しく耕作出来ることに感謝しています。

入園一二年男性

安全な野菜を食べたい目的で「ふれあい農園」に入園した私ですが、生徒さんの笑顔と大きな声での「こんにちは」の挨拶で迎えられる、マナーの大切さと野菜作りの難しさを知り収穫のうれしき、楽しさがあふれる毎日です。同じ目的を持った人が集まるので仲間ができ情報交換等で交流が生まれ、大きな喜びが私を迎えてくれ、得るものが多いです。そんな「ふれあい農園」に感謝しています。

入園三年男性



無農薬の新鮮でおいしい野菜を作ってみたい。そう思っていたとき、福農「ふれあい農園」を知りました。入園して八年になります。

先生より野菜作りを教わるのほもちろん、農作業の用具などを使わせてもらえるなど、恵まれた環境のもと、土と親しみ自然とふれあっています。

家族そろって土を起こし、種を蒔き、苗を植える。そして野菜の成長を見守りながら手をかけて育て、収穫を楽しむ。野菜作りは子育てのようなものだと思います。また、入園されている方々と交流を深め、収穫物の交換などをしていたりして、菜園ライフを楽しみ、心の安らぎを得ています。

家族そろって土を起こし、種を蒔き、苗を植える。そして野菜の成長を見守りながら手をかけて育て、収穫を楽しむ。野菜作りは子育てのようなものだと思います。また、入園されている方々と交流を深め、収穫物の交換などをしていたりして、菜園ライフを楽しみ、心の安らぎを得ています。



友達と二〇〇九年からふれあい農園での野菜づくりに参加しています。生まれは農家で、米作りの農繁期には手伝いをしましたが、野菜作りを手伝った記憶はありません。仕事も機械関係で、大げさですが生まれて初めての経験でした。本を買い少し勉強しましたが、皆さんに教えられたり、見よう見まねで何とか格好をつけ、いろいろ苗を買って植えました。サツマイモの収穫に喜び、里芋は収穫を遅らせたため、ダンゴムシに半分ほど食べられてしまいガッカリしました。あれから、今年で五年目ですが、進歩してないと思っ

入園八年男性

ています。でも、がんばろう、無農薬で、おいしい野菜作りを今年

も目指そう。ミニトマト、ピーマン、モロヘイヤ、ブロッコリー、少しの手間で丈夫に育ってくれて、ありがとう。ふれあい農園の先生方・先輩方が丹精こめた畑作りに、参加できることを感謝します。

入園五年男性

福井の伝統野菜である、新保ナスを作ってみようと思ひ、「福農ふれあい農園」に入園しました。知人からもらった苗二本をさっそく定植し、我流で肥料と追肥をしながら、つやつやの丸ナスが、七、八個成りました。

煮物や漬け物にして食べたらいいかだったので、次の年は秋なす用として種を蒔きました。ところが、二から三本しか生えず「難しい」それを定植できる大きさに育てるのも一苦労、実った数も少なく形も不揃いで、いいものを作ろうと思うのは無理かなあ；農家の苦労がわかった様な気がします。これからも、失敗を繰り返しながら、野菜作りをしていくつもりですので、ご指導をよりしくお願ひいたします。最後になりましたが、創立一二〇周年おめでとうございます。

入園三年女性

(三) ふれあいハーブ園

ふれあいハーブ園は平成一四年、生産流通科が主体となって、小学生や園児らとの交流などのために造られた庭園である。当時、週末になると近隣の小学生や保護者などが、福井農林高校生産流通部の生徒たちと、ハーブを使った体験イベントなどをしていたという記憶がある。造成は、環境工学科の生徒が手掛けたと聞いている。

その後、ハーブの草が古くなり、雑草が生え、枯れるハーブも多く

なってきたため、授業の中で挿し木や除草を行ってきたが、平成一八年度から本格的に改良した。

まず、ローズマリーなどの残っていた樹勢のしっかりしたハーブは残した。

次に、空いた土地を耕し、そこに専門の業者から購入したハーブを定植した。そのとき、庭園としてどのようなハーブが植えられていたらきれいか考えて、また再造成ができたとき、生活科学科や家庭科などの調理に役にたつたらいとを考えて、一年草や樹木なども入れたように思う。

その作業は生産流通科の生徒が授業内で行った。また、土を耕した時、赤土のため、耕運機が傷まないかをほかの先生方に指摘されたりしながらやった記憶がある。

ぜひ、また庭園が古くなったら再度定植してほしいと思う。



2 学年インターンシップ実施一覧（平成22年～平成24年）

二 本校におけるインターンシップ

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
生物生産科	五十嵐農園、小西純一、桜井秀一、田谷農園、土田弥市、(有)見谷ナーセリー、福井ハウス(株)、ヨシミ商会、日栄商事(株)、(株)カワグチ、足羽山公園遊園地、福井市園芸センター	五十嵐農園、小西純一、田谷農園、土田弥市、(有)見谷ナーセリー、まやまブルーベリー生産組合、福井ハウス(株)、ヨシミ商会ヨシミワークス、日栄商事(株)、(株)カワグチ、足羽山公園遊園地、福井市園芸センター	五十嵐農園、合同会社光合星、(有)見谷ナーセリー、福井ハウス(株)、日栄商事(株)、まやまブルーベリー生産組合、永平寺やさい村、(株)カワグチ、ドンハウス、福井市園芸センター、足羽山公園遊園地、福井県農業試験場
環境工学科	(株)辻広組、(株)中村正建設、(株)西村組、(株)道端組、(株)しばなか、東洋地工(株)、第一技術開発(株)、福井市緑化木センター(株)、(株)サンワコン、(株)共和庭園、開発調査設計(株)、丸一調査設計(株)、海辺建設(株)、(有)高橋造園、(有)井土造園、足羽川堰堤土地改良区連合、福井県総合グリーンセンター、福井県総合グリーンセンター、福井県福井農林総合事務所	(株)辻広組、(株)西村建設、(株)しばなか、(株)サンワコン、福井市緑化木センター(株)、丸一調査設計(株)、第一技術開発(株)、開発調査設計(株)、(株)共和庭園、(有)高橋造園、足羽川堰堤土地改良区連合、福井県総合グリーンセンター、福井県福井農林総合事務所	第一技術開発(株)、開発調査設計(株)、東洋地工(株)、丸一調査設計(株)、(株)サンワコン、(株)しばなか、(株)辻広組、(株)西村組、(株)福井市緑化木センター、(株)道端組、(株)共和庭園、(有)高橋造園、足羽川堰堤土地改良区連合、福井県総合グリーンセンター、福井県福井農林総合事務所
生活科学科	東藤島保育園、啓蒙保育園、カントリーママ(四ツ井店)、ノリパパ(開発店)、(有)ファームビレッジさんさん、コロンバ、新田塚ハウス、お菓子のナカムラ、番匠	東藤島保育園、啓蒙保育園、カントリーママ(四ツ井店)、ノリパパ(開発店)、(有)ファームビレッジさんさん、(株)大津屋、森八大名園(株)、お菓子のナカムラ、(株)ネオテックス、社会福祉法人藤島会、藤島園介護老人福祉施設、新田塚ハウス介護老人保健施設、九頭竜長生苑	東藤島保育所、上北野保育園、(株)大津屋米松店・田原町店、森八大名園(株)、ファームビレッジさんさん、カントリーママ(四ツ井店)、新田塚ハウス介護老人保健施設、お菓子のナカムラ、足羽福祉会愛全園、(株)北陸ワコール
生産流通科	ユニーアビタ大和田店、エンゼル調剤薬局本店、手取フィッシュランド福井店、みったジョイフルストア開発店、ヤスブ(株)四ツ居店、北陸緑化(株)、フローリストさくら本店、花工房本店、クスリのアオキ松岡店、クスリのアオキ日之出店、ゲンキー福井大和田店、ゲンキー丸岡店、ハニー東部店、ホームセンターヤマキシ開発店、Aコープ開発店、Aコープみゆき店、ハニー松岡店、富士屋(株)	ユニーアビタ大和田店、エンゼル調剤薬局本店、手取フィッシュランド福井店、みった、ジョイフルストア開発店、ヤスブ(株)四ツ居店、北陸緑化(株)、フローリストさくら本店、花工房本店、(株)フクイフラワーガーデン、アルビス高木店	ユニーアビタ大和田店、エンゼル調剤薬局本店、手取フィッシュランド福井店、みったジョイフルストア開発店、北陸緑化(株)、フローリストさくら本店、花工房本店、(株)フクイフラワーガーデン、アルビス高木店、クスリのアオキ松岡店・日の出店、ゲンキー福井大和田店、ハニー東部店、ホームセンターヤマキシ開発店、Aコープ開発店、ゲンキー松岡店、ハニー松岡店

三 中学生体験入学

(一) 趣旨

本校の教育施設を中学校生徒に開放し、施設設備の見学および実験実習を体験することにより、本校の教育に対する理解を深め、生徒の進路に対する目的意識の高揚を図る。

(二) 目的

- 1 中学生が福井農林高等学校の教育内容を理解し、実験実習などの学習活動を体験することにより、進路決定の一助とする。
- 2 本校の特色ある教育内容について、中学校の生徒、保護者ならびに先生方への理解を図る。

(三) 参加対象

- 1 中学校第三学年に在学し本校の体験入学を希望する生徒
- 2 参加生徒の保護者
- 3 中学校の進学担当者及び引率者

学科別体験実習内容

工学科		環境		生産科		生物		学科名	
5	4	3	2	1	番号	体験実習		受入数	
石組み実習	測量実習	コンクリート実習	バイオテクノロジー実習	作物実習					
15	15	20	20	30					
流通科		生産		生活		科学科		学科名	
9	8	7	6	番号	体験実習		受入数		
園芸デザイン実習	ふれあいマーケット実習	被服実習	調理実習						
20	30	20	30						

(1) 午前の部

<参加生徒>

- 8：40～9：00 受付
 9：00～9：15 更衣、集合
 9：15～9：40 開校式、学校説明他
 9：50～10：40 体験実習1
 10：55～11：45 体験実習2、アンケート
 11：45～ 部門ごとに閉校、解散、更衣

※ 解散後に部活動の見学が可能です

<引率教員・保護者>

- 8：40～9：00 受付
 9：15～9：40 開校式、学校説明他
 9：50～10：20 進学相談会
 10：55～11：45 体験実習2見学、アンケート

(2) 午後の部

<参加生徒>

※ 受付前に部活動の見学が可能です

- 13：10～13：30 受付
 13：30～13：45 更衣、集合
 13：45～14：10 開校式、学校説明他
 14：20～15：10 体験実習1
 15：25～16：15 体験実習2、アンケート
 16：15～ 部門ごとに閉校、解散、更衣

<引率教員・保護者>

- 13：10～13：30 受付
 13：45～14：10 開校式、学校説明他
 14：20～14：50 進学相談会
 15：25～16：15 体験実習2見学、アンケート

参加者の感想

とても楽しく体験することができました。この高校に入りたくなりました。ありがとうございました。

とても楽しかったし、作物実習に行ってもっとお米について知りた
いと思いました。ぜひ農林高校に行きたいです。
(中学生)

農業を中心に、土木や福祉、販売などいろいろな教育をしているこ
とを知りました。志望校の一つとして子供と話し合っていきたいと思
います。
(保護者)

礼儀に対する指導がこの学校ではしっかりと行われているという印
象を持ちました。

余談ですが。野球部の生徒は、その場に立ち止まり挨拶をしてくれ
ました。そういった細かい部分での指導が行き届いており、是非とも
我が校の生徒にも伝えたいと思いました。
(引率教員)

女	男	参加人数	平成一六	平成一七	平成一八	平成一九	平成二〇	平成二一	平成二二	平成二三	平成二四
二二二	一三〇	三四二	三三二	三四二	三四二	三四二	三四二	三四二	三四二	三四二	三四二
一三七	一三六	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
一七六	一三六	三二二	三二二	三二二	三二二	三二二	三二二	三二二	三二二	三二二	三二二
二〇九	一三六	三四五	三四五	三四五	三四五	三四五	三四五	三四五	三四五	三四五	三四五
一三四	一三〇	三五四	三五四	三五四	三五四	三五四	三五四	三五四	三五四	三五四	三五四
二二三	一三九	三五二	三五二	三五二	三五二	三五二	三五二	三五二	三五二	三五二	三五二
二〇六	一六五	三七一	三七一	三七一	三七一	三七一	三七一	三七一	三七一	三七一	三七一
二二二	一三四	三四六	三四六	三四六	三四六	三四六	三四六	三四六	三四六	三四六	三四六
二二二	一五八	三七〇	三七〇	三七〇	三七〇	三七〇	三七〇	三七〇	三七〇	三七〇	三七〇



四 農業クラブ

農業クラブのあゆみ

平成一六年度

年次大会（七月三〇日 若狭東高校）

意見発表 「文化・生活」 最優秀賞 天谷 真衣

平板測量競技 最優秀賞 Aチーム 磯部 誠・河合 利巳

前田 武士・武本 大

農業情報処理競技 最優秀賞 小鍛治 典子

北信越ブロック大会（八月一八日～一九日 長野県）

意見発表 「文化・生活」 優秀賞 天谷 真衣

プロジェクト発表 「環境」 優秀賞 荒井 貴史ほか

全国大会（一〇月二〇日～二二日 神奈川県）

農業鑑定競技

園芸コース 優秀賞 白崎 健悟

農業土木コース 優秀賞 前田 晃宏

平成一七年度

年次大会（七月二八日 福井農林高校）

意見発表 「食料」 最優秀賞 レジス シミズ

農業鑑定競技

農業コース 最優秀賞 上嶋 大地

園芸コース 最優秀賞 五十嵐 悠一

農業土木コース 最優秀賞 瀧波 勇人

林業コース 最優秀賞 西尾 裕貴

生活科学コース 最優秀賞 須見 紀美江

農業情報処理競技 最優秀賞 稲葉 勝士

北信越ブロック大会（八月一八日～一九日 新潟県）

意見発表 「食料」 優秀賞 レジス シミズ

プロジェクト発表 「食料」 優秀賞 上嶋 大地ほか

全国大会（一〇月二五日～二七日 岐阜県）

農業鑑定競技

農業土木コース 優秀賞 瀧波 勇人

農業情報処理競技 優秀賞 稲葉 勝士

平成一八年度

年次大会（七月二八日 福井農林高校）

農業鑑定競技

林業コース 最優秀賞 高波 和貴

生活科学コース 最優秀賞 石掛 陽光

農業情報処理競技 最優秀賞 稲葉 勝士

北信越ブロック大会（八月一七日～一八日 富山県）

プロジェクト発表 「文化・生活」 優秀賞 黒川 結由ほか

全国大会（一〇月二五日～二七日 愛媛県）

農業鑑定競技

農業コース 優秀賞 土田 礼子

農業情報処理競技 優秀賞 稲葉 勝士

平成一九年度

年次大会（七月二七日 坂井農業高校）

農業鑑定競技

農業コース 最優秀賞 荻原 亜梨紗

農業土木コース 最優秀賞 萩原 龍太郎

林業コース 最優秀賞 茶谷 敏希

農業情報処理競技 最優秀賞 堂山 友里

平板測量競技 最優秀賞 武澤 一富士・荒井 雄介

河端 良介・宮下 馨

北信越ブロック大会（八月二一日～二二日 福井県）

プロジェクト発表 「環境」最優秀賞 八原 淳ほか

全国大会（一〇月二一日～二三日 広島県）

農業鑑定競技

農業土木コース 優秀賞 萩原 龍太郎

平板測量競技 優秀賞 武澤 一富士・荒井 雄介

河端 良介・宮下 馨

フラワーアレンジメント 優秀賞 堅田 友希

松澤 愛美

平成二〇年度

年次大会（七月二九日 坂井農業高校）

意見発表 「文化・生活」最優秀賞 荒川 有希

農業鑑定競技

園芸コース 最優秀賞 藤本 知央

農業土木コース 最優秀賞 萩原 龍太郎

林業コース 最優秀賞 岩谷 康次郎

平板測量競技 最優秀賞 Aチーム 名子 優太・松井 美樹

宮下 馨・渡辺 鷹士

農業情報処理競技 最優秀賞 吉田 耕平

北信越ブロック大会（八月一九日～二〇日 石川県）

意見発表 「文化・生活」 優秀賞 荒川 有希

プロジェクト発表 「食料」優秀賞 清水 雄大ほか

全国大会（一〇月二一日～二三日 佐賀県）

農業鑑定競技

園芸コース 優秀賞 市波 彩沙姫

農業土木コース 優秀賞 萩原 龍太郎

平板測量競技 優秀賞 Aチーム 名子 優太・松井 美樹

宮下 馨・渡辺 鷹士

農業情報処理競技 優秀賞 吉田 耕平

平成二一年度

年次大会（六月一六日 福井農林高校）

意見発表

「食料・生産」 最優秀賞 藤原 志野

「環境」 最優秀賞 津野 佑規

年次大会（七月二七日 福井農林高校）

農業鑑定競技

農業コース 最優秀賞 飯田 小百合

園芸コース 最優秀賞 丸山 由美子

生活科学コース 最優秀賞 藤井 麻緒

農業土木コース 最優秀賞 長 大介

林業コース 最優秀賞 中村 亘兵

農業情報処理競技 最優秀賞 佐竹 真未子

北信越ブロック大会（八月四日～五日 長野県）

意見発表

「食料・生産」 優秀賞 藤原 志野

「文化・生活」 優秀賞 津野 佑規

プロジェクト発表 「環境」 優秀賞 明石 泰雄ほか

全国大会（一〇月二〇日～二二日 神奈川県）

農業鑑定競技

農業土木コース 優秀賞 長 大介

平成二二年度

年次大会（六月一六日 福井農林高校）

意見発表 「環境」 最優秀賞 酒井 和宏

年次大会（七月二六日 福井農林高校）

農業鑑定競技

園芸コース 最優秀賞 寺西 春樺

生活科学コース 最優秀賞 熊谷 柚希

林業コース 最優秀賞 寺下 耕生

農業情報処理競技 最優秀賞 橋本 あかり

北信越ブロック大会（八月一八日～一九日 長野県）

意見発表 「環境」 優秀賞 酒井 和宏

プロジェクト発表 「環境」 優秀賞 磯田 郁也ほか

全国大会（一〇月五日～七日 北海道）

農業鑑定競技

農業土木コース 優秀賞 高原 誠

農業情報処理競技 優秀賞 丹羽 陽香

橋本 あかり

平成二三年度

年次大会（七月二八日 坂井農業高校）

意見発表 「食料・生産」 最優秀賞 山中 愛海子

意見発表 「環境」 最優秀賞 西谷 光史

農業鑑定競技

園芸コース 最優秀賞 仲井 駿

生活科学コース 最優秀賞 毛利 なつみ

林業コース 最優秀賞 清水 隆大

北信越ブロック大会（八月一八日～一九日 長野県）

意見発表 「食料・生産」 優秀賞 山中 愛海子

意見発表 「環境」 優秀賞 西谷 光史

プロジェクト発表 「食料・生産」 優秀賞 稲葉 佳明ほか

全国大会（一〇月五日～七日 長崎県）

農業鑑定競技

園芸コース 優秀賞 仲井 駿

生活科学コース 優秀賞 毛利 なつみ

農業土木コース 優秀賞 西谷 光史

林業コース 優秀賞 清水 隆大

平成二四年度

年次大会（七月三十一日 坂井農業高校）

意見発表 「環境」 最優秀賞 飯塚 勇樹

農業鑑定競技

農業コース 最優秀賞 横山 佳菜子

生活科学コース 最優秀賞 秋山 陽香

農業土木コース 最優秀賞 山本 尚史

林業コース 最優秀賞 本田 遼

北信越ブロック大会（八月二二日～二三日 石川県）

意見発表 「環境」 優秀賞 飯塚 勇樹

プロジェクト発表 「文化・生活」 優秀賞 稲葉 千尋ほか

全国大会（一〇月二三日～二五日 長野県）

農業鑑定競技

農業コース 優秀賞 横山 佳菜子

園芸コース 優秀賞 河合 真之介

農業土木コース 優秀賞 山本 尚史

林業コース 優秀賞 本田 遼

日本学校農業クラブ全国大会 最優秀賞受賞者

農業鑑定競技

林業コース 昭和四八年度（福井・石川・富山大会）

桜谷 俊之（坂元）（第二一回）

農業土木コース 平成四年度（和歌山大会）

大木 博昭（第四〇回）

園芸コース 平成一一年度（富山大会）

水島 智史（第四七回）



第三節 国際交流

一 インドネシアとの相互交流

インドネシアとの交流は、昭和五〇年から始まっており、本校の教育の重点項目にも挙げられ、インドネシア・タンジュンサリ農業高校との相互交流を続けている。一〇年間の交流活動の経過は次のとおりである。

平成一六年 九月 第四回インドネシア高校生（タンジュンサリ農業高校）短期留学受入れ（男子二名）

平成一七年 九月 第五回インドネシア高校生（タンジュンサリ農業高校）短期留学受入れ（男子一名、女子一名）

平成一七年一〇月 インドネシア大使館農水部長が来校

平成一八年 九月 第六回インドネシア高校生（タンジュンサリ農業高校）短期留学受入れ（男子二名）

平成一九年 一月 第七回インドネシア共和国訪問（生徒一〇名

引率二名）

タンジュンサリ農業高校との交流 友好協定書の更新

平成二〇年 五月 第八回インドネシア高校生（タンジュンサリ農業高校）短期留学受入れ（男子一名、女子一名）

平成二二年 九月 第九回インドネシア高校生（タンジュンサリ農業高校）短期留学受入れ（男子一名、女子一名）

インドネシア農業省視察

平成二二年一二月 第八回インドネシア共和国訪問（生徒二二名

引率三名）

タンジュンサリ農業高校との交流

平成二二年 九月 第一〇回インドネシア高校生（タンジュンサリ

農業高校）短期留学受入れ（男子一名、女子一名）

平成二三年一二月 第九回インドネシア共和国訪問（生徒一三名

引率三名）

タンジュンサリ農業高校との交流 友好協定書の更新

平成二四年一〇月 第一一回インドネシア高校生（タンジュンサリ

農業高校）短期留学受入れ（男子一名、女子一名）

(一) インドネシア・タンジュンサリ農業高校との相互交流

平成一五年より、タンジュンサリ農業高校生の短期留学受入れがスタートした。平成二一年までは毎年受入れていたが、平成二二年の派遣事業時にカルデイ校長と浅野校長との話し合いの中で、隔年での相互交流を行うことになった。この協議により、本校からの派遣事業も隔年で実施することが可能となった。それには、農友会の支援もあった。

タンジュンサリ農業高校短期留学生受け入れ

これまで、インドネシア・タンジュンサリ農業高校生が来校したのは、一一回である。そのうち、短期留学という形で来校したのは、九回となった。三か月の受け入れを基本とし、本校の二年生のクラスに在籍し、実習を中心とした授業を受け、放課後は日本語学習を国際交流会館で受けたり、部活動に参加したりした。宿泊場所は、平日は本校の寮で生活し週末は生徒宅や教員宅でのホームステイとした。

この一〇年間の受け入れ概要を次に示す。

第四回受人事業

期間：平成一六年九月一日～一月三日
引率者：Hadie Guna, Kardi Kusnadi
留学生：Adih Ahmad Soleh, Bahar Nurdini

第五回受人事業

期間：平成一七年九月一日～一月二六日
引率者：Hadie Guna, Yusuf
留学生：Arludin, Agustina Gea

第六回受人事業

期間：平成一八年九月一日～一月二四日
引率者：Kardi Kusnadi, Rahmat Mujadi
留学生：Yosep Suratoman, Iman Mardian

第七回受人事業

期間：平成一九年九月三日～一月二二日
引率者：Hadie Guna, Yana Koryana, Komarudin, Engkos Koswara,
Supendi
留学生：Agus Muharam, Fitri Handayani

第八回受人事業

期間：平成二〇年五月一三日～七月一六日
引率者：Hadie Guna, Tuti Sunaryati, Lina Awalina
留学生：Ira Sobarna, Wentu Febrianti

第九回受人事業

期間：平成二二年九月七日～二月二日
引率者：Muchransyah Achmad, Momon Rusmono, Naniek Sury-
aningsih, Muh.Ardy Hamire, Soesilo Wibowo, Budi Han-
doyo, Yoyo Soedaryono, Usin Durahman, Siti Munifah
留学生：Yadi Supriadi, Elin Marina

第一〇回受人事業

期間：平成二三年九月二〇日～一月二九日
引率者：Kardi Kusnadi, Waryuman Syas, Tatang Hidayat
留学生：Kusnaedi, Desy Prastika



H16留学生



H17留学生

第一回受人事業

期 間：平成二四年一〇月一〇日～一〇月一七日

引率者：Agus Bachtiar, Suhairi

留学生：Dede Yusuf Saepul Rahman, Yeni Yuliani



H19留学生



H21留学生

インドネシア農業研修生派遣

この事業は、インドネシア共和国の高校生や農業関係者との交流を通して、友情を深め合い、また、農業高校での生活体験や農業体験を通して、歴史的にも文化的にも深い関わりを持つ東南アジアの真の姿を身をもって理解し、将来、広い視野に立って積極的に国際貢献のできる人材の育成を目指すことを目的としている。この一〇年間で三回実施しており、本年度には第一〇回目の派遣事業が予定されている。概要は次の通りである。

第七回派遣団（平成一八年度）

期 間：平成一九年一月七日～一月一三日

引率者：細川、宇野

参加生徒：三物（土田）、三生（今井、大森）、三流（堀）、二物（坂本、

中村、野路）、二工（平鍋、八原）、一工（宮下）

日 程

日 月(曜)	日 程	交通	宿 泊
1 一月七日(日)	福井発～デンパサール空港着	JAL	デンパサール泊
2 一月八日(月)	デンパサール発～ジャカルタ着 ジャカルタ農業省表敬訪問	GA 専用車	ジャカルタ泊
3 一月九日(火)	西部ジャワ州知事表敬訪問 タンジュンサリ農業高校との交流	専用車	タンジュンサリ 農業高校泊
4 一月一〇日(水)	タンジュンサリ農業高校との交流 園芸農場・農村見学	専用車	ジャカルタ泊
5 一月二一日(木)	ジャカルタ市内観光	専用車	ジャカルタ泊
6 一月二二日(金)	ジャカルタ発～デンパサール着 バリ島内観光	GA 専用車	機内泊
7 一月二三(土)	デンパサール空港発～福井着	JAL	

第八回派遣団（平成二二年度）

期 間：平成二二年一二月一二日～一二月二〇日

引率者：浅野校長、吉田、田谷（コーディネーター）

参加生徒：三物（内藤）、三工（長）、三生（石川、前川）、二工（酒井）、

一物（宇野、塩田、高橋、山中）、一工（木村、齊藤、西谷）

日程..

日	月日(曜)	日程	交通	宿泊
1	二月二日(土)	福井発〜ジャカルタ着	GA	デンパサール泊
2	二月三日(日)	タンジュンサリ農業高校との交流	専用車	タンジュンサリ農業高校泊
3	二月四日(月)	タンジュンサリ農業高校との交流	専用車	バンドン泊
4	二月五日(火)	西部ジャワ州知事表敬訪問 ジャカルタへ移動	専用車	ジャカルタ泊
5	二月六日(水)	ジャカルタ農業省表敬訪問 ジャカルタ発〜ジョグジャカルタ着	専用車	ジョグジャカルタ泊
6	二月七日(木)	ポロブドゥール遺跡等見学 ジョグジャカルタ発〜デンパサール着	専用車	バリ泊
7	二月八日(金)	バリ島内見学	専用車	バリ泊
8	二月九日(土)	バリ島内見学	専用車	機内泊
9	二月十日(日)	デンパサール発〜福井着	GA	

第九回派遣団(平成二三年度)

期 間..平成二三年二月一日〜二月十九日

引率者..長谷川、齋藤、中山

参加生徒..二物(岩佐、森石、山口)、二工(今村、小林、戸川、松本)、二流(森、石井、田邊)、一物(定)、一流(岩見、野路)

日程..

日	月日(曜)	日程	交通	宿泊
1	二月二日(日)	福井発〜ジャカルタ着	GA	ジャカルタ泊
2	二月三日(月)	タンジュンサリ農業高校との交流	専用車	タンジュンサリ農業高校泊
3	二月三日(火)	タンジュンサリ農業高校との交流	専用車	バンドン泊

日程..

4	二月四日(水)	タンジュンサリ農業高校との交流	専用車	バンドン泊
5	二月五日(木)	西部ジャワ州知事表敬訪問 国立公園トレッキング	専用車	ジャカルタ泊
6	二月六日(金)	インドネシア農業省表敬訪問 ジャカルタ発〜ジョグジャカルタ着	専用車	ジョグジャカルタ泊
7	二月七日(土)	ポロブドゥール遺跡等見学	専用車	ジョグジャカルタ泊
8	二月八日(日)	伝統芸能鑑賞	専用車	機内泊
9	二月九日(月)	デンパサール発〜福井着	GA	

第七回インドネシア農業研修派遣報告書より

第七回派遣団 引率 宇野 智子

今回の研修に参加して、かけがえのない貴重な経験をさせていただきました。お世話になりました諸先生方、関係各所の方々、タンジュンサリ農業高校の皆様、インドネシア当局の方々には厚くお礼申し上げます。

さて、本校では毎年九月に、インドネシア タンジュンサリ農業高校より二名の留学生を受け入れております。私自身、昨年のイマン君、ヨセフ君、一昨年のアリフ君、テイナさんとは、彼らが大学の音楽好きであったことから、合唱同好会の活動を通して楽しい思い出がたくさんあります。福井で開催された国民文化祭にティーンズコーラス隊の一員として参加したことや、近畿高等学校総合文化祭に他校との合同で出演するため、神戸までの一泊二日の演奏旅行に出たこと、週末には自宅に招いてホームステイ、数々の思い出ができました。彼らの日本での滞在期間はたった三ヶ月と非常に短いものですが、その間に彼

らは実に見事に日本の生活に順応し、一方私たちも、彼らの明るく素直で礼儀正しい振る舞いや、学びに対する誠実で貪欲な姿勢にすっかり心奪われてしまうのでした。そんな素晴らしい若者の住むインドネシアという国、学校がいったいどのようなところなのかという興味と、そして何よりも彼らに再会したいという希望を胸にインドネシアに旅立ちました。

旅の二日目にジャカルタ空港に到着以来、イマン君、ヨセフ君は、先生方やインドネシア当局の方々に混じって私たちを出迎え、荷物を持ってくれたり、堪能な日本語や英語で通訳を務めてくれたりと、実に心強いガイドになってくれました。

いざ、タンジュンサリ農業高校を訪問してみると、褐色の美しい肌に真っ黒な大きな瞳をきらきらと輝かせた若者たちが、元気に私たちを迎えてくれました。「ワタシモニホンニキタイ!」「ニホンノウタシツテマス」「ワタシノナマエハ:」あつという間に生徒たちに取り囲まれてしまい、日本への関心の高さに思わず圧倒されてしまいました。国民の六割が農民であるインドネシアには、現在日本人オーナーが経営する農場も多数あり、日本の農業技術が導入されています。日本で農業を勉強するということは、彼らにとって国の将来を担う、とても重要なことであり、憧れであるようです。実際に生徒たちに接してみて、イマン君やヨセフ君がいかに皆の期待や羨望を一身に背負い、日本に来ていたかということは今更のように痛感いたしました。現在、タンジュンサリ農業高校で教鞭をとる先生の中には、かつて福井農林高校に留学したご経験のある方もいらっしゃいました。こうしてみると、日本とインドネシアのこうした地道な交流が、着実に実を結んでいるのだなあと実感いたします。

一方、本校の生徒たちも今回の研修を通して、実にさまざまな体験



をし、多くを学んだようです。単に異国に対する見聞を広げたというだけにとどまらず、異国を知ることによって日本を知り、自分自身を振り返るよいきっかけとなったようです。

日本が便利さや物質的な豊かさを追い求め、時代の先端を突っ走っている間に、どこかへ置いてきてしまったものが、切り捨ててきてしまったものが、この国には残っているという印象を受けました。それは、人に対する思いやりの気持ちだとか、礼節を重んじる気持ち、感謝の心、いつかもっと豊かになりたいと願って努力する真摯な態度といったものでしょうか。このことは生徒自身も強く感じたようです。彼らがそうだったことをしっかりと胸に刻み、これからの人生を歩んでいくこと、そしてできれば、自らの経験を広く多くの人に伝え、共感し合うことこそが、交流の意義といえるのではないのでしょうか。

このような事業には多額の費用がかかり、年々厳しい状況におかれているとお聞きしましたが、何とかして続いてほしいと願っております。次代を担う若者たちのささやかな交流が、両国に小さな種をまき、いつかその種が芽吹き、成長し、地面にしっかりと根を張り、美しい花や豊かな実りとなって、両国の友好関係の礎になってくれることを信じております。

二〇〇七年三月

特色ある福井農林高校の国際交流に思う

第八回派遣団 団長 浅野 清美

私の本事業の最初の引率は、平成一三年一月（第五回派遣）でした。まだ薄暗い、吐く息が凍り付くような朝、まだまだ多くの不安を抱えながらも、派遣生徒たちとの楽しく積み重ねてきた事前学習を元気の源にして南国の島へと出発したものです。

この年は、両校で友好協定が結ばれ、生徒や教職員の人間的資質の向上を目指した交流事業とし、両校の絆を揺るぎないものとなりました。田舎町に起きた大イベントであり、タンジュンサリ農業高校の生徒・教職員はもとより、農業省幹部が立ち会い、地域の住民はじめ西ジャワ州二三校の農業高校長も参列し厳肅な中に調印されました。交流を終えてバンドン市を離れる時、苦勞を讃えあって涙で抱き合う二人の校長の姿を見守りながら、民族や文化は違えども人間は皆同じ、情熱を持つて前に進めば結果は必ずであるのだということ学びました。

そして、平成二一年一月（第八回派遣）ちょうど一〇年の節目に再びタンジュンサリ農業高校を訪れることができました。その間、タンジュンサリ農業高校の生徒を毎年二人ずつ短期留学生として受け入れ相互交流を図ってきました。平成七年度、第一回派遣生を送り出してから長い年月、目標を見失わず、本校の揺るぎない農業教育の理念を受け継ぎ、生徒たちを教え導いてくださいました先生方の努力、PTA、農友会はじめインドネシア農業省や西ジャワ州の支援の賜と感謝した旅でもありました。

交流当初は双方の教職員も生徒たちもお互いに向き合ったらよいか戸惑いも多かったに違いありません。でも今回の派遣生たちは違いました。タンジュンサリ農業高校の大勢の生徒たちの歓迎を受けて到着するやいなや、両校の生徒とも高校生らしい快活な活動を展開し、

私たち大人の入る余地がないほどに打ち解け合った様子に胸の熱くなる思いでした。お互いの学校がコッコツと築き上げてきた、民族や気候風土、生活習慣などの国の垣根を越えた、人と人との真の交流がそこにありました。

今回の研修生は、本校の国際交流事業に絶大なる協力を頂いている「農園たや」の田谷徹氏はじめ、本事業に参加したことから青年海外協力隊員として活躍した先輩、海外研修を積んだ教員、さらにはインドネシア現地で海外青年協力隊員との懇談会など多くの国際感覚を身につける機会にも恵まれました。

こうした、貴重な体験から得られた国際理解という宝物を生徒たちはどう伝えるのかと考えたとき、派遣生自らの発信により、本事業のねらいを受け継ぎ、新しい交流事業へと進めるものと思われました。近年様々な事情から三年に一度の派遣事業になっていましたが、これなんとしても隔年派遣にしたいとの願いから、日頃から物心両面でご支援頂いている農友会、またPTAのご理解を得てきました。そして

- ① 今後一〇年間で五回の派遣をさせていただくこととしながら、途中成果の検証や国際交流の方向性をさぐる事としました。

- ② タンジュンサリ農業高校からの短期留学生の受け入れも隔年とし、相互交流としました。

奇しくも、インドネシアでは農業省の管轄であった全ての農業高校が、今後は教育省に変わっていく、農業高校も国際感覚を磨き上げるハイスクールへの変革を迎えているとのことでした。そのこともあってタンジュンサリ農業高校生から本校への派遣の仕方は不明確のところもありますが、平成二二年九月、タンジュンサリ農業高校のカル Deputy 校長との間で覚え書きを取り交わしました。平成二三年度（第九回派遣）では、先方の要望であった本校農業教員による授業も実現し、



また、平成二四年度のタンジュンサリ農業高校からの派遣生とは、本校の派遣生や生徒会執行部が積極的に関わり充実した内容になったと聞いております。本当に嬉しい。

私が校長として赴任した平成二〇年六月に、これまでに派遣した生徒・教職員一〇〇名を超える方々から、派遣された卒業生や関係者の皆さんに本事業の意義やねらいを確認し、今後の充実発展への道しるべといたく懇話会を開催しました。出席した卒業生からもやむなく出席できなかった卒業生からも「この体験が海外に目を向ける機会となった」「その後も海外研修に参加している」「仕事で辛いときこの研修を思い出し元気を出している」「もっと研修内容を膨らませるべき」など、その後の生き方に大きな影響力を持ってきたのだと確認しました。

「身を持って成す」本校教育の特色があちこちで花開いていることを喜ぶと同時に、ますます進む国際化に両校の生徒がアジアの一員として、「農の心」を持つ人間社会のリーダーとして活躍して欲しいと期待します。本事業が末永く続き、そうした国際感覚を身につけた人間の育成を図る「小さな種まき」であって欲しいと願っています。

思い出深き、インドネシア

第九回派遣団 引率 齋藤 浩一

第九回インドネシア農業研修生徒派遣事業は、一二月一日から二月一九日までの七泊九日間の日程で行われた。派遣に参加した生徒は一年生三名、二年生一〇名の計一三名である。ほとんどの生徒が海外旅行をしたことがないという状況のなか、事前研修はインドネシアの滞在経験が豊富な方々に日常会話を中心にした語学研修やインドネシア独特の文化についての基礎講座をお願いした。生徒たちは自己紹介やレセプションでの進行がスムーズにできるように熱心に質問をしながら取り組んだ。そして、事前研修で誰もがインドネシアの歴史や食、生活などに興味を強く持つようになった。

今回の派遣は、タンジュンサリ農業高校との友好協定を更新（二回目）する意味で重要であった。タンジュンサリ農業高校との交流時間を今までより一日間延長し、新たな取り組みとして実験実習の授業に参加すること、また福井農林高校教員による授業実践を行った。体験授業ではまずタンジュンサリ農業高校の演習林で植林活動を行った。インドネシアの森林は紙・パルプやパーム油の原料として大規模な伐採が続けられており、森林破壊が日々進んでいる状態である。伐採した木々から作られる原料・加工品が日本に多く輸出されているという話を聞いて、改めてインドネシアと日本との繋がりを強く感じることができた。そこで、少しでも森林回復の一助になりたいという思いで苗木を一本一本植え付けていった。畑ではインドネシア特産トウガラシの追肥作業を行った。タンジュンサリ農業高校では一年生が植付けから収穫までの一連の栽培管理を行っているそうである。生徒達は液肥の濃度計算をしてからペレット状顆粒を水に溶かし、タンジュンサリの生徒と共に一株ずつ液肥を施した。さらに、福井農林高校に留学



経験のある農家の方よりサボテンの接ぎ木実習やヤシの葉を利用した民芸品作りなども行った。両校の生徒はたどたどしいインドネシア語や英語、場合によってジェスチャーなどを駆使して互いに協力をしながら製作した。授業実践は世界規模の食糧危機の問題から福井農林高校での生産、加工、販売の流れを題材にしたプレゼンテーションを行った。タンジュンサリの生徒たちは熱心にメモを取りながら授業に参加していた。授業の最後には、東日本大震災直後の日本人の冷静で粘り強い行動や両国の農業生産物などについて意見や質問が出された。

タンジュンサリ農業高校での交流は、すべての活動でわれわれを本当に心から暖かく歓迎し受け入れていただいていることを強く感じる事ができた。お別れ会では歌や踊りなどを互いに出し合い、両校の友好をさらに深めることができた。予定の時間を大幅に延長して、最後には互いに涙ながらに別れを惜しむ生徒もいたほどである。

このように、インドネシア、タンジュンサリ農業高校の教職員・生徒の心のこもったもてなしを受けると同時に、生徒たちはその思いを真正面から受け止めて国境を越えた友好を築くことができたと思う。保護者の方や多くの先生方、そして協賛いただいた方々のご理解とご協力、また何よりタンジュンサリ農業高校の生徒、先生方の熱い想いによって今回の研修は無事成功裏に終了することができたのである。本当にありが

たく、感謝の念で一杯です。生徒たちには今回の経験をインドネシア、世界に対する視野を広げる契機とし、これから世界に目を向け活躍する国際人を目指して頑張ってほしいと願います。

国際交流について想うこと

農園たや経営・インドネシア語通訳 田谷 徹

これまで私は多くの時間を海外に埋めてきた。タイの農村ステイを皮切りに、中国、ベトナム、カンボジア、そしてインドネシアへ青年海外協力隊として赴任、さらにはインドネシアの大学院(修士課程)へ留学などなど。国内にいても、二〇〇二年の全国高校文化祭からはインドネシア語通訳として福井農林高校のインドネシア交流事業に、微力ではあるが関わらせてもらってきた。また二〇〇八年からは、タンジュンサリ農業高校卒業生を農業研修生として私の農園で受け入れている。そういった経験と立場から、国際交流について私なりに少し書いてみようと思う。

さて、国際交流と聞いて、まず何を思い浮かべるだろう。

それは、至極当たり前のことなのだが、国外の人々との交流であり、異文化との生の感覚での接点とも言えよう。この異文化との生の接点というのが、国際交流の醍醐味ではあるのだが、生の接点ゆえになかなか難しいこともある。何が難しいのか？それは、私たちが、異文化との接点の中で、常に自分の持つ「価値」が脅かされるからである。

国際交流の現場では、我々はそれぞれの文化的価値を基準に相手を見ている。そしてそれは相手にしても同じである。その文化的価値が似通っていれば、それほど脅えることはないのだが、大抵の場合、お互いの価値には大きな差異が存在している。客として招いたインドネシアからの学生が、日本側のもてなし料理に手をつけず、自分たちが

持つてきたカツプラーメンばかりを食べていた、や、インドネシアでは清潔だと考えられている左手でおしりを洗うトイレを「汚い」と言い切る日本人たち、などがその好例だろう。そしてその文化的価値の差異には、必ず優劣をつけてしまうのが人間の悲しい性ともいえよう。

私は、文化的な価値基準には優劣はない、と考えている。だが差異からくる自分の価値の脅威に対し、時として人は優劣論で乗り切ろうとする。それを助長してしまうのが、経済指標による優劣の存在である。発展途上国と呼ばれているインドネシアと先進国と呼ばれている日本、この両国の交流において、陥りがちになるのが日本的価値の優位論であろう。これは日本側が持ち込むこともあるが、インドネシア側がそういう視点でいることも多い。農業交流においても、経済指標で優位に評価される生産性、効率性、機械化、近代的技術のどの要素をとつても日本に軍配が上がってしまう。その文脈において、インドネシア側は学ぶ側になり、日本は教える側と役割がはじめから決められていたような交流になることが多い。しかしそれははたして正当な評価のありかたなのだろうか。化石燃料の大量消費と地球の環境破壊を指標に入れて再計算してみれば、何百年経けても何一つ減ることも足されることも無い、土地利用において幾何学的な美しさを持つ永續可能な農の営みを続けているインドネシア奥地の農民に勝るものはないのである。また社会的な面で考えれば、近所付き合いを面倒事とし、それを排除し続け、住んでいる地域がただ単に住んでいる場所でしかなくなった社会を作り上げつつある日本と、相互扶助の社会システムを美德として日々の暮らしの中で維持し、こまやかな人付き合いと心温まる社会を形成し続けているインドネシアとは、どちらがどちらを学ぶべきか、答えは明らかにも思える。

タンジュンサリ農業高校との付き合いの中で言えば、あちらの学校

では、生徒たちがグループを組み、そのグループに畑を提供するという教育プログラムがある。一年間の作付けから販売までを学生が計画を立て、実際に自分たちで栽培し販売するという。売上は、肥料や種代などを引いた残りすべてのお金が学生のものになるそうで、儲かったグループはそのまま卒業旅行に出かけ、儲からなかつたグループは何事もできず静かに卒業するのだとか。そのインセンティブもあつてか、このプログラムについて語る学生は実に生き活きとしていた。生徒のやる気を引き出す素晴らしい取り組みとまさに農業の実践といえる教育といえるのではないだろうか。インドネシアが学ぶ側、日本が教える側となつていては、こうした取り組みも我々は学べないだろう。

文化的価値の差異から生まれる恐怖心は、優劣論に支配されてしまえば、それはただ単に一方的な施しの関係でしなくなってしまうのだが、その反面、それを克服した先には、国際交流という生の接点でしか掴み取ることができない新しい文化や考え方、そして新しい地平に立つ視点を我々に与えてくれる力にもなりうるのである。

福井農林高校とタンジュンサリ農業高校との交流が、そういう形で続いていってほしいと個人的ではあるが、そう願ってやまない。

「福井農林高校国際交流の歩み」より

(二) インドネシア共和国派遣団懇話会

二〇〇八年七月六日(日)。本校農友会館「大地」にて、歴代のインドネシア派遣団の団員やこの事業にご尽力いただいた方々が集まり、それぞれの派遣を振り返り、今後のインドネシアとの交流事業に関する様々なご意見やご提案をいただいた。

第一回派遣団(H七)と第二回派遣団(H八)、第三回派遣団(H九)と第四回派遣団(H一一)、第五回派遣団(H一二)と第六回派遣団(H一六)、第七回派遣団(H一八)の四つのグループに分かれて、話し合われた。

①グループ

今の高校生全体が国際社会に関心が薄くなっていることを問題に挙げ、世界に関心を持ち、日本の農業の問題点についても深く考える契機とするためにも、この派遣の意義が大きくあることと確認した。体験からこそ得られる世界観・広い視野を持てる生徒を育ててほしい。一步踏み込んだ農業教育を農林高校でやってほしい。派遣生徒からみえる世界観の考察、受け入れ生徒から見える世界観の考察など相互の考察を報告し合い意見交換し合うなど、まだまだ学習は広がり深まるのではないだろうか。

②グループ

インドネシアとの交流は「物質面」ではなく「人」との交流であることこそが大切であるということの確認ができたようだ。インドネシアの人々の働く様子・目の輝き・純粋さなど派遣からだけでなく受け入れからも学ぶことができたことを確認した。また、派遣後どのように活かされたかを確認する会となったこの懇話会の継続を求める声が出た。

③グループ

派遣ではホームステイを入れ、現地の人との交流にもっと時間を使ってほしい。その際、意思疎通のために語学学習を充実すべき。また、派遣だけで学ぶものではなく、受け入れと派遣をリンクさせると学べる内容に深まりと広がりももてる。ASEAN諸国との結びつきは今後益々強まるので、インドネシアから学びとる(特に「食」がキーワード)姿勢を大切に、さらに関心を持ちテーマをもって派遣に行ってほしい。

④グループ

一部の派遣を全体へフィードバック(派遣の報告会・報告書)する必要がある。受け入れている留学生とも距離感があるので、留学生が学校全体と関われる行事の工夫が必要ではないか。

「福井農林高校国際交流の歩み」より抜粋

二 生徒留学関係

福井県高等学校生徒国際交流事業に参加して

生物生産科二年 酒井 隆文（平成一七年度卒業）

僕は一〇月下旬、中国交流事業に参加し、浙江省に行ってきました。行く前のイメージでは、中国は日本と全く違うと思っていました。しかし、中国の土を踏んだ時、雰囲気は違いましたが、見た感じは日本とほとんど変わらなかったです。空港では、文字が漢字ばかりで苦労しました。しかし漢字をみているとなんとなく意味はわかりましたが、つらかったです。また飛行機からおりて空港までのバスが変でしたが、高さがなく、地面スレスレのバスで、一〇センチくらいしか地面と離れておらず、すごく揺れました。街に入っても、見た目はやはり日本とあまり変わりませんでした。一日目は上海空港に着いてからの移動だけで終わりました。

二日目からは、主に杭州東方中学で生活しました。東方中学はとても広い敷地で、いろいろな設備があり、すごくきれいな学校でした。東方中学の生徒は日本語を勉強している人も多く、しかも上手でした。みんな日本に興味があり、日本のマンガやゲーム等が大好きだと言っていました。夜は一〇時に就寝の予定でしたが、話が弾み、夜中まで盛り上がっていました。みんなとても親切でおもしろい人達でした。また、運動神経もとても良かったです。東方中学には、バスケットボールや卓球をする場所がいたる所にあり、暇があればバスケットボールをしているようです。友好試合をりましたが、全く歯が立ちませんでした。運動神経が良いだけでなく、みんな勉強もできます。広い土地の中に、専門的な設備や教室が多数あり、とても勉強しやすい環

境になっています。体育祭等にも参加させてもらい、東方中学での生活が一番の思い出になりました。

中国は近年とても成長しているようです。中国に行った事で、日本の生活のしやすさ、豊かさなどがよくわかりました。

蒼林 第五二号 より抜粋

第一九回 F F J 米国派遣農業研修

米国派遣研修

生活科学科三年 尾崎 麻利江（平成一七年度卒業）

七月一三日から約三週間、私はアメリカ、カリフォルニア州のサクラメント市に行つて来ました。初めてのアメリカの地で、文化も言葉も違い、勝手の違うこともありましたが、研修の日が過ぎていくにつれて慣れて、アメリカに家族、友人もでき本当に良い経験になりました。お世話になったホストファミリーの方々は二軒とも、とても親切にして下さり、私はホームシックにかかることもなく楽しく過ごすことができました。

一軒目のホストファミリーは牛を八〇頭も飼育する酪農家のお宅で、私は初めて酪農体験をすることができました。ホストファミリーの家で初めて牛を見た時は本当に興味しました。私達がカルフォルニアを訪れた時期は、ちょうどフェアという牛や豚、羊などの競売やコンテスト等を行うお祭りの時期だったので、ステイ中はその準備の手伝いをさせてもらいました。牛を洗ったり、牛のための小屋にわらを敷いて寝床をつくったり、暑い中、外での作業が続きましたがあまり苦ではありませんでした。二軒目はワイン農家の方で、ぶどう畑の見学やワインのボトル詰めをやらせてもらいました。カルフォルニアの雄大な土地一面に広がるぶどう、アーモンド畑を見た時は感動のあまり言

葉も出ませんでした。均等に並んだぶどうやアーモンドの木々が何十メートルも先まで延々と続く大地、それがすべて人の手で作られたのだと思うと、圧倒され、食い入るように見続けていました。私はこの時ほど百間は一見にしかずという言葉を実感したことはありませんでした。

見るもの、やることすべてが初めてで改めて日本との生活の違いを肌で感じました。自分の視野の狭さ、世界の広さを感じたので、今後も多くの人に参加して欲しいと思っています。

蒼林 第五三号 より抜粋

スウェーデン留学

初めての海外☆スウェーデンを訪れて

生活科学科三年 出口 美咲（平成一七年度卒業）
七月二五日～八月二六日までの一か月間、私はライオンズクラブを通して派遣していただきました。スウェーデンを選んだ理由は、将来福祉に携わりたいと思っており、実際に福祉を見たいと思ったからです。到着してすぐ、他国の同年代の人々約三〇人と二週間生活するキャンプに参加しました。

八月九日からの五日間は、Schieckさんの家にホームステイをしました。自然が美しいところでした。スウェーデンでは、男性も家事をすることが当たり前で、お父さんも料理やお菓子をよく作ってくれました。八月一五日からの一〇日間は、Swingさんの家でお世話になりました。ここでは親戚と一緒に、お茶会やパーティーなどをしてもらってなしてくれました。休日や余暇は、家族と過ごすことを大切にすることができ、たくさ

んの思い出が残っています。家族を大切にすることは、相手を思いやる優しい心を持った人を作り、それが福祉国家となる基盤になっていると思えました。

福祉の面では、いくつかの施設や町のバリアフリーを見ることができました。さすが福祉国家と言われているだけあって、ショッピングセンターには、ベビーカー専用駐車場まであることに驚きました。障害児が普通学校に通うことができるため、校内は段差が無く、自動ドアがいたる所に整備されていました。町では障害を持った方を多く見かけました。それは町のいたる所がバリアフリー化されているからだと思います。スウェーデンの人は、私が道に迷っていた時、優しく声をかけて下さいました。日本人は、言葉が話せない、外国の方と壁を作ってしまうのではないかと思います。しかし、それは言葉に壁があるのではなく、心にバリアがあるのだと気付きました。これは、日本人同士でも言えることだと思います。だから、心のバリアを取り除くことで、人とのコミュニケーションが親密になり、豊かな社会を作る土台になるのではないかと思います。今回一か月ではありましたが、いろいろなることを経験し、多くのことを吸収することができて良かったです。この経験を今後に生かし、社会に貢献していきたいと思っています。

蒼林 第五三号 より抜粋

私は高校三年生の夏休みに三週間、日本学校農業クラブ連盟が主催する、F F J米国派遣農業研修に参加しました。アメリカの農業はどのように行われているのだろうか？日本の農業とどう違うのか？私がその派米研修に興味を持ったのは、そんな些細な疑問からでした。

この派米研修では、アメリカの農業の事や生活習慣、文化についてまで幅広く学ぶ事ができました。農業の違いで一番強く感じた事は、アメリカの農業と日本の農業が正反対の考えで行われているという事です。アメリカの農業は、「質より量」を重視して、広大な土地で人が手を加えずに、大型機械や農薬を使い、大量生産しています。逆に



日本の農業は、「量より質」を重視して、狭い土地でも一つ一つ丁寧に、農薬をあまり使わずに手間を掛けながら作っています。それというのも、最近日本は消費者の間で、安全・安心が強く叫ばれ、重視されているからだと思います。消費者は、少し高くても、新鮮で安心して食べる事ができる物が良い、と考えています。その為に、近頃ではトレーサビリティやエコファーマーなどといった、生産者と消費者が結びつくような制度



割だと思えます。おいしくて新鮮な野菜を安価で買いたいと思うのは、消費者なら誰もが思う事です。アメリカの農業の良いところは、全て機械化で、安価で大量に生産する事ができることです。また、生産者が手を掛けないので、農業をしていても時間にゆとりがあり、家族と過ごす時間や趣味に費やす時間がとても多いことです。日本の農業の良いところは、作物を丹精こめて丁寧に生産しているところです。さらに近年は、農薬や化学肥料をあまり使わずに、消費者の健康にも配慮されているということも挙げられます。日本の農業も、アメリカのような広大な土地で農業ができるようになると、安価で新鮮な野菜を大量に生産する事ができると思います。その為に、狭い土地で農業をしている人が土地を集中化させて広大な農場を作り、生産者が協力して、今までのように丹精こめて生産する事ができれば良いと思います。そうすれば、生産者は消費者の望む、おいしくて新鮮で安価な野

業を、自信を持って作っていく事ができると思います。そして、消費者が家族と一緒に、健康で楽しく食事をする事ができると思います。

蒼林 第五四号 より抜粋

マレーシアでのホームステイを終えて

生活科学科三年 前川 あいこ（平成二二年度卒業）

私は高校二年生のときに福井ライオンズクラブ主催の英語スピーチコンテストに出場し、賞をもらいました。そして、高校最後の年に夏期派遣生として七月二八日～八月二六日の約一ヶ月間マレーシアへ行かせていただきました。その間にクアラルンプールとイポーに二週間ずつホームステイをし、同じくマレーシアにきている派遣生と二泊三日のキャンプにも行きました。



この派遣事業では、マレーシアという見知らぬ土地で多くの人と関わり合いました。もちろん日本と習慣などは違いますが、そこにいる

人達と私たちにはなんの違和感もないと改めて思いました。腹が立つたら怒り、嬉しくなったら笑います。当たり前前のことですが、身を持って強く感じる事ができたことが今回の旅での収穫のひとつです。もうひとつは自分ひとりで日本語でない言葉を使い、全くの知り合いがいない状況で過ごした事によって自分が大きく成長できたことです。正直、もっと消極的になってしまいかと心配しました。しかし実際は全く逆で、

むしろ日本にいるときより活動的になり、臆することなく、多くの人と接することが出来ました。そして一ヶ月経ったときにその大きな自信となりました。こうして得たものは自分の思い出だけにとどまらず、この先へとつなげることが出来ます。私は高校卒業後、大学で福祉の勉強をし、将来は多くの人と関わる仕事に就きたいと考えています。私は人との関わり合いの中で他者を認め、その気持ちに共感する広い心が大切だと思っています。私は今回の派遣事業でさまざまな人と出会い、それまで持っていた自分の視野が広がりました。同時に多様な価値観に直接触れることで、自分とは全く違う価値観も自然に受け入れることが出来るようになりました。

自分が外国人として扱われ、アウェイな環境のなかで受け入れられることにもまた喜びを感じました。現地での生活はもちろん、それを通して人との関わり方を改めて学ぶことができたマレーシアでの経験は、私にとって、とてもかけがえのないものとなりました。

蒼林 第五七号 より抜粋

JICAエッセイコンテストに参加して

西谷 光史（平成三三年度卒業）

高校三年生の時、私は「JICAエッセイコンテスト」に自分の思いを書き示した作品を応募し、受賞することができました。

元は、学校農業クラブの意見発表、区分「環境」での発表内容でした。一年生の時に参加したインドネシア研修で、素直に感じた状況を上手く打破するために、三年間学んできたことが生かせないかを書いて発表したものです。意見発表自体は、県大会は勝ち進み、北信越で終わりました。ある日、先生に意見発表の文章を応募してみないかと言われ渡されたのが、「JICAエッセイコンテスト」の要項とたく



さんの原稿用紙でした。最初は入賞できないだろうと思いつながら書き、先生に提出しました。結果発表まで長い期間があり、入試や農業クラブの農業鑑定競技の勉強に明け暮れ、すっかりコンテストのことを忘れていました。冬休み、私の携帯電話に先生から電話があり、「入賞おめでとう」と言われましたが、何のことだかさっぱりで、JICAと聞いた直後に思い出しました。インターネット上で結果が掲載されていると知り、すぐに確認しました。おそらく五回以上は確認し、内心ニヤニヤしていました。

入賞して数か月後、東京で受賞式がありました。会場に一番乗りし、式が始まるまで他の受賞者が出した作品を読んでいた。優秀作品を書いた全員が外国と関わりのある人でした。差別問題や環境問題など、世界の現状を訴えたものがあり、他の受賞者でも東日本大震災に関する内容が多くありました。中高の部門があり、中学生の文章力、

語学力に圧倒されました。いろいろなことを考えているうちに式が始まり、優秀賞を頂きました。受賞式の翌日、副賞のフィジー海外研修についての説明を受けました。私より年下なのに、ODAの正式名称を英語で言ったりしており、自分が恥ずかしくなったり、もっと勉強しなくてはと思わされたりした一日でした。

結局、私は様々な事情からフィジーへの研修へ行くことを断念しました。せっかくの機会でしたが、

自分で決めたことであるため、後悔はしていません。大学のほうでもUAEで砂漠緑化のプロジェクトに参加できるので、大学四年間のうちに行こうと考えています。作品の内容では海外で働きたいと書きましたが、将来は何をしようかははっきり決まっています。しかし、自分の得た知識や技術を他人に提供できることをしていきたい。そのために農業土木だけでなく工学的分野も取り入れて勉強に励んでいます。

JICAエッセイコンテストは、私に国際性の意識を高めるとともに、将来の自分を見つめ直させてくれたきっかけの一つです。応募を勧めてくれた先生に感謝しています。

これから厳しい現実を見ていくかもしれないですが、文章を書くのが苦手な私が、優秀賞に入ったことを思い出して、自分ではできると言い聞かせて、頑張っていきたいです。

三 その他の国際交流活動

平成一六年度

- ・英語弁論大会 第一部 最優秀賞 二生 出口美咲
- ・"For Others, For Ourselves" (平成一七年スウェーデン派遣)
- ・英作文コンテスト A部門 最優秀賞 二流 竹澤 南
- ・"Good luck!?" 優秀賞 一物 土田礼子

"One flower"

- ・福井県高等学校生徒国際交流事業(中国派遣) 二物 酒井隆文
- ・国際交流体験発表会 三物 谷本沙耶香

平成一七年度

- ・英語弁論大会 第一部 最優秀賞 二物 土田礼子
- ・"Farming or Harming?" (平成一八年マレーシア派遣決定↓辞退)
- ・英作文コンテスト A部門 最優秀賞 二生 中村有希
- ・"My Adventures in Wonderland"

- ・第一九回FJ米国派遣農業研修 三生 尾崎麻利江
- ・国際交流体験発表会 三生 出口美咲

平成一八年度

- ・FJ米国派遣農業研修 三物 土田礼子
- ・英作文コンテスト A部門 優秀賞 三物 土田礼子
- ・"The best summer vacation"

平成二〇年度

- ・英語弁論大会 第一部 最優秀賞 二生 前川あいこ
- ・"Appreciation and Happiness" (平成二一年マレーシア派遣)
- ・英語弁論大会 第一部 優秀賞 一流 藤塚 円

"Love is the Best Medicine"

平成二一年度

- ・英語弁論大会 第一部 優秀賞 二流 藤塚 円
- ・"A World Without Nuclear Weapons"

平成二二年度

- ・英語弁論大会 第一部 優秀賞 一物 山口怜奈
- ・"When I am older, I would like to..."

- ・国際交流体験発表会 二物 山中愛海子

平成二四年度

- ・英語弁論大会 第一部 第三位 二流 齋藤勇介
- ・"Do Not Be a Frog"
- ・国際交流体験発表会 二流 岩見美子 野路莉沙